
ダイキのトレーナー日和

カンバン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダイキのトレーナー日和

【Nコード】

N51160

【作者名】

カンバン

【あらすじ】

最初のポケモンが…なんとサイホーン！？
しかも僕が捕まえるポケモンは皆おかしくて…

マサラタウンにて(前書き)

短いです!!

マサラタウンにて

俺はダイキ！

ポケモンマスターを目指してるんだ

今日は博士にポケモンを貰う日だ

幼なじみのドラゴン大好きワタルはヒトカゲをもらったらしい

僕は何を貰おうかな……

フシギダネかな？

「オーキドはくかせっ！！ダイキです！」

カップ麺食べてたオーキド博士は驚きながら言った

「おお！ダイキ君か…待ってくれんか…今ポケモンを…ポケモンを…」

は…博士？

ありますよね？

「んん？そう言えばナナカマド先輩の所に送ったのか…ありゃりゃ！？」

……博士？まさか…

「コイツも？…ダイゴ君へのプレゼントにしたんじゃったな…どこじゃあ！？」

………何も言えない

暫くして博士はへ口へ口になってモンスターボールを引っ張り出した

「こ…これが君の相棒じゃ…た…大切にするんじゃぞ…（これしか見付からなんだぞ…）」

そしてそのボールが輝きだして……！

「サイホオオオオンー！！」

「何でだあああああー！！」

こうして…僕の冒険が始まった

「ホオオオオンー!!」

「何でサイホーンなんだ…」
いつか博士つぶす

サラバ！！ワタル君（前書き）

短い代わりに早いです

ワタル君は四天王のワタル君です

サラバ！！ワタル君

「……なんでサイホーン」
パワフルだけどさ

その時だった

「やあ！お前は何を貰ったんだ！ダイキ」

赤いマントをなびかせたワタルが話し掛けてきた

「いやあ…その」

するとワタルは言った

「よしっ、ポケモンも手に入れたしな…勝負しようぜ！」

……はい？

「いけっ！ヒトカゲ！！」

赤い炎を尻尾に灯すトカゲが現れた

「カゲエ！！」

……かわいい

でもバトルはしたくないな

そう思った時…勝手にボールが開いた！

「ホオオン！！」

サイホーン…何故勝手に…

「へっ…何だよそれ」

「……サイホーン」

そう呟いた時だった

「サイホオオオオオン！！」

勝手にヒトカゲに体当たり！

「カギヤ！？」

ああ…何で…何で止まらない！？

「うわっ！？こっちくん…ながあぶぶっ！！」

ワタルが轢かれたあああああ！！！！！！

「ワタル！しっかりしろワタル！」

「ホオン！！！」

ズビツとポーズを決めるサイホーン

「アホかああああああ！！！！！」

僕の冒険は始まったばかり…

何なのコイツ…

「ゲットさせろや!？」

僕はキレた

「ホオン？」

頭を傾げるサイホーンだが腹がたつ

コイツは想像以上に強かった

だが…輪をかけてアホだ!!

むしとり少年とタンパン小僧にバトルを挑まれ、キヤタピーやコラ

ツタごとにはね飛ばした

連れ歩いたら何故か登れない筈の段差を体当たりでぶち壊す

居合い切りで切る筈の木すらへし折った

そしてポツポが出れば角でぶち抜き、コクーンが出たらはね飛ばし…

まともに捕まえたのはキヤタピー（死にかけ）とナゾノクサ（枯れ

かけ）

もう直ぐトキワシテイ…

どうなるんだらう…

結果

トキワシテイについてテンションが上がったのか、ポケモンセンタ

ーの壁に突進をぶちかまし壁を崩落させながらはしゃぎ回る

ジョーイさんとジュンサーさんの説教を喰らった…

修理代は博士につけとこう…

いよいよだ…

さて…僕はニビシテイにいる
トキワの森？

サイホーンに引き吊られてラクラク突破しました
さて…ちよつと不安なので手持ちを確認

1 サイホーン
多分一番強い

2 ワンリキー
つい最近捕まえた

空手チョップが使えるのがありがたい
3 ナゾノクサ

つるのむちが使えるので役に立ちそう
4 トランセル

取り合えず何もできない

さて…行こうかジム戦に！

「よくきたな…俺はフガク！石のフガクだ!!」

カッコいい繋ぎ姿のおじさんがポーズを決めた
けど何故か背中に四歳くらいの男の子をおぶっている……

「……………どうしておぶっているんです？」

「コイツはタケシって言うんだが……………ツレが逃げてな…
石だけにメチャメチャ重い話が来た!？」

「まあいいか…ボウズ？準備はいいか!？」
お互いに構える

そして……………初めてのジム戦が始まった！

「サイツ!!!」

頷いたサイホーン…そして…

「ホオオオオオオ!!!」

突っ込んでいった

「いや!命令聞けやアアアアア!!!」

魂のシャウトだった

何処まで脳筋!?

「ホオオオオオオ!!!」

ドツゴオン!!!

「イワアツ!?!」

凄まじい速さの突進でイワークがバランスを崩した

そして…

「ホンホンホンホンホンホンホンホンホンホンホンツ!!!!!!」

!!!!!!」

顔面に踏みつけのストンピング!

「いや!お前もかアアアアアアア!!!」

フガクさんと揃って叫んだ

こころがひとつになった!!!

結局…バッチは手に入れた

フガクさんが何も言わず僕の目を見ながら態度で語った

『……いろんな意味で苦労するな…頑張れ』

涙が出るほど嬉しかった

こうして僕はハナダシティを目指すのだった…

二匹のGBPグレートバカボケモンを連れて…

コイツら好きなだけだな…若いのに胃薬が欲しくなるよ

シロナとの出会い

おつきみやま…ピッピが出ることで有名な地域だ

さて僕はここでレベルアップを目指してトランセルを出す、ワンリキー、サイホーンにチェンジするのリピートを繰り返した
そしてバタフリーに進化したんだ！！

だけど…やっぱりおかしい

「フリーィ？」

グレた

言うことは聞くのに態度がめちゃくちゃ悪い

ん…ボールが光ってる？

「出る…ワンリキー！！」

ピカッと光った時

「ゴォ！！」

サムズアップをするゴリキーがいた

「なんで進化してるんだああああ！！！！」

おつきみやまに絶叫が響いた

明らかに序盤なのにオーバースペックなモンスターになっちゃった

！！

「リイイイイキイイイ！！」

サイドチェストやマツスルポーズを取りまくってるゴリキー…

「フフツ…随分と愉快的なポケモン達ね」

ふと声が響いたので振り替える

そこには綺麗な金髪の黒い服の少女がいた

「……君は？」

少女は微笑みながら答えた

「私？私はシロナ…雪深きシンオウのトレーナーよ」

シンオウ地方？随分と遠いな

「僕はダイキ、マサラタウンのトレーナーさ…どうしてここに？」

シロナは言った

「そうね…ナナカマドって博士に連れられて観光ね」

ナナカマド？オーキド博士の先輩だったかな

それから僕達は暫く他愛ない話を楽しんだ

「ああ楽しかった…私はもう行かなければね…また会いましょうダイキ」

シロナは手を降りながら去っていった

「ええ！今度はバトルをしましょう！！」

僕はまた時間が掛かっても彼女に会えると妙な確信があった

数年後全国ポケモンリーグ決勝トーナメントでそれは現実となる……

追伸

ハナダシティのジムリーダーはゴリキーがトサキントを壁に叩き付ける

スターミーとヒトデマンをフリスビーの如くぶん投げて勝ってしまった

ジムリーダーはひきつってた

笛要らねえ…

クチバシテイ…鮮やかな海が眩しい

「フリー…」

何故かバタフリーが黄昏ている

しかもポーズを決めて

「ゴォ！ゴォ！ゴォ！」

ゴリキーは逆立ちして爽やかな笑顔で腕立て伏せしている

…暑苦しい

そしてサイホーンは…

「ホオンガア！！！」

クチバジムの入口近くのいあいぎりで切る細い木を跳ね折った

「……ひでんマシン要らないじゃん…」

この分ならかいりきも必要ないかも知れない

そう思いながらジムに入った

「レッツ　ロオオオオオツク！！！！！」

「マチス！マチス！マチス！」

なんだろう…間違えたかな

ふと横にはカンバンが

マチスはライブ中です

挑戦者は暫くお待ちください

……ありがよ、少し散歩しよう

ポケモン達をボールから出し一緒に歩く

すると…デカイポケモンが寝ていて道を塞いでる

「あちゃ〜どうしよ…取り合えずもど」ホオオオオオン！！」「オイ

イイイイイ！！！」

突進で横っ腹に角をブツ刺した

「カアアアビィィイ？」

やべえ…無茶苦茶怒ってる

「取り合えず逃げ「ホオオオオオン！！」アホかアアア！！」

サイホーンは突っ込んでいった

デカイポケモンが暴れる

サイホーンが突っ込む

デカイポケモンが怯む

サイホーンが角で突きまくる

……捕まえてみるかな

「いけっ！スーパーボール！！」

スーパーボールがデカイポケモンに中りガタガタ揺れて…止まった

こいつは…カビゴンか

にしても…なんか手持ちがおかしいな

こいつもおかしかったりするのかな…

まあいいや…ジムに行こう…

マチスさあぁん!! (前書き)

マチスさあぁん!!

マチスさあああん!!

「オーライ!ボーイ私がマチスです!!カモオン!!」

ノリノリのジムリーダーマチス:サイホーンなら封殺できるけど…カビゴンを試してみようかな

「ゴー!エレブー!!」

マチスがエレブーを繰り出し

「いけっ!カビゴン!」

そしてカビゴンは飛び出して…

「カア〜ビィ〜」

地面の砂をつかんで投げて片足を大きく上げて…

ドスン!!ドスン!!

四股を踏んだ

「お前も違うんかイイイイ!!!!」

カビゴンは相撲取りだった……いやマシだけどさ

「レッツファイト!!」

エレブーがかみなりパンチをしながら突っ込んできた

「カビイイイイ!!!!」

ハツケヨイの姿勢からカビゴンが一気にすてみタックルで飛び出し

「エレブアアオオア!?!」

ぶつかったエレブーが一気にすつ飛び

「ワツツ!?ノオオオオオ!!!!」

マチスを巻き込んで吹っ飛んでいった

「……………いや…これは…」

マチスさあああん!!

ゴメンナサイイイイイ!!

「カビ」

何故か勝利の舞いを踊るカビゴン……

「弱くてもいい…マトモな…マトモなポケモンを…」

僕の叫びはジムにむなしく響いた

あとで泊まっているポケモンセンターにバッジが手紙と届いた

『スモウ イズ グレイト!!』

訳が分からない

初の取り調べ

「ええっと…つまり？」

ジュンサーさんが困惑している

「はい…サイホーンが走り出してぶち抜きました」

ジュンサーさんはコメカミがびくびくひきつつてる

「それで交番をぶち抜いたのね…」

ついにジュンサーさんに取り調べを受けました…

サイホーンが虫を追い掛けて交番をぶち抜いた…

「私もね…怒りたくないけど、貴方のサイホーン、ネジがどこか外れてないですか？」

外れてる

多分一番致命的な所が！！

「修理代は…「オーキド博士がサイホーンをくれました」分かりましたオーキド博士に請求します」

このあとも色々言われてしまった…

「ホン？」

ホンじゃねえよ！！

「……進化すれば頭が良くなるのかねえ…」

ピカッ！

「いや！？するんかい！いいいいいい！！！！！！」

サイホーンが輝き…そして…

「サイドーン！！！！！！」

サイドンになった…

おかしいよコイツら…

取り合えずタマムシジムへ行こう…

お前だけが頼りだよ…（前書き）

次回…壊滅！？セキチクジム！！

お前だけが頼りだよ…

カオスの現状をぶち壊したのは…彼だった
いきなりボールから飛び出したカビゴンだ！

「カビ？」

止めればいいのか？

そんな風に僕を見てきた

「頼む！カビゴン！」

カビゴンはゆっくり頷き息を吸い込んで…

「カビイイイイイイイ！！！！！！」

はかいこうせんで薙ぎ払った！！

「リギアア！？」

吹っ飛ぶゴーリキー

「ドンガア！？」

引っくり返るサイドン

「ナツシ…ナツシイイイ！！」

巻き込まれたナツシー

もうもうと土煙が立ち上る中…カビゴンがサムズアップをしてきた

「カビゴン！GJ！！」

はじめてまともなポケモンかも！

いいじゃないかスモウ！！

「あの〜」

声がしたので振り向くと…はかいこうせんの余波を浴びたジムリー
ダーがいた

「まだ終わってません！」そういつて彼女はモンジャラを繰り出した

「カビゴオオン！！」

しかしメガトンパンチ…ならぬメガトンつっぱりで飛んでいく…

「モジャモジャ…」

……つええ…

「……アハハハ」

ジムリーダーはひきつりながらバッチをくれた
次はどのジムにいかうか…

オマケ

『皆さんジムリーダーにお知らせします、最近クラッシュヤーと呼ばれるトレーナーが快進撃を続けています。トレーナーの人柄はとも良く好感が持てますがポケモン達が強力な上トレーナーすら持て余す程頭のネジがブツ飛んでいます！努々気を付けてください……ニビ、ハナダ、タمامシジムリーダーより』

この手紙が残りのジムへ送られた

しかし…セキチクジムにヤクザバタフリー、エキセントリックサイドン、フリーダムゴーリキー、SUMOUTORIEカビゴンの魔の手が迫っていた…！（ナゾノクサはまともな為に神経がまいり逃げ出した）

セキチク壊滅（前書き）

出来ました！

書き忘れてましたがこの物語は過去の物語です

なので一部のキャラは当分出ません

ついでにヒロインはいます

まだまだ出番は先ですが

セキチク壊滅

常備薬は胃薬

心は擦りきれ、胃は崩壊

幾度の試合を越えトラウマ

只の一匹も敗北はなく

只の一匹もまともじゃない

トレーナーは急ぎシヨップに走り胃薬を買い漁る

全ては胃を守るために…

その胃は胃潰瘍の寸前だった

(アンリミテッド・ストレスワークス、無限の重圧)

「フリーイイア!!」

バタフリーが所狭しと飛び回りモルフォンをボコボコにしている

近くになれば体当たり

遠くになればサイケこうせん

「フオオオオン(泣)!!」

逃げ回るモルフォンを徹底的に痛め付けるバタフリー…その姿は正

しくヤクザだ

胃が痛い…

「フオオオオ……」

あ、やっつけた

「……ふ…フアフアフア!まだよ!ベトベトン!!」

ジムリーダーのキョウウさんがベトベトンが繰り出された

「いけっ!ゴーリキー!!」

出したゴーリキーはいきなりジャンプして

「リイキイイイ!!」

外れたがベトベトンの真横にクレーターが出来た

「べ…ベトベトアアア!!」

ベトベトンは逃げ回るように逃げ出した

しかしゴリキーは後ろから殴りまくる!!

ベトベトンは必死に避ける!

ジムの壁や床がボロボロになる…

「ジムがああああ!!」

キョウさんが叫んだ時ベトベトンが少し気をとられた

その瞬間

「リイイイ!!」

ベトベトンにゴリキーの蹴りがぶち当たり壁に飛んでいった……

「ま…まだよ! スピアー!!」

スピアーがブンブン飛びながら現れた

「……頑張れサイドン!!」

出現したサイドンはいきなり角が回転している

まさか…

「ドオオオオン!!!!!!」

つのだりル!?

「スピイイ!?!」

スピアーにぶち当たりスピアーは倒れた

ただどサイドンは止まらずに突き進み…ジムの壁を吹き飛ばした

「…なああにやってんだああああ!!!!!!!!」

このあとキョウさんは泣きながらバッチをくれた

アンスと言う小さな女の子がポンポン体育座りのキョウさんを慰め

ていた…

罪悪感が……止まらない

ナツメ 華麗にスルー

「く…… 未来は変わらない」

ナツメは何回も未来を見た

しかし一回目はフーディングがサイドンのストーンピングでボコボコにされていた

二回目はゴリキーに間接技をかけられ敗北

三回目はカビゴンのつっぱりでバリヤードが場外へキラーンだった…

最年少のジムリーダーの誇りがあった

同年代の少年に負けるのはいい

しかしジムが壊れるのは耐えれない

悪いのは彼ではない

頭がブツ飛んでるポケモンが悪いのだ

よってナツメは決心した

「君がダイキか？」

ジムに入った時アドバイザーから話し掛けられた

「はい、そうですけど」

するとアドバイザーがバッチを渡してきた

へっ？

「ジムリーダーからだ、貴方は悪くないけどジムが壊されて負ける

未来しか見えないので差し上げます…だそうだ」

呆気なく手に入れてしまった

ラッキーだ！

じゃあグレンタウンにいこう！

マサラタウン

「止めてくれえええ!!」

俺はかいパンやるうさ

遠くの方から絶叫がする

ここからグレンタウンへなみのりでいかなきゃいけないが…どうしたんだ?

すると…俺は思わず叫んだ

「嘘だろオオオオ!!!!」

カビゴンがバタフライで爆泳している

トレーナーのガキは振り落とされそうだ

「カビイ!!カビイ!!カビイ!!」

水を猛然と掻き突き進むカビゴン

タツツーやらメノクラゲもビビって出てこない

悪いけど俺も勝負する気になれない!!

だつてこええもん!!

「スピードダウンしろオオオ!!!!」

トレーナーのガキの指示を聞いたカビゴン

「カビイイイゴ!!!!」

更に加速した!!なんで!?

「嫌だアアア!!助けてエエエ!!!! Help me!」

そのまま大波を立てながら突き進んでいった

………頑張れトレーナー!!

ナツメ 華麗にスルー（後書き）

いずれはワタルやダイキ達に伝説のポケモンを持たせようかな
パンクロッカーなレジギガスとか女好きのダークライ、マイペース
過ぎるヒードラン、ゴルゴっばいクレセリア…ああ！妄想が止まら
ない！！

新たな問題（前書き）

ストレスと言えはこれです
ね爆笑して貰えれば嬉しいです

新たな問題

「なんじゃと!?!」

岩ポケモンは熱に強い
じやがマグマに弱い筈…

ワシはダイキ君が繰り出したサイドンをブーバーが苦勞して…ホントに苦勞してグレン山の火口に突き落とした
じやが!

「サイドン……」

ワシは思いつきり叫んだ!

「何で露天風呂気分なんじゃあああああ!!!」

ここまで非常識なポケモン達を見たこと無いわ!

大体!なんでカビゴンがジムの屋上をぶち破って降ってくる!?

しかもトレーナーのダイキ君によるとバタフライでマサラタウンから爆泳しグレンタウンにきた途端水面から大ジャンプをし見事な放物線を描いて着地したらしい……ダイキ君は半泣きを通り越して死にかけじやつたし…精神的に

彼は煤けとる

どんよりしたオーラを纏っておる

あの年頃の少年にしては白髪が多いがそれが原因か?

あのペースなら15になるころは総白髪かスキンヘッドじゃ…恐ろしい

そう思つとる間にサイドンが上がってきよつた!!

「サイドオオオオン!!!」

岩を力任せにぶん投げる岩雪崩

ブーバーはギリギリかわしたんじやが…ヤクザキックでブツ飛ばしよつた

「そんな技あるかアアアアア!!!」

ギャロップは角で吹き飛んでウィンディはパンチでノックアウト

…ドラゴンポケモンと戦つとる見たいじや

圧勝した

グレンジムもブツ壊してしまった

カツラさんは僕にバツチを渡しながら言った

「少年、頑張れ…そして髪の毛の手入れを怠るな！若い身空でワシみたいなフラッシュ頭になるんじゃないぞ！！！！」

え…胃じゃなくて髪もヤバイ！

僕の髪はくすんだ金髪だ

バツチを貰った後ポケモンセンターの鏡でよく見ると…アチコチに白髪が！！

助けてくれエエエエ！！！！

ダイキは僅か10歳にして髪の毛と胃に悩ませられる事になった…

ワタル…お前もか（前書き）

今回はギャグ少な目です
後書きにアンケートがあります

ワタル…お前もか

ラストのジムはトキワシテイ
いよいよ終わりが見えてきた！

意気揚々な見た目に反して胃薬を飲み干し向かうと

ジムがない

へ！？まだ何もやってないよ！

カビゴンは大人しくついてきてるし

ゴリキーは「やらないか」とか言ってきたトレーナーを

スリーパーごとボコボコにしたけどボールの中だ

もっとも気を付けなきゃいけないサイドンは鎖を巻き付けて嚴重に
封印してる

バタフリー？アイツはヤクザなだけで乱暴だけど命令すれば言うこ
とは聴く

何故だ？

するとワナワナと震えているジムリーダーがいた

「あの…何が？」

ジムリーダー…サカキさんは吐き捨てた

「クソッ…あのワタルってガキ…許さん！！」

ワタル！？アイツはマトモだろ！！

「その…ワタルって奴が何を？」

するとサカキさんはボソボソと喋りだした

「あのガキはな…たった一匹の見たこともねえ緑のなげえドラゴン
ポケモンでジムを壊滅させやがった…何なんだありゃ！？」

ワタル…お前もサイドンみたいなポケモンを？

「何でも各地で快進撃を続ける幼馴染みに対抗するためにホウエン
まで行って捕まえたとか言ってたな」

………僕のせいかアアアアア！！！！！！

これ遠回しに僕が原因だアアアアア！！！！！！！！

「ジム戦も出来ねえし…7つあるんだろ？くれてやる」
ポイツとバッチをくれた

いよいよポケモンリーグに行けるけど…なんか行きたくないな…
そのドラゴンポケモンとサイドンがぶつかったらエライ事になりそ
うだ

サカキさんはボソボソ何か言ってたけど僕には聞こえなかった

(……世界にはあんなポケモンが居やがるのか…欲しいな)
これが後のロケット団結成の原因である

ワタル…お前もか（後書き）

はい、ワタルはわざわざハウエンまで行って最強の一角を捕まえました

他のメンバーもパワーアップしてます

因みにバランスを合わせるためシロナやダイゴもパワーアップします

前書きの通りアンケートを取ります

もうすぐ第一部が終わり第二部が始まりますが…ダイキ君は痛んだ胃を癒すべくジョウトを中心に活動している設定なんです…第二部時の職業が未定です

この中から選んでください

1 新しく出来たジョウトリーグのチャンピオン

2 バトルフロンティアブレーン

3 その他

どれが良いでしょうか？

選んだ職業によって第二部の全地方合同トーナメント編の司会者の呼び方が変わります

因みにどの職業でもポケモン達は更にネジが飛んでますので胃を癒す事は出来ません

破壊神ダイキVS使籠王ワタル(前書き)

第一部完!!

今回もギャグ少な目です

後書きも読んでください

アンケートは1にしました

ご協力ありがとうございました

破壊神ダイキVS使龍王ワタル

「ふう〜お茶がうまいのう」

オーキド博士は1人のんびり茶を啜っていた
その時だった

「ウー！ハー！！」

ドガアンと言う音と共にボロボロの筋肉マッチョが乱入した

「な…なんじゃ！？シバ君か！」

四天王シバ…最強の格闘家でもあり超一流のトレーナーだ

「博士！説明している時間はない！ポケモンリーグ本部が壊滅する
！」

オーキド博士は湯飲みを落とした

「なんじゃとオオオオオオ！！！！」

シバの説明によるとワタルが繰り出すポケモン達は皆恐ろしく鍛えられておりその大火力でリーグ本部の闘技場に多大なダメージを与えた

そしてその後によつて来たダイキはポケモンに振り回されているがワタルと同レベル程度に鍛えられている

しかし、空中殺法で世紀末バスケをしてのけたゴーリキー、バタフリーのカテゴリに収まらない速さのバタフリー、イワークをハンマー投げしたカビゴン、極めつけはジュゴンのなみのりを食らい傷付きながらも倒れず大奮戦しつのドリルを当てまくったサイドン…シバは2人がマサラのトレーナーと知りイワークを使ってチャンピオンロードを突破し事情を聞きにきたのだ
その話を聞いてオーキド博士は言った

「…………あの子らは共に才能溢れるトレーナーじゃが…ここまでとは
のう……」

そして…ポケモンリーグ本部にたどり着いた時…もはやポケモンバ

トルではなく戦争が行われていた

「リュウウウー!!」

カイリユーが繰り出すはいこうせん

「カビイイー!!」

カビゴンの繰り出すはいこうせんがぶつかり合い爆発を起こす

「リイキリキリキリキリキリキリキリキリキリキリキリキリキリキリキリ

リ!!!!!!!!!」

ゴーリキーがメガトンパンチ百烈拳を繰り出せば

「リイザアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!」

リザードンもほのおのパンチとだいまんじで応戦する

「プテアアアアラ!!!!!!」

プテラがついてこれるか?とばかりにバタフリーを睨み

「フリー?」

キレたバタフリーがサイケこうせんをぶっぱなす

「レックウザ!!ドラゴンクローー!!」

「サイドン!!かいきだ!!」

そして総大将とも言える戦い

レックウザのドラゴンクローをサイドンは後退しながらもその剛腕
で受け止める

「ザアアアアアアア!!」

力を込め押しきろうとするレックウザ

「ドオオオオオオ!!」

手足を踏ん張りそうはさせんとばかりに押し止めるサイドン

ワタルのドラゴン軍団が天を裂き空を支配している

ダイキのクレイジー軍団はこの大地を掌握している

「さながら破壊神と龍王の対決じゃのう」

「これで終わりだアアア！たきのぼり！！」

レックウザが水を纏い突撃してくる

「いけえええサイドン！！つのドリル！！」

サイドンはつのを高速回転させ一発逆転にかける
そして当たりが吹き飛んだ

「ぬうううう！！」

シバの服が弾け飛び禪に一丁になる

「おおおおお！？」

オーキド博士も必死に耐える

そして暴風が収まった

シバが一番に見たものは…

「あんだカツラだったんかいイイイイイ！！！！！！」

ズラが吹き飛びビカアツ！！と頭をテカらせた変わり果てたオーキド博士の姿だった

「ちっがーう！！風圧で髪の毛が切れたんじゃ！！」

オーキド博士は必死に言い返した

そして改めて辺りを見舞わずと…リーグ本部は半壊を通り越して全壊に近い

犬 家の如く埋まっているゴリキー

潰れたカエルのようにしゃげているカビゴン

目を回し墜落しているバタフリー

立ったまま撃沈しているカイリユウ

ビクンビクン痙攣し白目のリザードン

カビゴンの真上で同じく伸びているプテラ

そして…もつれあう様に倒れているレックウザとサイドン

「この勝負…引き分け！！」

シバが大きく叫んだ

僕とワタルとの戦いはリーグ本部を壊滅させて史上初の引き分けになった

その後色々リーグの事務局長に2人揃ってお説教を受けることになった

しかもなぜかサイドン達は二時間ぐらいしたら元気になりやがった

なんでさ

そして事務局長からの提案で僕は新しく出来るジョウトリーグのチャンピオンになる様頼まれた

引き受けるとタンバの秘伝の胃薬を毎月分くれるのだ!!

ありがたい…市販のが効きづらくなってきたから…

取り合えず…明日からジョウトへ行こう…

破壊神ダイキVS使龍王ワタル（後書き）

はい、今回のお話ですが

ワタルとダイキはライバルなのでダイキが強くなるとワタルも同じくらい強くなります

チャンピオン同士の強さの比較は

ワタル⇨ダイキ シロナ⇨ダイゴです

次回からは15歳のダイキ君の物語です！

一応シロナがヒロインなんですけど…上手くいくかどうか（汗）
少しネタバレですが新メンバーが加入します

では最後に二部のネタバレ固有結界です

体はストレスで出来ている

心は荒れて、髪は変色

幾度の試合を越え胃痛

只の一度も胃薬を離せず

只の一度も頭皮ケアを欠かさない

トレーナーは1人

王者の座で挑戦者を待つ

その苦勞は四天王しか知らない

その体は無限のストレスで出来ていた

第二部にご期待ください！！

第二部時のタイキ君（前書き）

設定です

第二部時のダイキ君

髪の毛

ブラックジャックの様な金と白のツートンに

胃

市販のに耐性ができてしまいタンバの秘伝の胃薬しか効かなくなった
リーグ本部の健康診断ではいっつも怒られる

服装

挑戦者相手はスーツを来ている事が多い
ダイゴに近い服装

追加手持ち

ハガネール

愛すべきバカ

比喩表現が聞かない

ギャロップ

スピード狂

ついてこれるか？

ジョウトリーグ四天王

1 フウウン

フスベシティドラゴン使いの長老

ワタルのお祖父ちゃん

ドラゴンが専門

2 カンナ

イツキと交代しこちらにくる

口癖は「チャンピオン、胃は無事？」

こおりが専門

3 バクテツ

ホウエン地方のフエントウン出身

囲碁とポツピンが趣味

ほのおが専門

4 キクコ

キョウがカントーの四天王になったのでやって来た

ダイキを孫の様に可愛がっている

ゴーストが専門

チャンピオン ダイキ

マサラのトレーナー

戦い方は大半ポケモンに任せ時々指示するぐらい

ポケモン達は皆エキセントリックかつネジがブツ飛んでおり挑戦者にトラウマに近いものを与えて敗退させその光景で彼は胃を痛めている

例

カイリキーがパンチの連打でずっと俺のターン

サイドンにソーラービームをぶち当てたが痛がりながらもつのドリルでKOされる

カビゴンの立ち合いでポケモンが場外へ

ギャロップがかけぶんしんしまくり当たらない
つうか追い付けない

現時点で彼と互角なのはワタルのみ
戦績 5戦1勝1敗3分け

僕の日常(前書き)

第二部開始です!!

僕の日常

「ようこそ！チャンピオンの間へ、僕はダイキ…このリーグのチャンピオンをやらせてもらってる」

ついに来た！立ちはだかる四天王を撃破しポケモンも準備万端！！
リーグチャンピオンダイキの不敗神話…ブツ飛ばしてやるぜ！！

「では始めよう！ゆけっハガネール！！」

「行けっレアコイル！！」

ハガネールか…相手に不足はねえな

「片付けるぞハガネール！！」

そう言った途端

ハガネールはいきなり尻尾で地面を均し始めた
へ？

「ちがあああう！！！！掃除してんじゃねえええええ！！！！！！！！！！」

こいつ…バカだ！！

「レアコイル！！ソニック「ネイル！！」へ？」

命令しようとしたら尻尾…アイアンテールで一撃KO！

「くそっガルーラ！！」

ガルーラの格闘技で片をつけてやる

「ハアアガアアアエエエエ！！！！」

けどハガネールがガルーラをでかくちで噛み付き持ち上げて…
「べっ！！！！」

地面に叩き付けながら吐き出した

ガルーラは白目を向いている

「ふざけんなああああああ！！！！！！！！！！」

理不尽だ！！何なんだあのチャンピオン！！

「戻れ、ハガネール行けカイリキー！！」

「いつけええギャラドス!!」

よしっ!!ひこうタイプのギャラドスにかくとうは効果が薄い!!

「カアアイイイイ!!!!」

ギャラドスの真上にカイリキーが飛び乗って…アレはばくれっパンチ!

不味い…けど一発くらいじゃ昇天しないな

「リキリキリキリキリキリキリキリキリキリキリキリキリキイイイ
イ!!!!」

「嘘だろおおおお!!!!」

何で連打!?ギャラドス倒れたし…

くっそ!!

「戻れ、カイリキー…ラストだサイドン」

そんなとき俺はチャンピオンの目が『こんなポケモンでごめん』と言っている様に見えた

「メガニウム!!ソーラービーム!!」

俺は奇襲としてメガニウムのソーラービームを発射した

「サアアアイツ!!!!」

嘘だろ…堪えやがった!!

「メガホーン!!」

サイドンの角にエネルギーシユな光が集まりメガニウムは吹き飛んでしまった

つええ…

ああ…やっと終わった

僕はチャンピオンの傍ら考古学…特にアルフの遺跡や虹色のポケモンの伝承、三匹の神獣について学んだりみずうみでコイキングを釣ったりとそれなりにエンジョイしている

ただ…髪の毛はどうにもならなかった…白髪が半分になり金髪を駆逐していつてる

あああ…残念だ

そんな時空からカイリユー郵便が来た

宛名はポケモンリーグ本部からの招待状

『全国统一トーナメント開催のお知らせ』

へえこんなんやるのか

何々？

『各チャンピオン各々いかがお過ごしでしょうか？今大会はチャンピオン及び四天王の方々の団体に加え各地方のジムリーダー選抜で争われます、最強の地域はジョウト、カントー、ホウエン、シンオウのどの地域か？場所はセキエイ高原です、皆様のご健闘をお祈りします』

5対5の団体トーナメントか

やるしかないね

……取り合えずタンバの薬屋に胃薬を大量に注文しなければ……

チャンピオン集結(前書き)

出来ました

なんか既にセキエイ壊滅フラグが…

チャンピオン集結

「お？僕が一番か？」

もう最近僕は開き直ってギャロップに跨がって移動する事が多くなっている

現在空を飛べるのはバタフリーだけが流石にジョウトリーグ本部からセキエイ高原に飛ぶのはキツイ

ジョウトリーグは海の上でありうずまき島の近くに人工島を作って設計されている

バタフリーだと俺を抱えて飛んでもエンジュが限界だ

だからセキエイ高原までギャロップで走ったのだ

崖やらトージョウの滝？

カビゴンが滝を泳ぎました

何だがカビゴンが分からなくなってきた……

チャンピオンロードの崖や段差はギャロップが普通に飛び越えた

何匹かラッタを牽いてしまったがトリップしたギャロップを止めるのは無理だ

裸で自分のサイドンと殴り合うような物だ

ギャロップをボールを戻して一息ついた時

「久しぶりねダイキ」

声が出たので振り向いた

するとそこには…シロナがいた

……滅茶苦茶美人になってる！！

「あ…ああ、久しぶりだねシロナ…でもどうしてここに？」

何でだ？今はリーグの季節じゃない筈だし…

「フフフ、私はシンオウのチャンピオンよ？」

何だって？

「へえ…驚いたなシロナがチャンピオンなんて？」

するとシロナは笑いながら言った

「貴方こそ…シンオウまで噂になったわよ？」

嫌な予感が…

「それって…まさか「ポケモンリーグ壊滅試合に決まってるじゃない！」そうだよなあああああ！！！！」

北の大地まで噂になっているなんて!?

「まあ、チャンピオンとしても友人としても…負けないわよ？」

シロナがトレーナーの顔になった

「それはコツチの台詞だね、そう簡単には勝たさないさ」

2人して睨み合っていたけど大体同じくらいに顔を緩めて笑いながら握手をした

シロナの手は小さかった

その時だった

「素晴らしい友情ですね」

互いに振り向いたら仕立ての良いスーツをきた同年代の少年がいた

「君は？ひよつとしてハウエンの？」

シロナが考えながら言った

確かハウエンのチャンピオンは…

「ダイゴ…デボンの御曹司か!？」

すると彼は頷いた

「ええ、僕がダイゴです…優勝を狙いますのでお見知り置きを」

ダイゴが一礼をした時だった

「へえ…でも出来るのか？」

空からカイリユールと共にワタルがやって来た

「ワタル！久しぶりだな」

降りてきたワタルとハイタツチを交わした

「ああ！確かにね…にしても強敵揃いだな…だが優勝はカントーが貰う！！」

ワタルもいきなり宣言した

「ジヨウトを舐めないで欲しいな…勝ちにいくさ」
僕も言い返す

「貴方達…私達シンオウを忘れてない？」

シロナも宣言する

「…勝つのは僕達ホウエンですよ？」

ダイゴもまた言った

全員に闘志が宿る

東 カントーチャンピオン

”最強のドラゴン使い”ワタル

西 ジヨウトチャンピオン

”無双の破壊神”ダイキ

北 シンオウチャンピオン

”不敗の女帝”シロナ

南 ホウエンチャンピオン

”太古と未来を繋ぐ人”ダイゴ

四大地方最強のリーグチャンピオンがセキエイ高原に集った

チャンピオン集結（後書き）

前々回ぐらいに書いたとおりシロナ達もパワーアップしてますので
…やばいですね

現時点のポケモン達のレベルはワタルとダイキが80後半、シロナ
達が80前半です

…ヤバい

シロガネやまが吹き飛ばすかも知れん

これ…無理ゲーじゃろ？（前書き）

少し短いです

後書きにアンケートがあります

これ…無理ゲーじゃろ？

「ハツハツハツハツ…笑うしかないわい」

ワシはテッセン

ホウエンジムリーダー選抜最年長にして団長じゃ

副団長はセンリじやな

しかし…孫がいつとつた無理ゲー…とやらはこう言うことを言うんじゃろうな…

「ハガネール！吹き飛ばすぞー！」

一回戦…ワシ等ホウエン選抜はジョウト四天王と対戦することになった

ジムリーダーとは言え本気の手持ちなら四天王相手でもひけを取ることはない

現に大将戦まできたしの

チャンピオン…破壊神ダイキ

ダイキ君のポケモンはリーグ本部を壊滅させる程の圧倒的なパワーを誇る重量級軍団じゃ

しかし…ネジがブツ飛んどると言う噂だが…この事じゃったか…

ワシのライボルトにハガネールが必死に息を吹き掛けておる…

「違うわああああ…！！！！例えだ例え！！」「ハガア？」理解しろ
おおおおおお！！！！！！！！！！」

……漫才見てる見たいじゃ

「ライボルト！！でんげきはじゃー！」

ライボルトが電撃を放った

しかし…ハガネールじゃからダメージは0じゃ
あくまで気付かせて対等の勝負がしたいんじゃ

ハツハツハツハツ！！

「ハガア！？」

おお！気が付いたか！！

では仕切り直しと…

「テッセンさん逃げてえエエエエエ！！！！！！」

ダイキ君が叫んだ

逃げる？どう言う事じゃ？

そう思った時…ワシとライボルトが居った所の間に極大のジャイロボールが直撃しクレーターと爆風が吹き荒れた

「……ハッハッハッハッ…こりやあまずいか…」

破壊力ありすぎじゃろ！？

あんなの喰らったら一発でアウトじゃ

しかも…

「ネエエエエアアアアアア！！！！！！」

猛つてらっしやる！！

怒つてらっしやる！！

「ライボルト！こうそ「ガアアアア！」ライボルトおおおおおお！！！！」

ライボルトがアイアンヘッドで吹き飛んでしまいよつた…ああ墜落したら目が白目でピクピクしとる！

この後出したライチュウはカイリキーにボルテッカーをぶちあてたがマウントポジションからのばくれつパンチ連打でKO

ジバコイルは何故か立ち会いを始めたカビゴンに星にされ

レントラーは…サイドンの豪腕によりやられてしまった

他のサンダーもマルマインもみいーんなやられてしまった

ハッハッハッハッ！！笑うしかないわい！！

一回戦は僕達ジョウト四天王がホウエン選抜を下し準決勝に進んだ

次の相手は…ホウエン四天王か…

会場が吹き飛ぶかもしれないな

これ…無理ゲーじゃろ？（後書き）

第三部の構成が出来てるんですが…少しアンケートです

骨子はまた大きくなった（タケシが15になるので公式アニメに追いつきます）ダイキが伝説のネジハズレポケモン入手と胃を癒すためのイツシュ旅行です

伝説ポケモンはどちらが良いですか？

- 1 ダンサーでスロースターター完全無視のファンキーレジギガス
- 2 シャイでシャドーダイブしっぱなしの引きこもりギラティナ
- 3 女好き（人間、ポケモンお構い無し）のジゴロミュウツー

ここで選ばれたポケモンがイツシュ地方でのカギになります

というか…N & amp; ゲーチスVSブラック & amp; ダイキでの登場ポケモンになります

まだ二部始まったばかりですがこの結果で二部のストーリーが少し内容が変わるので

よろしく願います

はたから見れば（前書き）

出来ました！

……恋愛フラグを立てながらの小説は難しい

はたから見れば

世の中にはTVと言う素晴らしい物がある

ホウエンでは自らが取材されることもあれば海を越えたイツシユではジムリーダー候補がモデルだったりする

オーキドはラジオの収録を終えTVをつけた

ウツギは新婚の妻とTVを見るべくリビングに来た

オダマギはポチエナから逃げ出してきてやっと一息着きながらTVをつけた

ナナカマドは午後のティーブレイクのお供にTVをつけた

ポケモンセンターのジョーイさんは事前のリクエストもありTVをかけた

カミツレは仲良しのフウロと一緒にジムリーダーを目指す自分達の参考になるだろうとワクワクしながらTVを録画付き（永久保存用）でみはじめた

時間の都合上一回戦のジョウト四天王対ホウエン選抜は夜だろうが今ならカントー四天王対ジョウト選抜の試合が”生放送”で見られるのだ

皆楽しみに画面を見た

そこには…

『フハハハハ！コレがドラゴンのりゅうせいぐんだ！！』

ワタルのレックウザのりゅうせいぐんで対戦相手のヤナギのマンムーを相性を引っくり返さんばかりに圧倒し

『ぎゃああああ！こつちくんああああ！！』

りゅうせいぐんの流れ弾で周囲に大被害が及ぼされている映像が流れていた

そもそも、りゅうせいぐんは隕石を降らせるドラゴン最強の技だが

…数多く降ってくる隕石が全て相手を直撃する事が有り得るだろうか？答えは否！！

つまり大規模殲滅技なのだ

『きゃあああ！！つてアレ？』

シロナの周囲に着弾する隕石をダイキが間一髪でサイドンを出し庇う

『シロナ！！だいじょ…うぎゃあああ！！！！』

しかし真横に着弾し黒焦げになり吹っ飛んでいくダイキ

『サイドオオオン（泣）！！』

『ダイキイイイイ！！死んじゃダメエエエエ！！！！』

シロナとダイキが心配で半泣きのサイドンがダイキを救うべく走り出す

『蝶！！サイコー！！！！』

錯乱したのか某パピヨンな事を叫びつつ逃げ惑うイツキ

『チャンピオン！胃は…じゃない！無事ですか！？』

カナナがダイキを探し走り出す

『ぐあっ！！』

倒れていたカツラの背中を”ハイヒール”で踏みつけて…

『ウウウウハアアアア！！！！！！！！！！』

『どっせええええい！！！！』

隕石の流れ弾をさりげなく徒手空拳で迎撃して人間を超越しかけているシバとシジマ

『ハッハッハッハッ！！逃げるぞセンリ！！』

走り出すテッセン

『当たり前です！やっとなれますか！！』

素晴らしいフォームで逃げるセンリ

そしてりゅうせいぐんがやんだ後

『ふう…じゃが私のポケモンはまだ一匹残っておる！！ゆけっユキ
ノオー！！』

ユキノオーがドドンと立ちふさがった

『ヤナギさん…知ってます？』

ワタルが突然言いだした

相性の問題もありお互い一匹だけ

しかもレックウザの特攻は大きく下がっている

そしてヤナギはレックウザが何か食べているのに気が付いた…

気が……付いてしまった…

『しろい…ハープだと…』

しろいハープ…その効果は下がった能力値を元に戻す！！

『行くぞ…もう一度りゅうせいぐんだ！！』

空から再び地獄の流れ弾が降ってきた

『アフロが燃えるうううう！！』

半泣きオーバを引きずりデンジは叫ぶ

『アフロよりも命が大事だ！！』

『いつてえ…『ダイキ！大丈夫！？』『サイドオオオン！！』…っ

…なんとか…』ダイキはシロナに膝枕されてドギマギしている

（普段ロクな目に合っていないけど…役得かも…）

そんな事を思いながら胃の痛みを忘れ少しの幸せを甘受していたダ
イキ

だが…空が黒くなった…つまり…りゅうせいぐんが来る

『何でもこうなるんだよチクシヨオオオオオ！！！！』

ダイキはシロナの手を掴んで走り出した

『えっ！あっ…ダイキって…きゃあああ！！！！』

年相応にシロナは顔を赤らめた

まあ…ダイキはワタル程ではないにしてもそこそこ顔は良い

そんな奴に助けられていきなり手を握られたら赤くもなるし場合によつては胸キュンかもしれない

しかし…空からの隕石に気付いた途端シロナも必死にダイキの手を離さないように走った

端から見れば青春だろう

しかし…命の危険が迫っている以上そんなことをいつてる場合ではない

ほんのちよつと前までチャンピオンでなく少年少女らしい青春場面が一瞬で戦場に早変わりした

ジムリーダーや四天王さえ逃げ惑う中…カメラマン（子持ち）は必死で取り続けた

（待つてるスモモ！！バイト稼ぐからな！）パチンカーだがたまには働こうと決意した1人の漢がそこにいた

嵐が過ぎ去り…辺りが疲労困憊になるなか…ユキノオーは撃沈した

『よしっ！！勝ったぞ！！』

ワタルがガッツポーズを取っている

しかし被害は深刻だった

オーバはお茶の水ヘアになり、イツキはトリップしたまま

キクコやキクノはちゃっかり無傷ですんだがカツラは火傷にハイヒール

の後ろが痛々しい

シバとシジマは手足の火傷

ダイキは軽い火傷だがすすまみれ

センリは急に走った為こむらがえり

テッセンはこけて捻挫

ダイゴも右手に火傷を負った

知らぬは本人ばかりなりだった…

見ていたオーキド達はほぼ同じことを思った
つまり…

『あれ…試合だよね…戦争じゃないか!!!!!!』
ちなみに視聴率は65%を越えた

オマケ

『ハア…ハア…ワタルも勘弁してくれ…』
僕は息を荒くついていた
死ぬかと思った

『……ダイキ…その』

シロナが恥ずかしがりながら言ってきた

『ん?……ああ!ご…ごめん!!』

シロナの手を掴んだままだった!

『いや…いいけど……その…ありがとう』

シロナがはにかみながらお礼を言ってきた

『いや…どういたしまして』

その時のシロナの顔はとてもキレイだった

……美人だなあ

二日目…サイドン…お前(前書き)

出来ました！

感想があればどうぞ！

二日目…サイドン…お前

「はあ…今日は準決勝か」

当然の如く準決勝にはチャンピオン勢が勝ち上がった
因みに周辺の被害の順で言えば

ワタル>>>>>>>>>>僕>>ダイゴ>シロナだった

まあシロナやダイゴはテクニカルで僕とワタルは火力で押すタイプ
だからしょうがないけど…ワタルは少し自重しろ

しかし…昨日生放送だったんだよな…お母さんから

「あの美人さんを連れてきなさい！」と電話が来たし…

…シロナって美人だしなあ…手柔らかかったし

う…顔が赤くなってきた

ひよっとしたらシロナの事が好きなのかも…

まあ…試合が終わってから考えよう

キクコばあちゃんやフウフンじいちゃんなら親身に相談に乗ってく
れるだろう

バクテツさんは駄目だ…

以前好みのタイプを聞いたら…

『ん？女の子か…ニドクイン見たいな子だな』

スツゴい笑顔で言われた

ニドクイン見たいな女の子って何なのさ…

さて…モンスターボールはと…

あら？サイドンだけいないな

部屋の中だろうけど…お腹が空いてフードでも食べに出たのか？

「おお…いい、サイドン！何処だ？」

そしてドスドスとした足音と共に

「ドサイドオオオオン！！」

なんかいた

恥ずかしいわ…

ダイキの手…意外に大きかったな…

ダイキは昨日の事どう思ってるんだろ…

む…やり過ぎたかな

昨日のりゆうせいくん2連発はテンションが上がってついやってしまった

ま…いいだろ、いつも通り俺のブログの更新を…

何…俺の、ブログが炎上寸前だ…と!?

『幾らなんでもやり過ぎ』

『KY、KY、KY、KY、KY』

『少し自重しろ』

『スカツとしたぜ!!』

『憧れますわ!お兄様!!』

『カッコいいぜ!!流石チャンピオン!!』

半々か…取り合えず手を打たないと…

二日目…サイドン…お前（後書き）

友人にダイキのテーマは何だ？と言われたので

最初はHG、SSのフロンティアブレン戦のBGMです

で残りの手持ちがカビゴン、カイリキー、ドサイドンになったらB
Wの初代アレンジのBGMになると思ってください

この三匹は別格なのです

四天王の呼び方ですが

フウフンとキクコからは孫同然の扱いなのであちゃん、じいちゃ
んと呼んでいます

ダイキが逃がさない訳（前書き）

出来ました

なお感想はこの作品投稿後に返信します
後書きに相談があります

ダイキが逃がさない訳

「1つ聞きたいんだけど」

会場に向かい合い、いざバトルと言ったときダイゴが話し掛けてきた

「構わないよ、で何か？」

するとダイゴは話し始めた

「君は何故、そのポケモンを逃がさないんだい？君の噂はよく聞いているんだけどね…ポケモン達がおかしすぎてチャンピオンは毎回胃痛に苦しんでいるってね…何故痛い思いをしなければならぬのに彼らを使い続けるんだい？僕にはそれが分からないんだ」

……聞かれるとは思わなかったな

「……独りぼっちになるからね」

僕はポツツと呟いた

「……独りぼっち？」

聞いていたワタルが聞き返してきた

「そ…例えば、ギャロップとハガネールがいるだろ？あいつらは野生じゃなくてバトルファクトリーから引き取ったんだ」

たまたま遊びに行ったバトルファクトリー専用のポケモン牧場

ただっ広い牧場で種族を越えて仲がいいポケモン達の中でポツンとコイツらは孤立していた

その様子は余りにも可哀想だった

「僕のポケモンはネジが外れてるんだろう…だから逃がしたとしても生きては行けるさ…でもずっと独りぼっちなんだよな、きっと独りぼっちってのは凄く辛いと思うのさ」

多分ドサイドン以外のポケモンも進化する前からおかしかったから、群れには居られなかったろう

「……ダイキ」

シロナの声が響いた

「だから僕だけでもあいつらの味方で居たいんだよ…まあ胃痛は勘

弁したいところだけどね？」

ツッコミも愛ゆえだ

……イマイチ伝わっているか微妙だが

「……君は凄いな、素晴らしい！！君の相手が出来ることを誇りに
思おう！」

ダイゴがボールを構えた

「こっちこそ……真っ直ぐに行かせてもらおうよ！」

僕もボールを構えた

「行け！！ユレイドル！！！」

「殴り抜け！！カイリキー！！！」

化け物か……このカイリキーは！

相性が悪いのは知っていたが……まさか切り札のメタグロスで無いと

倒せないとは……後の手持ちはメタグロスとエアームド、アーマルドだ

どこまでいけるか……

「行け！！ドサイドン！！！」

ドサイドン？確かシンオウ原産のポケモンだな

どんなポケモンだ？

「ドツサイドオン！！！」

出た瞬間大地に罅をいれて出てきた

凄まじい重量級だな……だが

「メタグロス！じしん！！！」

メタグロスが大地を激しく揺らす

「ドオオオオオオオオオオオオ！！！」

だが……耐えた！

「何だと！！！」

その時シロナが叫んだ

「そうか…ハードロックよ！効果抜群の技のダメージを軽減するわ
！！」
「なにい！？僕も伊達に情報収集してない
ダイキのサイドンが異常にタフだと言うのは知っていた
それにハードロックだと！？
もはや皆と言うレベルじゃない
「ドサイドン！じしんでやり返せ！！」
そしてメタグロスを上回るじしんが発生した
「グロオオオオ！！」
一撃とはね…効果抜群だから仕方無いけど
まさに要塞だ…

「トドメだ！ドサイドン！！」
ドサイドンがダイゴのラスト…アーマルドに掌の穴を向けた
そして…巨大な岩石を打ち出した！！
それは空気を切り裂きアーマルドを撃沈させた…
「ハハハ…ここまでとはね」
自分でも少し震えている
それからダイゴと握手した
「…君は強い、また勝負してくれるかい？」
ダイゴの手を握り返した
「当然だよ！こっちこそよろしくな」
ポケモンバトルは友情を育てる
また一人友達が出来た！

オマケ

「輝いてるよね……」

最近……と言うより昨日の一件からダイキを無意識に目で追っている気がする

これが噂の……恋と言う奴？

すると目の前にカンナさんがいた

少し聞いてみよう……アドバイザーをくれるかも

「あの……カン「ダイキ×ダイゴ……有りね……ワタル×ダイキがジャスティスなのだけれど……」貴女は白昼堂々何を言っているのぉぉぉおぉ……！！……！！」

ダイキが逃がさない訳（後書き）

恋愛についてですが…こんな描写で良いですかね？

シロナとはもう少ししたらくっつく予定ですが…

因みに速いのは一目惚れに近いからです

次回ですが…まさかの大番狂わせが!？

女のファッションに口出すな(前書き)

出来ました！

感想あれば光栄です

女のファッションに口出すな

「フフフ…どうかしたの？手が震えてるわよ？」
不味い！！ダイキ…俺は選択肢を誤ったようだ…
女のファッションに口出すんじゃないなかつた！

数十分前

「勝ちに行かせてもらおうわ」

シロナは堂々と宣言した

その姿は気品と迫力が感じられる

チャンピオンには一種の威圧感みたいな物がある

圧倒的力で上から押さえ付けけるようなワタル

地の底から沸き上がる水の圧力のようなダイゴ

正しく噴火前の火山のような静かな迫力のダイキ

そして凜として、風格を漂わせるシロナ

チャンピオン同士が向かい合うことで一種の異界みたいになっている

「フツ…悪いが…そんな格好の奴には負けないさ」

ワタルが行った途端…辺りの空気が変わった

「ワタル…空気読めよな」

ダイキが頭を抱えてうなり

「女性に…それは禁句だろう」

ダイゴも呆れている

オマケに生放送だ

本人は預かり知らない所…と言うか何れ知るのだろうが現在ワタルのブログに大量の荒らしが発生している

シロナはシンオウでは知らぬもの無しの美少女で老若男女問わずファンが大勢いるからだ

現在進行形でサーバーが落ちる可能性が高い程終結しているワタル……ドラゴン使いは皆独特の価値観に従っている
そして其れが常識だと思ふ節がある

ダイゴにとってのお洒落は時計や靴だ

ダイキにとってのお洒落は帽子やジャケットだ

シロナにとってのお洒落は化粧品や服全般だ

ワタルにとってのお洒落は”ボディスーツ”と”マント”だ

いかにワタルがずれているのが分かるだろう

そして…

「……貴方みたいな…変態マントが…ファッションに口出さないでくれる!？」

シロナが全ての女性を代弁するように叫んだ

そしてワタルにとっての地獄が始まった

レックウザはトゲキッスのでんじはとエアスラッシュのコンボでボコボコにされた

(マヒ ひるみ)のリピート

さらに龍の舞いでパワーアップしたガブリアスがげきりんで暴れまわり、ミロカロスがれいとうビームを撃ちまくる

ミカルゲはのろいでじわじわいたぶってくる

ワタルとシロナの手持ちのレベルは僅かにワタルが上回っている
パワーは当然ワタルが上回っている

しかし、タクティス、コンボならシロナが上回っている

シロナは現在怒っている

怒っているが故に戦略がよりえげつない方にパワーアップしている

「……………女性にそんな事言うつからそうなるんだよ」

キクノは溜め息をついた

まあ…ドラゴン使いは他とは比べ物に成らない程の修業がいる故にずれていてもしょうがないのだが…今回は間が悪かった

「……………負けた」

ワタルががつくりきっている

切り札のカイリユーやポーマンダでミロカロスやルカリオ、トゲキツス等を撃破したが最後はガブリアスのげきりんで撃沈した

「ふう……………今度からは女性にそんな事言わないようにね」

シロナが去っていった

決勝戦はまさかのシンオウvsジヨウトとなった

練り上げられた戦略と連携で戦うシロナか

全てを叩き潰す破壊力で挑むダイキか

全ては明日の決勝戦で決まる

オマケ

「あ、あ〜っとシロナ」

控室に戻るシロナに僕は話し掛けた

「……………あら？ダイキじゃない」

シロナが振り向いてきた

うん、やっぱり機嫌悪いよね

こういうのは慣れてないけど…ね

「ワタルはああ行つてたけど…凄く似合ってるよ」

ああああああ！！

恥ずかしいなあ！！ダイゴから男なら気になる女の子には誉めておけ…てアドバイスもらったし

「あ……………ありがとう」

シロナは顔を真っ赤にして言ってくれた
ううう…僕も顔が真っ赤だ
でもなんか役得かも……

オマケ2

「シロナ×ダイキ…駄目です!!やっぱりワタル×ダイキです!…
…なんとかして腐の道へ…:くはっ!」
何かを口走るカンナをシバがチョップで落とす
「若い2人の初々しい恋路…手を出したり邪魔は野暮だ」
シバはカンナを担いでバレないように去っていった

女のファッションに口出すな(後書き)

今回はプライドパワーでシロナが勝ちました

スーパーシロナタイムですね

ワタルが少しKYになってますがドラゴン使いの教育のせいではありません

勝つための切り札(前書き)

難産だった…

感想があればどうぞ？

勝つための切り札

ダイキにも手持ち以外にレベルが高い控えがいる

ただ普段使っている手持ちの方が使い勝手がいいのだ

シロナに勝つためにはドサイドンの力が必要だ

しかしガブリアスと向こうの特殊技の豊富さがネックだ

しかしダイキの控えのあるモンスターならガブリアスを止め、克つ

ドサイドンの強化が可能になるのだ

「バタフリーはきついしな…アイツに頼るか」

今大会控えとの入れ替えは禁止されていない

現にシロナは一回戦はカバルドンを出したりしている

「行くか!!」

ダイキは転送し終わったボールを持ち会場へ向かった

「何かしら…凄くワクワクするのよ」

シロナが闘技場の中で呟いた

「それは僕もだね…正々堂々行かせてもらおうよ」

僕は腕を組みながら言った

「それじゃあ…」

シロナが微笑んだ

「始めましょうか!!」

僕も言い返した

シロナはトゲキッスを繰り出した

そしてダイキが繰り出したのは…全員の度肝を抜いた

「バアアアアン!!!!」

フィールドでブレイクダンスを披露しているのは何と……

「バンギラスだって!?!」

そして大気が震え砂塵が舞い上がる

「これは…まさか!？」

シロナは叫んだ

バンギラスの特性すなおこし

砂嵐を起こすこの特性は岩タイプの特防をはねあげる!

更に副次効果として相手は技を当てづらいつ言っておまけ付き

「これが答えだよ…特防が低いなら補えばいい、ギャロップ達には対策もしてある、さあ!真つ向勝負と行こう!!」

バンギラスはドストドス音を立てかみくだくをトゲキツスに当ててK
Oさせた

「バン!バン!!バン!!!」

今度はヘッドスピンをし出すバンギラス

「ああ…胃が痛い…」

ダイキは胃を押さえながら言った

しかしバンギラスはいきなり星になった

「ルカリオ…インファイト!!」

現れたルカリオがバンギラスを一撃で葬った

しかし砂嵐は消えない

天候を変える技を使わない限り砂嵐は収まらない

「フフフ…やっぱり貴方は凄いな…楽しいわ!」

シロナが叫ぶ!

「ハッ!それはこっちの台詞だよ!」

ボールから出現したカイリキーがルカリオを殴り抜いた

砂嵐のダメージを受けるカイリキー

だが

「ガツガツガツガツ!!!」

たべのこしを食い荒らすカイリキーがいた

「へえ…意外に考えてるのね」

鋼、地面、岩以外はダメージを受ける砂嵐

ただし毎ターン回復できるアイテムがあれば別だ

ダイキはカイリキー達にたべのこしや貝殻の鈴を渡していたのだ

「でも…負けないわよ!!」
シロナが美しい笑みを浮かべ言った

「天空に舞え!ガブリアス!!」

「大地を砕け!ドサイドン!!」

双方一歩も譲らず最強のポケモンを繰り出した

「ガアアアア!!」

「ドオオオオ!!」

中央で四つに組んだ二匹

しかし

「サアアアア!!」

ガブリアスを高々と持ち上げて叩き付けた

「畳み掛ける!!ドラゴンクロー!!」

怪獣の爪が龍を襲うが間一髪逃げ出すガブリアス

「ガブリアス…りゅうせいぐん!」

シロナがりゅうせいぐんを指示する

空から振る最強の技だ

しかしガブリアスのりゅうせいぐんは数が少ない

一発一発を確実に当てて撃沈させる…そう言ったりりゅうせいぐんだ

ドサイドンは鈍い

故に全段直撃した

「ドサアアアアア!!!!」

凄まじい悲鳴が響く

しかし

「…なんてこと…」

ドサイドンは立っている

吹き荒れる砂嵐によって上がった特防のお陰だ

そして…ドサイドン最強の技が炸裂する！

「行けええええ！！がんせきほう！！」

空気を切り裂く岩石はガブリアスの脳天に直撃した

「ガアブ！？」

フラフラとよろめき…倒れた

「負けちゃったか…」

シロナは晴れ晴れとした表情だ

「ふう…ひつさしぶりに頭を使ったよ」

ダイキは汗を拭った

シロナのテクニカルな技に対抗するためにダイキも苦手ながら本気で頭を使ったのだ

ダイキとシロナは笑い合いながら握手をした

各々最強と謳われるチャンピオン達と四天王

今回は西の覇者

ジヨウトの破壊神ことダイキが優勝をかつさらっていった

被害

ワタル氏のブログ大炎上

これによりカントーリーグ掲示板も荒らしにより閉鎖

ジヨウト地方ではパソコンのサーバーが落ちた

ジヨウトリーグのパソコンの掲示板には祝辞が一杯

セキエイ高原

ワタルのりゅうせいぐんにより穴ぼこだらけ

本部にも流れ弾が直撃し、シバの部屋を爆心地としてりゅうせいぐ

んは降り注ぎ…3カ月間の完全閉鎖となった

更にオマケ

「あ…あのさシロナ、電話番号教えてくれない？」

もうすぐシロナがシンオウに戻ると聞いたので慌てて聞いてみた

「え…い…良いけど」

こうして僕達はお互いの電話番号を入手することに成功した

いつ電話しよっかな…

勝つための切り札（後書き）

新キャラ

ダンサーなバンギラス

ブレイク、アロハ、ステップ等々ダンスなら何でもござれ

これが終わった後ギャグ中編を挟んで番外編をして第三部へ突入します

なお伝説はギラティナに決定しました

イツシュ編のメンバーですがギラティナ、ドサイドン、カイリキー、カビゴンが決定です

ひょっとしたらジェイソンオノノクスが出るかも…

キュービッドハガネール!! (前書き)

出来ました!

今回は急展開かつ甘いです!

感想あればどうぞ

キュービッドハガネール！！

明日で僕は16歳になる

シロナとの仲はまあまあだ

たまにデートしたりしている

アルフの遺跡に行ったりバトルしたりキツサキ神殿に行ったり…

行けば行く度にシロナが好きになっていく…

結構向こうも喜んでくれてるし…

「今度…告白しようかな…」

なんちゃって！

ドサイドン達は昨日から留守だ

何だか良く分からないがあいつらはネジが抜けているが誕生日の概
念が分かるらしく3年前からプレゼントを持ってくるのだ

ギャロップなら綺麗な葉っぱ

カイリキーならまんまるいし

ドサイドンはどっから取ってきたのか宝石の原石を取ってきたこと
もあつた

今年は何をくれるのかな…

バタフリーは考える

マスターははぐれキャタピーだった自分を育ててくれた

大好きなマスターに最高級の物を贈りたい

マスターは確か花が好きだ

バタフリーはハウエンのサイユウシティに向かった
花を摘むために

カイリキーはチヨウジにいた

「リキ！」

大好きなマスターの為にいかりまんじゅうを買いに来たようだ

因みにお金はダイキの財布から失敬しているので意味が無いかもしれない…

「……売るけどさ…なんでカイリキーが買いに来る？」
店主の呟きは虚しく消えた

カビゴンは森の中にいた

どっから取ってきたのか背中にデカイ籠を背負いキノコや山菜を放り込んでいる

リングマがそれを横取りしようとするがメガトンパンチで叩き潰した
「カビ」

ギャロップは原っぱにいた

近くにある綺麗な石があるので拾いに来たのだ

マスターはシンプルな物が一番と拾ってさっさと帰ってしまった

ドサイドンはシロガネ山で角を使って掘りまくっている

時おり手のキャノン砲で壁を吹き飛ばし…石がコロんと出てきた

闇の石、月の石、水の石等を回収してドサイドンはご満悦で戻った

ハガネールはシンオウに向けて暴進していた

ドサイドン達は物を贈ろうとしているがまだ甘い

マスターが一番好きなのは物ではないのだ！！

ハガネールはひたすら暴進し続けた……地面の下を

「ふう…何とか出来たわね」

私は一人ダイキのプレゼントを持ちリーグを出た

アレからデートを何度もしたけれど…私は彼の事が好きなのだ

ワタルから聞いて慌ててプレゼントを用意して……喜ぶ顔を想像する
るとつい頬が緩む……相当まいってるわね…

そして一歩歩き出した時

「ガアアアアアアア!!」

「キヤアアア……」

バクンと何かに食べられた

余りの恐怖でパニックになって動けない、ポケモンも出せない

……なんでこうなるのよ……

私は涙が出てきた

どうしよう……

誕生日当日

ワタルからマスターボールを、ダイゴから腕時計を貰った

良い奴等だ……ホントに

にしても……シロナと連絡が取れないんだよな

どうしたんだろ？

カンナさんからは……その……うん……腐ってる内容の本を貰った

バクテツさんは帽子

フウウンじい様とキクコばあ様からはお小遣いだった

ポケモン達からも素晴らしい贈り物を貰った

しかしハガネールだけ帰ってこない

何でだ？

そうして夜が来た

庭を眺めていたらハガネールがひよっこり出てきた

「おお……ハガネール!!!心配したぞ?」

そう言っつて近付いた時……ハガネールは満面の笑みで口を開けた

プレゼントかな？

覗き込んだら……泣いてるシロナがいた

「お前なにしてんだアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!」

「!!!!!!!」

シロナはこっちに気付いた途端抱き付いてきた

「ダイキィ…恐かったよお…グスツ…」

ハガネールはミツシヨコンコンプリートみたいな笑みを浮かべて去っていった

ひよっとして…僕がシロナの事を好きなのにアイツは気付いたのか…だからこんな事を…一応嬉しいけど叱らなきゃね

「大丈夫だよ、シロナ…もう大丈夫だから」

取り合えず僕はシロナを抱き締めた

暫くしてシロナが泣き止んだ

「ん…ダイキ、ありがとう」

けど離さない…折角のチャンスだし、バクテツさんも言っていた

『攻めるときはガンガン攻めろ…そうすりゃ落ちる…ただし…告白は男からだ！…女にさせちゃ情けないぜ』

「え…えつとダイキ？…そろそろ…」

勇気を出して…行くぞ…！

僕は破壊神ダイキだ！

告白くらい…やってやる…！

「……シロナが好きだからね…離したくないんだよ」

シロナがビクツと反応した

「え…それって…その」

シロナの顔が真っ赤だ

「うん…僕はシロナが好きだよ」

シロナが黙っていて…やがて喋った

「私も…私もダイキの事が…その…好き」

………やったあああああ…！！！！

「その…コレ」

シロナが差し出してくれたのはペンダントだった

「ありがとう…大切にするよ！」

シロナから受け取った後視線があって…シロナがめを閉じたので…僕はキスをした

シロナの口は柔らかかった

(ああ…僕…今、一番幸せかも)

こうして僕の最高の誕生日が終わった

オマケ

「あああああ！…なんてこと…！」

カンナは隅の草むらでこっそり見ていたのだ

「……ダイキ×シロナ…今一だけど…まあおめでとつございませす…
チャンピオン」

流石の腐女子カンナも今回は空気を読んだようだ

キュービッドハガネール！！（後書き）

ダイキに幸せがきました

皆さんも祝福してやってください

多少は胃痛がましになるでしょうから

男…ドサイドン(前書き)

重いです

ドサイドンもこんな過去があっただんです
なお今日は書き貯め含め3話更新します

男…ドサイドン

ドサイドンはサイホーンの時群れを追い出された

サイホーンは自分らしくしていたが親や群れのリーダーから見捨てられたのだ

宛もなくさ迷い…のたれ死ぬのを待つのみだった

しかし…シロガネ山のボスゴドラの一族が彼を救ったのだ

サイホーンやサイドンの群れは閉鎖的だったがボスゴドラの一族はサイホーンを温かく迎え入れた

親友のココドラも出来て、独り立ち出来るまでずっと共にいたのだある日オーキドにサイホーンは捕まり、ダイキの手持ちになってからもココドラの事は忘れていなかった

ダイキがジョウトチャンピオンになった時、サイドンになっていた彼はボスゴドラの一族をダイキから許可を貰い訪れた

ダイキは分かっていたはいなかったが相棒の気持ちを考え許可したのだサイドンがボスゴドラの一族を訪れた時…群れは歓喜して迎えた

ココドラはココドラになっていた

ボスゴドラ達にとってサイドンはいつまでも家族同然だったのだ

親友であるココドラに今のマスターがいかに素晴らしいかを語り、ココドラは自分の恋人を紹介する事で対抗しサイドンを羨ましがらせたサイドンがドサイドンになった頃、ココドラはボスゴドラになり群れのリーダーになった

2人の友情は変わらなかった

しかしボスゴドラの様子がおかしい時にドサイドンは気付かなかったのだ

ダイキの誕生日から1週間後ドサイドンはシロガネ山の奥地にあるボスゴドラの一族を訪ねた

するとすすり泣く声がある

慌てて入ってみると：親友が変わり果てた姿になっていた

ドサイドンは膝をつきオンオン泣いた

一緒にイタズラしたり、遊んだりした親友が死んでいたのだから回りのコドラやボスゴドラは言った

親友のドサイドンを追い出した一族がコツチに来て危害を加えていること

イワークやゴルバット達と言ったシロガネ山の仲間を守る為戦い続けた事

其れを親友に知らせないように指示した事

そして最後にボロボロの体でドサイドンをバカにした奴を倒しにいき力尽き自分の友がアイツでよかった：と言い残した事を聞いたドサイドンは空に向かって吠えた

次の日ドサイドンは悠然と歩き出した

向かうはかつての自分の一族

ボスゴドラはみな止めた

しかしドサイドンは止まらなかった

ある若いコドラが言った

何故僕たちの為にそこまでするの？と

ドサイドンは言った

親友が守りたいと願ったからだ

他のボスゴドラも言った

お前の家族もいるんじゃないのか？と

ドサイドンは言った

俺の家族はマスターとその仲間とお前達だと

親友の奥さんが言った

私達はお礼も出来ないのに：と

ドサイドンは言った

俺を家族同然に扱ってくれた：その恩に報いる時が来たんだとボスゴドラ達は涙を流しドサイドンを見送った

サイホーンやサイドンの群れは向こうからかつて追放した奴がドサイドンになってやって来ているのに驚いた

そして…力の暴風が吹き荒れた

ダイキの下で鍛え、レックウザを止め、ガブリアスのりゅうせいぐんすら受け止めるようになったドサイドンに群れは吹き飛ばされていった

立ち向かう側から弾き飛び、叩きつけられ、吹っ飛ばされる…歯がまるで立たない

群れのリーダーのサイドンは言った

何故一族を裏切るのかと

一族の誇りはないのかと

ドサイドンは答えた

追放したのはお前達だと

そして

俺は救ってくれた親友の為に戦う、一族の誇りなぞその前には塵みたいな物だと

サイドン達は激昂し再び突撃した

しかし…全て薙ぎ倒された

サイドン達は恐れておつきみ山に逃げ帰った

ドサイドンは群れに戻り勝ったことを告げた

群れは歓喜した

その時、親友の息子のココドラが言った

ありがとう、僕達は貴方がお父さんの親友であったことを誇りに思います

また何時でも来てください

貴方は私達の大切な家族ですと

ドサイドンは大粒の涙を流した

そして…もう親友に会えないことを再び悲しんだ

ドサイドンは夜トボトボと戻ってきた

月夜の中マスターが立っていた

「……何かあったんだな」

マスターが心配しているので無理に笑おうとした

しかし…その前に抱き締められた

「悲しい事でもあったんだな…家族だから分かるよ、泣いた方が良い」

ドサイドンは再び泣いた

親友を失った

自分は普通のドサイドンではないらしい

けどそんな自分を理解してくれるマスターがいた事が心から嬉しかった

次の日ドサイドンは元気になり空に向かって吠えた

親友であるボスゴドラが群れや自分の名誉を守ったのだ

ならば俺はマスターを守ろうと

親友のように如何なる危害からマスターを守ろうと誓ったのだ

ドサイドンは今日も元気に壁をぶち壊している

ジョウトリーグの1日(前書き)

彼らの休日ほこんな感じですよ

ジョウトリーグの1日

キクコとフウウンの朝は早い
キクコはいつも通りに散歩を

フウウンは乾布摩擦をする

それが終わったら食堂へ向かう

食堂ではチャンピオンであるダイキがウツギ博士経由で渡ってきた
珍しいイッシュ地方のオノンドに餌をやっていた

このオノンドは殆ど吠えないし鳴き声も上げない

ただし何でもかんでも斬ろうとする癖があるらしい

今日はリーグはお休みなので3人でいかりのみずうみに釣りに言った

バクテツの朝はド ルドアフロのセットから始まる

「パラッパッパッパ」 今日も決まってるぜ」

鏡の前でポーズを取る

鏡は姿見と言うやつで全身が映るが…全裸だ

バクテツは全裸で寝ているので起きた後も暫く裸だ

つまり髪の設定も裸でやっている

バクテツはモデルでもあるのだがファンはこの事を知らない

カンナの朝は…と言うより徹夜だったようだ

「フフフ…やっとここまで…出来た」

同人誌の執筆がはかどったようだ

実はジョウトリーグの中で一番収入があったりする

仲間はエリカとナツメだ

ナツメがストーリーを作りカンナが書きエリカが売り込む

三等分してもダイキを上回る収入…

哀れなダイキである

いかりのみずうみでは3人仲良く釣糸を垂らす

「フオフオフオ…ダイキ坊は当たつとるなあ…」

フウウンはノンビリ髭を扱きながら言った

「たまたまだよ…じい様」

そう言っている

「フイイイイイツシユツツツツ！！！！」

キクコが絶叫しながら釣り上げた

「うおおおおお！！主だああああ！！！！」

2mクラスのコイキングを釣り上げた

端から見れば孫と祖父母の家族のようだ

リーグの部屋に帰るとダイキは勉強を始める

オノンドは横でドサイドンが面倒を見ている

考古学が大好きだから学んでいるのだ…シロナも目指しているからと言っているもある

終わったならシロナに電話する

バカツプルかと思いきやそうでもないようだ

2人ともリーグチャンピオンとして節度あるお付き合いをしている

ちなみにマスコミは知らないがリーグ本部は知っていて祝福しているシロナとの電話が終わり眠りにつく

明日からまた不敗のチャンピオンであるために

フウウンとキクコは一手将棋を打って寝る

2人ともトレーナー歴50年を越える大ベテランだ

次の世代の若者の成長を楽しみにしながら眠りに付いた

バクテツはいつも通り全裸で眠りについた

彼は自分が燃え上がる様な試合がしたいのだ

ここ暫くないのだが…明日こそそんなバトルが出来る事を祈って…

カナナは寝ない

「フッフッフツ…ナツメ…良いストーリー作ったじゃない!!」

ペンにトーン、頭にタオルを巻き栄養ドリンクをセットし机に座る

「さあ!!…シバ×イツキ本『無骨な男の一途な恋』貴公子にみ
いられて〜』執筆開始よお〜!!」

何があっても彼女は変わらないようだ…

第三部のダイキ（前書き）

次回より第3部！！

伝説捕獲及びイツシュ編スタートです

第三部のダイキ

髪

進行を止めることが出来ず白髪になってしまった
哀れ21歳にして…

身長はワタルより高い

181?

シジマのお陰で筋肉が付いた

服装

着崩したスーツにロングコート、それにソフト帽を被っている

趣味

釣り

いかりのみずうみでコイキングを釣っている

鍛練

体がなまりがちなのでたまにシジマに鍛えてもらってる

勉強

考古学をやっている内に資格取得にはまる

いつリーグチャンピオンから陥落しても生きていける

ポケモン図鑑

大半のポケモンを捕獲している

ジヨウト独特のポケモンはコンプリートした

資格

ジヨウトチャンピオンがメインだが資格取得にはまり

ポケモン考古学者

ポケモン博士

ジムリーダーフロンティアアブレンと暇に任せて取りまくっている考古学の専門はハウオウ、ルギアと言った神々とアルフの遺跡ポケモン博士としては異常個体：つまりネジがすっ飛んでるポケモンを研究している

年齢が上がリ一人称が僕はキツイよな…と言うことで私にした

大人になったので以前にも増して本を読んでいる

アロエの書いた図鑑やシキミの書いた小説のファンだったりする
因みにチャンピオンであるアデクとシジマの所にきたレンブ以外イツシュ地方の全員と面識がない
地味にカミツレのファン
ファクションが面白くていいらしい

因みに本も出版した

アロエと言った専門家にも評価されている

何故こんな事が出来るかと言うとジョウトリーグは海の上に有るため定期的に長期検査がある
その間に色々やっているから
シロナはそれ以上に本を書いているが…

シロナをとても大事にしている

見えて好感の持てるカップルらしい

シロナがいるせいか胃痛は大分マシになり市販の物が再び効くようになった

しかし…ポケモン達は相変わらずである

新レギュラー

オノノクス

見た目が恐い為に子供に嫌われている
しかし子供が好きなので近付く
だけで逃げられる

ある意味可哀想なポケモン

バトルになると何でもかんでも斬りまくるジェイソンとなる

フォレトス

不遇としか言いようがない

ダイキの手持ちの中で唯一まともな性格

まともだが寡黙な為大抵の事を黙っている

カイリキーにサッカーボールにされたり

ドサイドンに打ち出されたりと色々辛い目に合っている

ダイキの評価

イツシュ地方では『通った後にはペンペン草さえ生えない破壊神』

交流が余り無いため色々誇張されている

カントー地方では『礼儀を重んじる闘神』

ジヨウト地方では『ジヨウト地方の誇り』

ホウエン地方では『障害を砕き続ける闘神』

シンオウ地方では『文武両道の最強の一角』

好きで破壊している訳ではないしちゃんと修理代を払っているので
無慈悲な破壊神ではなく礼儀正しい闘神と呼ばれる様になった
ダイキは気に入っている

因みにワタルは龍神

ダイゴはカイザー

シロナはクイーンと其々短くなった

僕、悪いギリティナじゃないよ！（前書き）

出来ました！

次回よりイッシュです

僕、悪いギラティナじゃないよ！

シント遺跡

ここに2人の考古学者がいた

「ジョウトの様式の持つシンオウの遺跡…ね、たしか…アルセウスを祭っている遺跡でもあったよね？」

私はシロナに問い掛けた

「ええ…ギラティナ、パルキア、ディアルガを作り出した創造神よ…この話は終わりね、貴方とケンカはしたくないし…」

シロナは少しそっぽを向いて言った

シロナはアルセウスが最古のポケモンと言っているけど遺伝子の関係ではミュウが正しいと私は思ってる

結果学者の血が騒ぎポケモンバトルの大ゲンカが始まっちゃった…あの時のシロナはワタルみたいなりゆうせいぐんだったからね…結局は今みたいに手を繋げなくなるのが嫌だから2人で妥協した形になったけど

付き合っただけで見て分かったけどシロナはやたらと手を繋いだり腕を組んだりが好きみたいだ

まあ僕も好きだからいいけど

ダイゴがチャンピオンを引退したりと色々あった

ダイゴが引退した理由は恋に生きる！！だったんだけど

「へえ…そんな恋人が？」

彼女無しのワタルが言った

「ああ！サファイアって言うんだけどね」

サファイアかあ…

「で…年下？年上？」

「試してみようか…マスターボール！」

バシツと当たって見事に収納完了

「え？捕まえちゃうの！？」

シロナが驚いている

「大丈夫だと思うよ？クロググさんなんか3匹持つてるんだし」
アレには驚いた

その気になつたらチャンピオンになれるんじゃないかあの人？

にしても…最近は大バトルフロンティアが人気らしくリーグに余り人がこない何だか悲しい

さて…気を取り直して

「出るっ！ギラティナ！！」

出た瞬間ギラティナはシャドーダイブをして頭だけ出している

「……恥ずかしがりやにも程があるって…」

私はそう思った

オマケ

リーグの地盤が緩んでいるらしく大規模な補修が必要らしい

よって長期休暇になってしまった私はアサギのホテルでのんびりしていた

その時エサを食べているオノノクスを見ていて気が付いた

「そっだ！イッシュユに行ってみよう！！」

アッチには確かベストセラーを書いたシキミさんに素晴らしい論文を書いたアロエ先生も居られたはず

ついでに気に入っているモデルのカミツレさんにも会えるかも知れないしアーティ画伯の絵が見れるかも…

よくよく考えると…イッシュユはバラエティーに富んでるな

「思い立ったが吉日…だね」

オノノクスをボールに戻し海岸に出てカビゴンに乗り…地図を開く

僕、悪いギリテナじゃないよ！（後書き）

遂にイツシュ上陸！

基本 に してみよう！のタイトルになります

例えばアララギ博士に会ってみよう！とか

プラズマ団をボコしてみよう！みたいな感じです

ライモンシティに行くー！ー！(前書き)

出来ました！

明日は死神の方を書くつもりなので一回お休みです

ライモンシティに行こう!!

「なん…だと?」

アーティさんのアトリエに来た私だけ…今日は朝からライモンシティでカミツレさんの番組に出てるらしい…

今日はスタジオを飛び出しての番組らしく今から行けば間に合う!! すっかりエンジョイしてるな…と振り向いたら

「オノオノ」

「命だけはお助けエエエエ!!!」

ヒウンアイスの店をオノノクスが襲撃していた

「何やってんだアアアアアア!!!!!!」

怒鳴った瞬間

「ノオ?…ノクス」

飛び付いてきた

「コラ!今そんな事したら!!!」

すると…

「ジュンサーさん!オノノクスが人を襲ってます!!!」

「コラア!!!止めなさい!!!」

やっぱりなアアアアアア!!!

オノノクスは戦闘時とオフの差が激しい

オフは人懐っこく子供好きな甘えん坊

戦闘時は目に写るものを斬りまくるスラッシャーだ

オノノクスは見た目がヤバイためじゃれてるつもりでも端から見れば襲われている様には見えない

…可愛い奴なんだが

あと今すぐ甘噛やめろ

回りがホンキで逃げ出してるからな!

ジュンサーさんの誤解を退けてポケモンセンターでカビゴンを預けてとあるポケモンを引き出す

コイツもウツギ博士から貰ったイツシユのポケモンだ

現時点で私のポケモンの中でバタフリー以上に唯一の飛べるポケモン…

「ゴルウウウウウグッ!!」

シャキーンとポーズを決めてゴルグが出てきた

パワーだけならカイリキーやカビゴンと張るんだけど……やったらめつたらポーズを決めないと戦わず、正義のヒーローに憧れるゴーストと言う矛盾があるポケモンだ

それに反してかかなり賢く初見の街でも方向を指示すれば飛んでいけるのだ

因みに飛ぶポーズは右手は真っ直ぐ前で左手を曲げて脇に着け姿勢は真っ直ぐだ

何でそれで飛べるのか分からない

取り合えずゴルグに飛ぶ町の名前と場所を指示した

するとゴルグはスウツと早くも飛ぶ姿勢を取りあつという間に大地から跳び去ってしまった

「まだ私が乗ってないだろっがアアアアアア!!!!」

「行くぞブラック!!」

「来い!!チエレン!!」2人の少年が向かい合い正にポケモンバトルをしようとした瞬間

「ゴウウウウウグ!!!!」

凄まじい唸り声と

「低すぎだアアアアアア!!」

叫ぶ声

そして…猛烈な風が巻き起こり…

「うわああああああ!!」

「だああああああ!!」

2人の少年は吹き飛ばされた

「アアアアアアアア!!加速するなアアアア!!」

その物体は通り過ぎていった

2人の少年は同時にこう思った

(何なんだよ…あの物体)

因みにゴル―グの頭の中はテレビで見て覚え改造したテーマソングが流れていた

闇をこえ〜て〜

ラララ地平線まで〜

明らかにどこかの鉄腕のテーマだった…

今日のフォレストス

「リキイ、リキイ!!」

「フォ〜………(汗)」

「カイリキイイイイ!!…!!フォレストスはサッカーボールじゃねえって言うてんだろぅがアアアアアア!!…!!」

「リキイア!!…!!…!!」

「フォオオオオオ!!…!!」

「オーバーヘッドキックしてんじゃねえええええ!!…!!」

プラズマ団をボコしてみよう！（前書き）

出来ました！

次回はダイキが色々ぶっちやけます

プラズマ団をボコしてみよう！

ライモンシティ：広いし、観覧車まであるな
シロナと一緒に乗ってみたいな

さて：カミツレさん達はどこかな？

「おい！お前」

いきなりお前呼ばわりはないよ：そう思いながら振り向いたら…

「貴方：恥ずかしくないですか？」

訳の分からん衣装の男性がいた

…：ロケット団の亜種か何かかな？

「貴様ア：俺はプラズマ団！ポケモンを開放するために戦う者たちだ！！」

…：ポケモンを開放？

「だったら貴方がポケモンを開放しなさいよ：手にボール持って言っただって説得力はないよ」

怪しい団体だよな：明らかに…

「うるさい！我々は開放の為に戦っているのだからいいのだ！！：行けっギアル！！」

何か歯車みたいなポケモンを繰り出してきた

「…：しょうがないな：ジヨウトリーグチャンピオンダイキ：行かせてもらおうよ！！」

私はカイリキーを繰り出した

「へ…：あの破壊神！？」

プラズマ団の男はビビリかけてる

「そうだね…：いっちょやろうか！！」

「はい！始めました！私カミツレの新番組！！『新発見！？街角トレーナー！！』今週のゲストはこの2人！！」

カミツレが軽快にしゃべる

「こんにちわ〜アーティです〜」

間延びした口調のアーティ

「フウロです〜！よろしくお願いしま〜す〜！」

元気に言うフウロ

皆年若いが一流のトレーナー…ジムリーダーだ

「さて！この番組は街角に出てポケモントレーナー達と戦ったり、

インタビューをしたりするトーク番組です」

カミツレはハキハキと言う

「う〜ん、たの『ガゴオオオン！！！！』なんだい！？」

アーティ達が一斉に破碎音の方角を見た

すると…

「『土煙！？』」

カミツレ達は一斉に走り出した

するとそこには最近巷を騒がしているプラズマ団がいた

ただし…涙目で

「ワル……」

瀕死状態のワルビアル

カイリキーの爆裂パンチ4連発が大地とワルビアルに直撃したのだ

「リイイイイイキイイイイ！！！！」

ガッツポーズを決めるカイリキー

「まだやりますか？」

謎のスーツトレーナーが言い

「もう！やってやれるかアアアア！！！！」

プラズマ団を半泣きで逃げ出した

フウロとカミツレはこの光景…もといこのカイリキーを見たことが

あった

6年前の四大地方大会で猛威を振るったジョウトリーグ最強のトレ

ーナー…

「アアアアアアア！！！！」

そう…未だに語り継がれるセキエイ高原のポケモンリーグ崩壊事件に四大地方大会で優勝した伝説の破壊神！！
無双の破壊神…ダイキがそこにいた

まったく…訳が分からないよな

にしても弱かったな
ん？テレビが来てる

「あちゃあ…やってしまったか…」

アレ？あそこにいるのアーティさんにカミツレさん…もう1人は…
カーゴサービスで有名なフウロさんか！！

「あの…貴方ひよつとしてジョウトチャンピオンのダイキさんですか？」

アーティさんが話し掛けてきた

「はい、そうですけど…アーティさんですよ？ファンなんですよ
〜コガネシティの個展はお疲れ様でした」

アーティさんは嬉しそうに言った

「いや〜チャンピオンに見て貰えるなんて嬉しいな〜」

握手したりと盛り上がっていた時だった

「今生放送だから一緒に出ませんか？」

アーティさんから驚きの提案だった！！

「あ！良いんですか！？是非お願いします！！」

こうしてこれからスタジオに移ってインタビュ―されるらしい
楽しみだなあ…イツシュに旅行に来て良かったよ

因みにフウロとカミツレはとんでもない事になったと驚き…プロデ
ューサーとAD達は視聴率が取れると大にぎわいだった

インタビューを受けてみよう！（前書き）

出来ました！

どうぞお楽しみに！！

インタビューを受けてみよう！

スタジオ内

カミツレはかなり緊張していた

アーティの一言でジョウトの破壊神をスタジオに呼んでしまったからだ

(怖くてしょうがないわよ…)

フウロも同じようだ

その時だ

「じゃあ質問ですけど、彼女っていますか？」

アーティがいきなり爆弾を投げた

(天然もいい加減にしてええええええ!!)

普通は聞かないのに…フウロがどうフオローしようかと思った時だった

「彼女ですかあ…いますよ」

普通に答えていた

(なんで普通に答えてるのおおおお!!)

カミツレはそう思いながらもアーティが振った話題に乗らざるを得なくなかった

「へ…へえ、居られるんですか…どんな方なんですか？」

因みにシンオウやカントーでも流れておりシロナ達は偶然にも見ていた

「ダイキは私をどう思ってるんだろう？」

シロナはテレビをジッと見た

「そうですね…ちょっと子供っぽいかな？アイスを選ぶのに一時間かかったり、揚げ句の果てに好きなアイスのトリプルにしたり…」
ここまで聞いてシロナは少し落胆したワザワザ言わなくても…プウ

ツと頬を膨らませた時

「でも彼女がいないと今頃病気で倒れてますね…彼女と居ると癒されるんですよ…ちょっと照れますが…まあ彼女の事は一番大事にしたいですね」

ダイキはハニカミながら言った

因みにシロナは……

「シロナちゃん！？戻っておいで！！」

キクノが焦っていて

「シロナ！ティツシュウ！！」

オーバがティツシュウを持ってきた

シロナは嬉しくなりオーバーヒートして鼻血を出して倒れてしまった……とても綺麗な笑みを浮かべながら……

フウロやカミツレはダイキに対する印象が随分変わった

冷酷な破壊神だと思ったたら言葉遣いは丁寧で気さく、物腰も柔らかいまるで紳士のようなのだ

フウロも話し掛けてみた

「あの～折角ですからポケモンを見せていただけますか？」

ダイキは笑いながら言った

「構いませんよ！……ただし1匹はシャイなんで5匹でも良いですか？」

3人は頷いた

そしてスタジオにへビー級のポケモンが勢揃いした

カイリキー、ゴルーク（まだカビゴンと変えたまま）、ドサイドン、フォレトス、オノノクス…：そうそうたる顔触れである

アーティ達はそのポケモン達から漂う風格や迫力に驚いた

「流石チャンピオン…：凄いオーラですね…」

カミツレが呆然と言った

ダイキのポケモンは育てるのに手間が掛かるがその分答えてくれるポケモン達である

ポケモン達に触りながらアーティは言った

「最後に1つ良いですか？貴方にとってポケモンバトルとは？」

ダイキは笑いながら答えた

「勝つても負けても、悔いが残らない楽しめる物です、勝つためにやっただけ楽しくはありませんし…どうせやるなら仲間達や相棒達と一緒に楽しみたい…私はそう思います」

カミツレ達は深く感銘した

勝つためでは無くあくまで楽しむ事が大事

皆を初心に返すような言葉だった

「本日のゲストはジョウトチャンピオンのダイキさんでした!!」
こうして収録は終わった

「……………何なんだあのポケモンは…友達に成れそうにない…」

スタジオの観客席から1人の緑の髪の少年が出てきた

N…プラズマ団のリーダーである

Nは他地方のチャンピオンが番組に出ると聞き見に来たのだ
そしてポケモン達を5匹出したので声を聞いてみると…

ドサイドン

（マスターは話してるな…所であの壁はぶち抜いてもいいのか？）

カイリキ

（熱く、熱く熱くより熱く！皆の視線で俺の魂が燃え上がるウウウ
ウウウ！！）

ゴルーク

（闇を越えて… ……何か違うな…違和感が）

オノノクス

（お腹すいたあ…ごはん食べたいな……アレ斬れたら気持ち良さそう…）

フォレトス

(………やめるんだお前達！…！…！)ではしゃぐと要らねなくなるぞ？)

() () () (ええ！！やだあ！！) () () ()

(わかればよし！)

「頭痛くなってきた…」

暴走するチャンピオン達はイッシュを目指す(前書き)

出来ました

コメントの返事は明日します！

暴走するチャンピオン達はイツシュを目指す

「ふわあああ…」

イツシュのチャンピオンでありポケモンリーグ最年長チャンピオン、リーグ親交会会長のアデクは欠伸をしながら書類を見た

「ブバアツフ!!!」

そして眠気覚ましに飲んだコーヒーを吹き出した

リーグ本部からチャンピオン達の長期公式休暇の滞在予定評だ

ジヨウト地方現チャンピオン

ダイキ イツシュ地方に滞在予定、休養及び見聞を広める為

カントー地方現チャンピオン

ワタル イツシュ地方に滞在予定、遠い場所人々と触れ合い為

ホウエン地方元チャンピオン

ダイゴ イツシュ地方に滞在予定、婚約旅行の下見

シンオウ地方現チャンピオン

シロナ イツシュ地方に滞在予定、海底遺跡の調査、及びダイキ

の追跡

「いや…来たいのはわかるんだがなあ、ここまでとは…」

アデクは溜め息を付いた

元チャンピオンのダイゴを除けば皆歴代最強と謳われるトレーナー達だ

放浪ばかりの自分では比べ物にならないだろう…

アデクは自重しつつ書類を見続けた

ワタルは真剣に悩んでいた

「なぜ…俺には出会いがないんだ？」と

友人達に言わせればファツションとしか言い様がない

しかしワタルは気付かない

ワタルは焦っていた

実家に帰ると祖父であるフウウンが見合いを切り出した

断ってみたが今度はイブキ達に外堀を埋められかけていてイブキとのヴァージンロードと言うルールが敷かれていた

だからこそワタルは考えた

ここに俺の運命の人はいない……なら！

「そうだ！イッシュ…行こう！」

イッシュなら俺を好きになってくれる美人がいる筈だ！！

そう考えた

そしてワタルは……

「なあ…青年……恋人とかいないのか？」

燦々と降り注ぐ太陽の中

「帰りたいぜこんちくしょオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

……何故かやまおとこのナツミと観覧車に乗っていた

……ガンバレワタル！！

ダイゴはヒウンにいた

サファイアのご両親と殴りあい、蹴りあい、罵りあいながらやっこさ婚約にこぎ着けたのだ

そして彼は愛しのサファイアとどの場所へ行こうか…と考えた時だった

「おい！俺達はプラズマ団だ！！ポケモンを解放しろ！！」

ダイキにポコポコにされたプラズマ団員がダイゴに肩を掴みながら

怒鳴り……サファイアから貰ったペンダントが吹き飛んだ

「……………貴様ア……」

ダイゴがキレた

「あ？良いからだ…せ？」

プラズマ団員は後ずさった

そこには石頭のボスゴドラ

もちろん繰り出す技は…

「ボスゴドラ……もろはのずつき……!!」

ズドオオオンと言う強烈な音と共にプラズマ団員は吹き飛んでいった……

「何でだよオオオオオオ!!!!」

……哀れなり!!

「足りない……」

シロナは呟いた

「何が足りないんだよ？」

オーバが尋ねた

「ダイキ分が足りないのよ……」

シロナはふて腐れた

オーバは呆れた

シロナはけっこうズボラだ……自室は研究資料がかなり散らかっていてヤバかったりする

そんなシロナを普通に受け入れるのがダイキだ

心がとても広いのだろう

凜としたシロナがデレたり甘えたりする唯一の人物だ

そんなダイキがフラツとイツシュに旅行へ行ってしまった

だからシロナは不満なんだろう

オーバがそう思った時

「決めたわ……私もイツシュに行く！行くったら行くわ!!」
と思ったら暴走した！

「いや！確かに休みだけどさ!!正気か!？」

オーバは突っ込んだ

「大丈夫よ……海底遺跡の調査のついでだから」

明らかに海底遺跡よりダイキに会いに行くことがメインになっていく……

「待っててね……ダイキ」

シロナはウキウキしながら出ていった

その頃のダイキは…

「うん…中々だけでもう少しだね」

トレーナーに勝負を挑まれ返り討ちにした所だった

トレーナーはダイキのスーツにあるリーグ公認トレーナーのバッチを見て挑んだのだ

「うそ…フタチマル〜！」

目を回したフタチマルを抱き締める少年に近付きげんきのかげらと薬を渡した

「もう少し考えて戦ったら良くなるよ…きみ名前は？」

するとトレーナーは言った

「ブラックです！」

ダイキは頷きながら握手した

「うん…君は強くなるね、どうだい？もう少しバトルについて教えてあげるよ」ダイキは戦いの中でブラックのバトルセンスに驚き鍛えて見たくなったのだ

ブラックは立ち上がって喜んだ

「ホントですか!？」

ダイキは笑った

「ああ、少し一緒旅してみるかい？」

「ハイッ!!よろしくお願いします師匠!!」

ダイキは笑いながらブラックと歩き出した

壁はぶち抜く物(前書き)

ありがとうございます
後書きもご覧下さい

壁はぶち抜く物

僕はチェレン

ポケモントレーナーだ

ブラックとはライバルだ

僕は今ヤーコンさんに挑むため廃倉庫にブラックと共にいたけどブラックに師匠が出来ていた

ダイキ…聞いた事があるような気がするんだけどな

俺はブラック！

師匠とチェレンと一緒にプラズマ団の逃げ込んだ倉庫に来たんだ！！
けど…

「くっそ〜鍵掛けてやがる！！」

俺は言った

「くそ…はっぱカッターじゃどうにもならないな」

チェレンも言った

鍛えたポケモンなら鋼鉄すら切り裂けるけど…俺等じゃまだ無理だ
その時

「ブラック、ここは廃倉庫なんだね？」

師匠が言った

「はい！ここは取り壊す予定だそうです」

師匠？まさか…壊せるの！？

「離れてくれよ…カビゴン！！」

現れたのは…カビゴン！？

めっちゃレアじゃん！

でも…四股踏んでる！？

そして構えて…

「カビゴン…ギガインパクトオオ！！」

カビゴンが光を纏って鋼鉄の扉に突撃した

「カビイイイイイ！！！！！！！！！！」

そして…爆風が吹き荒れた

「うわあああああ！！！！」

チエレンがレバルタスにしがみついて必死に耐え

「おおおおおお！！！！」

俺もダゲキを出して踏ん張ってもらう

少したつて…見ると

「……………うそだろ？」

チエレンが呆然と呟いた

「は…はは……すげえや師匠…！」

巨大な廃倉庫が吹き飛んでやがる…

ギガインパクト…ノーマル物理系最強の技

けどここまでなんて…

まるでワタルみたいだ…

プラズマ団員は全員気絶してる

「ダイキさん…貴方は一体？」

チエレンが尋ねた

「私かい？……ただの鍛えたトレーナーだよ、ボソツ（胃の痛みと

引き換えにね…）」

かけえぜ…師匠！

プラズマ団も退治できたし！

待ってるヤーコン！！

「ほう…アソコが壊滅ですか…！」

ワタクシはコーヒーを飲みながら言いました

「その…倉庫がギガインパクト一発で壊滅しまして…！」

なんですって！？

「ギガインパクト一発？バカな…だとすれば四天王かチャンピオン

クラスのトレーナーがいると言うことですか！？？」

巨大な廃倉庫を吹き飛ばすとは…厄介ですね

「分かりません…ですが未確認ですがライモンシティでやまおとと一緒に観覧車に乗っていた男がワタルにそっくりだとか、団員がダイキとなのである男に滅茶苦茶にやられたとか…」

「まずまず警戒が要りますね」

「各支部に警戒は怠らないように伝えなさい！…それと城の建設も部下に指示を出し下からせる」

私の野望はこんな所で終わらないのですよ…

オマケ

「ママ…あの人変なカツコしてるよ」

幼稚園児が言う

「シッ…いっちゃダメよ」

母親がそそくさと去る

「……何故人がこない…」

ワタルは呟いた

「一回着替えて見るか…」

ワタルは身を翻しブティックに入ってしまった

30分後

クラッシュジーンズにダウンジャケット、ワンポイントにシルバー

のネックレスを装着したワタルが居た

はつきり言って面影はない

「これで良い……のか？」

ジーンズやジャケットは私服のダイゴ

シルバーのネックレスはダイキが身に付けている物を参照した

「……ならば！行こう！！運命の人を求めて！！」

彼は意気揚々と歩き出した

彼に新たな出会いがあるのか…それはまだ分からない…

「着いたわ…ここがイッシュ…」

シロナはイツシュに上陸した

直ぐに連絡しようかと思ったが止めた

そもそも未だに彼らのポケギアは旧型…片落ち品に近い

「まずは…買い換えましょうか!!」

取り合えずシロナもエンジョイすることにした

壁はぶち抜く物（後書き）

さて今度作る番外編ですが…

1 ダイゴの婿入り大作戦！！

2 ダイキのメインにクローズアップ！！

の2本の内どちらかを選択してください

なおダイキのメイン（と言っても手加減時、リーグ戦に主に使用）に出るポケモンは

北斗神拳チャールム

ダンサーバンギラス

暴走戦車マンムー

食いしん坊カブトプス

ヤンキーズルズキン

音楽家エレキブル

の6匹です

なお2を選んだ場合

本編登場もあります

ダイキのリーグ戦ポケモンにクローズアップ！（前書き）

出来ました！

感想は後日返信します！！

ダイキのリーグ戦ポケモンにクローズアップ!

俺はシンタ!

ついにここまで来たぜ!!

俺は負けない!無敗のチャンピオン!?

ブツ倒してやる!!

ドアを押して入ると:スーツを来た男:ダイキが居た

「ようこそ:チャンピオンの間へ!私がチャンピオンのダイキです

!..... 問答は必要ないね?勝負だ!!」

へッ!見てるよ...

「いけっチャーレム!!」

「ぶっ飛ばせ!オンドリル!!」

へえ...相性は良いな

けど何だあのチャーレム...

目を瞑ってやがる...

「チャーレム:存分にやってくれ」

するとチャーレムは一瞬で間合いを詰めて

「ア~チャチャチャチャチャチャチャチャチャチャアチャ

アアアア!!!!!!」

オンドリルを滅多打ちにした

「オンドリル!?!」

しかしオンドリルは何ともない...ハツタリか?

「アチャ:チャチャーレム:(お前はもう:ひんした)」

チャーレムが何か言った途端

「ドルブハア!!!!!!」

変な奇声を上げてひんしになった

「ハアアアアア!?!」

なんだよアレ!?!理不尽だ!

「くそっ…いけっ！ライボルト！！」

「出番だズルズキン！！」

ヤンキーが出てきた…煙草吸ってるよ

「ライボルト！！かみなりのきば！！」

ダイキは慌てず言った

「ズルズキン！！避けて好きなように！！」

何だ？その命令

するとズルズキンは…

「ズキン！！」

け…ケンカキツクウ！？

ライボルトの顔面にモロヒット！？

「ライ！？」

そのままマウントポジションで殴り続けるズルズキン！！

「ズルズルズルズル！！」

……何なんだよチクショウ！！

「いけえスパア！！」

スパアを繰り出した

「出てこいエレキブル！！」

エレキギター持って出てきた！？

「ブルウアアアアア！！！！」

エレキギターをへし折ってスパアをかみなりパンチでぶん殴るエレキブル

「スピピピ！！」

痺れるスパアをそのままぶん投げた

……通りで破壊神なんて言われる訳だ…ありとあらゆる常識を破壊していやがる！！

まだまだ！！まだ終わらない！！

「いっけえ！！アーマルド！！」

「切り裂けカブトプス!!」

現れたカブトプスはいきなりアーマルドとすれ違った
その瞬間

「ガツガツガツガツ!!」

アーマルドのオボンの実食ってやがるうううう!!
どろぼう所じゃねえ!!

「プスウ!!」

そのままカブトプスはアーマルドの背後に回り切り裂いた

……心が折れそうだ……

「……ゴ―!ギヤラドス!!」

「ぶっ飛ばせバンギラス!!」

いつのまにか後ろに引っ込んでいたエレキブルがどっからか持ってきたエレクトーンを弾いている

しかも上手い……

「バンバン ……ギラアアアス!!」

ヘッドスピシしながら出てきやがった!!

「ギヤラドス!!りゅうのいかり!!」

牽制の為にりゅうのいかりを放ったが……

「ギラギラアアア!!」

……今起こった事を有りのままに話すぜ

ギヤラドスのりゅうのいかりをバンギラスの奴が……ムーンウォークで避けやがったアアアアア!!

「バンツ!!」

そのままストーンエッジでギヤラドスは退場しちゃったよ……
もう一匹しかない……だけどコイツにかける!

「いけっ!エンペルト!!」

「とどめだマンムー!!」

コイツホントにマンムー!?

でかくない！？

「このマンムーはおりのぬけみちの古代の主だ…ニユースにならなかつたか？生きている1万年前のマンムーが凍り漬けて発見されたと」

そう言えば暫くニユースでやってたよな…

「余りに強いんでな、俺が引き取ることになったのさ…マンムーとっしん！！」

猛然と突っ込んでくるマンムー

「ムウウウウウ！！」

だが負けない！！

「エンペルト！！アクアジェット！！」

「ペルウウウト！！！！」

そして激しい衝突が起こり…エンペルトはやられてしまった…

嘘だろ…1匹も倒せないなんて…俺は目の前が真っ暗になった

「今日も防衛成功…次は誰かな？」

ジョウト無敗のチャンピオン…ダイキ

彼は再び挑戦者を待つ

ブツ飛んだ奴等を従えて…

ダイキのリーグ戦ポケモンにクローズアップ！（後書き）

さて控えメンバーですがバンギラスとマンムーはメインにいてもおかしくないです

特にマンムーはドサイドンやカビゴン相手に真っ向勝負が出来るのでその凄さが分かります

2と話してみよっ！ (前書き)

ありがとうございました

出来ました！！

Nと話してみよう！

夜のフキヨセ…ブラックはフウロに勝った後外に出ていった
少しして何やら複雑な顔をして戻ってきて布団に入った

私も寝ようと思ったけど星空が綺麗なので外に出た
暫く寛いでいたら人がやって来た

「こんばんは…」

緑の髪の少年が話し掛けてきた

「ええ…こんばんは、良い星空ですね」

緑の髪の少年はそれを受けて言った

「確かに…ところで貴方は何者です？」

声の雰囲気が変わった

嫌な予感がするな…ボールに触りながら返事をした

「私はベテランのトレーナーでダイキだけど？」

すると直ぐ返ってきた

「嘘はつかなくて良いよチャンピオンさん…僕はN…貴方と話がしたいんだ」

そこまでバレてるか…

「何が言いたいんだいN君？」

するとN君が言った

「貴方はポケモンをどう思っている？」

口を開こうとしたが更に彼は続けた

「僕はポケモンのトモダチだ…ポケモンは人に関わってはいけない、解放するべき物だ」

この発言…どっかで聞いたな…

「君は…まさか…」

N君は微笑んだ

「そう、僕はプラズマ団の王だ」

こんな所で親玉が出てくるなんてね…

「君達は間違っていると思う、私達は良い意味で双方が依存している…私達はポケモンを使い発展しポケモン達も私達と共に歩み発展してきた」

N君はフツと笑った

「やっぱり平行線かな…理解しては貰えないね」
緊迫した空気が流れる

「貴方のポケモンを見せてくれませんか？…会話がしてみたい」
ポケモンと話せるの!?

私は信じられないと思いつながらシャイで今爆睡しているギラティナを除いた5匹を繰り出した

「こんばんは…僕はN、ポケモン達を自由にする活動をしてるんだ」
するとN君が途端に青ざめた

コイツらはグルグル唸っている

「わ…分かったよ！今はしない！！何もしないから！！」

…コイツら何いつてるんだ？

「…ははは…じゃあまた会おう！！」

N君は去っていった

ボールに戻しながら私は思った

コイツら…ホントに何言ってたんだろう

僕はポケモンに問い掛けた

すると

ドサイドン

（貴様…我等をマスターから引き離すつもりか？…ただでは済まさんぞ…）

カイリキ

（さて…てめえは俺達を怒らせたアアアアアアアアアア！！！！一昨日来やがれ！！！！）

カビゴン

(ふむ…つまり君はワシのギガインパクトを食らいたいんだな？大切なマスターとワシらを引き離すと言つのなら…)

オノノクス

(引き離すって言うなら…斬るよ？どこがいいかな!?)

フォレトス

(お前達…少し落ち着け、確かに許せないが…)

ドサイドン

(分かったから黙ってる)

カイリキ

(落ち着ける訳ねえだろうがアアアアアアア!)

カビゴン

(クルミは黙つとれ!)

オノノクス

(…割りたい?)

フォレトス

(…分かった…お前らが正しい)

4匹

(…(分かれば良いんだ)(…)

理解できる訳ないよオオオオオオ!!!

電話を掛ける

「もしもし…Nだけど」

「おや、どうされました？」

「ポケモンとトモダチになる自信が無くなったよ…」

「何が合ったのですかアアアアアアアアアアア!?!?!」

ダイキは1人考えていた

N達プラズマ団がポケモンを解放するならどんな手段を取るのかと

そして気が付いた

「ポケモン預かりシステムか!？」

ポケモン預かりシステムに介入できれば全てのポケモンを解放するのも不可能ではない

考えすぎかも知れないがダイキはあのプラズマ団員やNの目を見てやりかねないと判断した

しかしリーグに言ってもどうにかなるものではない

それこそチャンピオンの領分を越えている

ならば…どうするか？

自分がNならば手始めにイッシュから行うだろう

ダイキは直ぐにボックスからとあるポケモンを手持ちに加えて指示をした

プラズマ団は気が付いていないだろう

この世には人工で産み出され電脳世界を支配するポケモンがいることを!

「頼むよ…ポリゴンZ」

ダイキはプラズマ団相手に本気で戦う事を決意した

Nと話してみよう！（後書き）

さて！ダイキは本格的に戦いを決意しました
ポリゴンZはその布石です

真面目なダイキとエンジョイするチャンピオン達(前書き)

ちょっと短めです

返信は明日行います!!

今まで寄ってこなかった女子が寄ってくる！！
それがなんと嬉しいことか…

あのやまおとこのシヨックから立ち直りワタルは雄々しく立ち上がった

目指すは運命の人…

そう決意した

その時

「すまないが…ポケモン解放してくれないか？」
振り向いた時

ワタルは心を撃ち抜かれた

引き締まったボディスタイル、そして出るところは出て引っ込んでる
ところは引っ込んでる

顔のパーツバランスも完璧

ただしプラズマ団の服を着ているが…ワタルは気にしない

「な…なんて…美しい」

焦ったのはプラズマ団員だ

「な…なななな！！なんて事を！？」

しかしワタルは熱っぽい

「申し訳ないですが…お名前を…」

「……シリアだ」

「素晴らしい…」

ワタルは…プラズマ団員に惚れてしまった

ダイゴは寛いでいた…もとい慕われていた

「いしのにいちやくん！このいしなあゝに？」

幼稚園児達がやって来る

「ん！……これはよく見つけたね！！これは昔の葉っぱの化石だよ
！！！」

ダイゴは熱っぽく言った

「ほんと！？やったああああ！！！」

「いいゝなあゝひろしくんゝ」

「ハハハ！！じゃ、この石をあげるよ！」

ダイゴはポケットから石を上げた

ダイゴは人気者になっていた

シロナはダイキを探し続けた

そして… 1人の少年を引き連れ談笑しているダイキを見つけた！！

「ダイキィゝ！！！」

シロナは走り出した

「ん？…シロナ！？…つてうおおおおあ！？」

シロナは走ってダイキに飛び付いた

そして… 勢いを殺しきれずダイキは転がってしまった

「し… 師匠オオオオオオオ！！アンタ誰だアアアア！？」

ブラックが驚くのも無理はない

ダイキが立ち上がった途端飛び付いた美人が腕に抱き付いているのだから

「ああゝブラック… 彼女はシロナ… 俺の恋人だ」

ブラックは一拍おいて

「そんなバカなアアアアアアア！！！！！！！」

絶叫した

そりゃそうである

美人の彼女がいきなり師匠にしていることが分かったのだ

……ブラックの運命やいかに！？

破壊神とプラズマ団が動き出しました！（前書き）

出来ました！

破壊神とプラズマ団が動き出しました！

さて…ブラックは気を使ってしまい…

「じゃあ！旅は此処までで！番号は登録したのでまた会いましょう！師匠！！」

と別れてしまった

「あなた、いつのまに弟子なんかつくつたの？」

シロナも尋ねてきた

「旅先であつただけ…はつきり言つてワタルやミクリに匹敵するバトルの才能があつたからね、鍛えたくもなるよ」

そう言つた後シロナの方へ向き直り言つた

「シロナ…かなり深刻で難しい問題があるんだけど、いいかな？」

シロナもその発言を聞いて真剣になつた

10分後

「…とんでもないわね…」

シロナもぶちギレそうだ

「あくまで私の推測も入ってるけど…多分間違いないよ」

シロナが考え込み言つた

「ダイキ、リーグを出る時に知つただけ…ワタル達も来てるみたいよ」

あいつらが…

「なら話しは早い…」

シロナも微笑んでポケギアを取り出した

「戦争を始めよう（ましよう）」

ダイキとシロナが動き出す

その頃のポリゴンZ

「な…なんだあ！？」

1人の下っぱプラズマ団が叫んだ

「が…画面が…ぶっこわれだああああ!!」

画面の中をワルビアルがカクカク動いている

向こうのパソコンでも…

「ヤベエ…ブログが流出したあああああ!!」

近くに来た奴が覗くと…ゲーチスへの愚痴が

「アホオオオオオ!!消されるぞおおお!!」

大パニックに陥るとある支部

ポリゴンZが片手間と気紛れにやってこれである

本気は…ダイキですら見たことがない

プラズマ団

「ブラックストーンとライトストーン…どうですか？」

幹部は答えた

「はっ！既にゼクロムは復活間近、レシラムも次期に復活すると思われませぬ!!」

笑いが止まりませぬ

当初はゼクロムだけでしたが…上手いこときました

侵入しているチャンピオンクラスでも伝説…特に神話に語られるポケモン相手はキツイはず

N様も最初の方は渋っておられたが…二つの石が反応した事で納得なされた

しかし…今だにブラックとやりに執着して居られるようだが直に止まるだろう

テレビの準備も預かりシステムへの介入も全ての戦力を一時城へ集中させる準備も整った…

N様がアデクを倒し…英雄候補らしいブラックを倒した時…私の野望は叶う!!

「フハハハハハハハハ!!」

ゲーチスが高笑いする頃

何処かの場所で

「キュラアアアア！」

一匹の龍が目覚め動き出した

そして

「ギラアアアアア！」

同じく神話に語られる引きこもりポケモンがイッシュに来て初めて
吼え闘志をみせた

「な…何だ？…何か感じるのか？」

ダイキは首をかしげた

「まさか…イッシュの幻のポケモンに反応した？」

シロナも首を捻る

チャンピオン連合がプラスマ団に牙を向けるのは…もつまもなくだ

「私は…悪人だぞ？」

ワタルはシリアに迫った

「……そんな事はない…もし君がプラスマ団を重荷とするなら
…俺が滅ぼそう…それに君は根っからの悪人じゃない」

シリアは腕がほどけない

兄たちがプラスマ団にのめり込み自分も入らざるを得なくなり…ど
こかで苦しんでいたのだ

「……そんな…出来る訳が？」

シリアの問いに首を振った

「俺1人じゃない…コイツらがいるからな」

ワタルはボールを弄りながら笑い

シリアはその笑顔から目を逸らした

……ワタルは絶賛ラブロマンス中である

破壊神とプラズマ団が動き出しました！（後書き）

いよいよ次回からチャンピオン達がプラズマ団相手に戦争をおっ始めます！

またブラックのもとにあのドラゴンが！

え？何故戦争かと？

ワタルとダイキがいる時点でプラズマ団とは試合にはなりません！

大！戦争！！（前書き）

出来ました！

返信は明日行います

大！戦争！！

ブラックは決意を固めた

8つのジムバッチを手に入れた時…空からキュレムがやって来たのだ
キュレムはレシラムとゼクロムを止めることが出来る数少ないポケ
モンらしい

シヤガさんが言った

「キュレムが来たと言うならば…君は英雄の片割れの資格があるの
だろう」

と言われた僕は四天王に挑み勝利した

所が…地面から突如城が生えてきた！！

「ウオオオオオオ！！何だ！？」

翻っているのはプラズマ団の旗！？

まさか…Nがチャンピオンを倒したの？

見ればアデクさんが膝をつきNが城へと去っていく

慌てて走り出そうとした時だ

プラズマ団の城の一角が吹き飛んだ！！

「なんだ…しかもこの破壊力は！？」

アデクさんが立ち上がり驚く

外を見ると…緑の巨龍の上に立つ人がいた

ジュンサーは焦っていた

街頭テレビやラジオがジャックされプラズマ団のリーダーがチャン
ピオンを倒した事を団員が高らかに宣言している

そして…リーダーが気に懸ける1人の少年が負けた時…ポケモン達
は解放されると言う

既に町には勝利を確信したプラズマ団員がボールを強奪している
止めれない…そう思った時だ

「ガブリアス！！じしん！！」

1人の女性が全てを蹴散らした

「まったく…気が早いわね」

その女性はポケギアに手を伸ばし電話をかける

「もしもし…ダイキ？ポリゴンZの回線ジャックは…：OK！…行くわよ…放送開始！！」

ゲーチスは椅子に座り野望が成り立つのを待っていた

その時だ

『あ…：…テステス、聞こえますか？』

なんか知らない声が…

『コホンツ…イッシュ地方の皆さん！！私はシンオウリーグチャンピオンのシロナです！』

シロナ！？…凄い人が潜り込んでいましたか…

『これより！！英雄候補の少年のサポートとプラズマ団の壊滅を目標として…チャンピオン連合がプラズマ団に宣戦布告します！！』
はっ？チャンピオン…連合？

『こちらはカントー地方チャンピオンワタルだ！！貴様らの野望はここまでだ！！』

声が切り替わった！？

まさか…

『ホウエン地方前チャンピオンダイゴ…君達の遣り方は間違っている』

コイツまで！？

『ジョウト地方チャンピオンダイキ…さあ！！祈りを捧げる時間きましたよ…』

『『『『戦争の始まりだ！！』』』』

4人の叫び声が響き強烈な爆発音が響いた

ワタルはそこからりゅうせいぐんを撃ちまくり、ダイキはドサイドンのがんせきほうで正面を吹き飛ばし単身突入

シロナは増援をガブリアスで蹴散らし
ダイゴはジュンサー達を率いて退路を断ちに行った

ゲーチスは立ち上がりNの所へ向かった

Nが勝てばどうにでもなる

プログラムは既に掌握している

そう確信していた

だからこそ端末を置いていつてしまった

持っていたらば…プログラムが既にポリゴンZにより愉快なポケモン
ダンスのプログラムに切り替わり変更できずパニックになっている
技術班の悲鳴が聞こえただろう…

Nは勝利を確信した

「ゼクロム、レシラム！クロスサンダーとクロスフレイム！！」

圧倒的な2体のコンビネーションでブラックを潰しにかかる

「キュレム…コールドフレア！！」

彼の手持ちはよくやったがキュレムを除き戦えない

くすりはあるが使う隙がない！！

「残念だよ…ブラック、僕の勝ちだ」

2匹の技がコールドフレアを突破した

「クソツ！！…ごめん皆…俺負け…諦めるのはまだ早いよブラッ

ク」へ？」

ガツシインと言う音が響き

「リキイイイイイイイイアアアアアアア！！！！」

カイリキーが豪腕を持って防いでいた！！

「なに！？」

Nは叫び

「嘘っ！師匠！？」

ブラックも驚いた

「やれやれ…間に合ったか…不公平だから私も助太刀しよう…隠れ

てないで出てこい」

ゲーチスがユラリと現れた

「レシラム…暫くゲーチスの言うことを聞いてくれ」

レシラムは頷きゲーチスのそばにきた

「全く腹正しい…ここで終わりにします!!」

ゲーチスが叫ぶ

ダイキはカイリキーを戻しながら言った

「その通りだね…久し振りにコイツが燃えてるんでね、いけっ!!」

マスターボールから飛び出したのは…

「ギラアアアアア!!」

凄まじい闘気を漂わせるギラティナだった

「な…なななな!?!」

焦るゲーチス

「行くよブラック…ダブルバトルだ!!」

ゲーチスフルボッコタイム
最終決戦が始まる!!

大！戦争！！（後書き）

次回！

ギリティナ大暴れ！

ドサイドン達大暴走！！です！

てめえは私達を怒らせた(前書き)

ありがとうございます!!
こんな感じになりました!

てめえは私達を怒らせた

ゲーチスは舌打ちをした

「くっ…厄介ですね!!」

全てのポケモンを扱う術を極めた者…それがチャンピオンだ
それに対してゲーチスは一流とは言え地力が違う

伝説のポケモンを完全に持て余している

「ギラアアア!!!!!!」

ギラティナはシャドーダイブを駆使し敵を翻弄している

「……………もぐら叩きみたいだ」

Nは心が折れそうだ

だがゲーチスはどんな手段でさえ取る!!

「いきなさい!デスカーン!!」

デスカーンがダイキに襲い掛かった

「……………っ!フォレトス!!」

フォレトスがガキインと受けとめた

「知ってますか?イツシュにはトリプルバトルとローテーションバトルとあるんですよ?」

ダイキも驚いた

「……………いきなり出すのかい?」

そんなダイキを嘲笑うかのように……………絶対に言っではいけない言葉を言った

「ふん…貴方達とは違うんですよ…勝つためには手段は選びません、貴方達も所詮アデクのようなヘタレに過ぎませんよ」

……………何があっても良いように回線はオープンにしていた
結果その発言を聞いて全てのチャンピオンが止まった

そして…キレた

「ゲーチス…てめえは私を怒らせた、あの人の事を何も知らん貴様が…知ったような口を聞くなああああ!!ジャイロボール!!!!!!」

「フオオオオオオ!!」

フォレットスのジャイロボールがデスカーンを一撃で撃破し壁すら吹き飛ばした

「……は？」

更に空から降ってきたのはりゅうせいぐん!!!

「ザアアアアア!!!」

レックウザに跨がったワタル!!

「あの人は俺達チャンピオンの中で最年長だ、数多くの事を教えてくれた素晴らしい人を…ヘタレだと!？」

更に左右に強烈な爆発音が再び響き…ガブリアスとメタグロスを傍らにシロナとダイゴが現れた

「私がダイキと付き合う事を聞いたら喜んでくれた、笑いながらチャンピオンの仕事を教えてくれた…」

シロナは呟いた

「新人チャンピオンは皆アデクさんに教えてもらうのさ、ポケモンリーグチャンピオンとしての在り方をね…」

ダイゴも言った

ゲーチスは辺りを見回した

ギラティナとキュレムが即席コンビネーションでゼクロムとレシラムを抑え救援は無理

と思ったらギラティナがゼクロムを影に引きずり込んでしまった!

そして瀕死状態で出てきた

ギラティナは傷すら負っていない

チャンピオン達を見る

温厚で知られるダイキの額に青筋が浮かんでいる

心優しいシロナの瞳から光が消えている

気がいい兄貴肌のワタルは怒髪天を突いている

知性派で冷静なダイゴも拳を震わせている

全員時期こそ違うがアデクの前で研修を受けた事がある
つまり…みなアデクを尊敬しているのだ

ゲーチスは悟った

自分は火に油どころかニトログリセリンを放り込んだのだと

ダイキがポケモンを自らの最強…ドサイドンに切り換える

逃げ場は無し…

「ふ…ふざけるな！！世界征服の野望がこんな所で！！」

ゲーチスはわめく

「Nにブラックと言ったな？とつと逃げる、ダイキのギラティナに
捕まれ…続きは外でしろ」

ワタルが言った

Nもブラックもヤバいと感じて直ぐ様ギラティナに飛び乗り闇に沈
んでいった

「破壊は私とワタルの専門分野だ…ダイゴ」

ダイゴはユレイドルを使ってゲーチスを捕獲しシロナはそれをガブ
リアスに抱えさせ離れた

「ゲーチス、貴方の夢が消えるのを間近で見れるわよ」

シロナは呟いた

「リザードン！レックウザ！ボーマンダ！ギャラドス！カイリユ
ー！ガブリアス！」

ワタルが叫び繰り出す

「ドサイドン！カイリキー！オノノクス！フォレトス！カビゴン！
ダイキも繰り出す

ワタルとダイキ…

ポケモンリーグ史上もつとも破壊に優れたチャンピオン達のポケモ
ン達の一斉攻撃！！

「ブラストバーン！！りゅうせいぐん！！ハイドロポンプッ！！」

「がんせきほう！！インファイト！！げきりん！！だいはくはつ！
！ギガインパクトッ！！」

凄まじい光が辺りを包み…Nの城は跡形もなく吹き飛んだ
多数の団員が巻き込まれたが死んではない
しかし…警察よりICUが必要かもしれない

「わ…私の…野望が…そんな…」

ゲーチスがブツクサ言っているが無視してジュンサーさんに引き渡す
外にいたプラズマ団員も逃げ出そうとしたが…

廃墟となった城から悠然と進む破壊神とドラゴンマスター…そして
その手持ちを見て逃げるのを諦めた

「……………絶対ゼクロム達より強いよねあのポケモン達…」

Nが呆然と言った

「きつとさ…強いとか弱いじゃなくて、どこまでもポケモンを信頼
して仲良くなれるからじゃないかな？」

ブラックは心のままに言った

その時フツと頭にある言葉が思い浮かんだ

『強いトレーナーになるなら自分の好きなポケモンで勝つことを考
えなさい』

カリンってトレーナーがTVの質問に答えていたのを思い出した

「ホント…叶わないや」

ブラックは笑った

被害報告

多数のプラズマ団員が余波に巻き込まれ病院行き

ゲーチスは刑務所に行く前にカウンセリングを受けることに

Nはアデクが責任を持って監督することに

チャンピオン達

イッシュ地方の一部の地形を変えてしまったため本部から大目玉を

貰ったものの警察、イッシュジムリーダー会より表彰を受ける

プラズマ団員のパソコン

全てのデータをポリゴンZが削除

介入プログラムは跡形もなくポリゴンZが吸収

ますますパワーアップしてしまった…

てめえは私達を怒らせた（後書き）

次回からはオリジナルです！

アニメ版のキャラクターも登場予定！

ホウエン地方でミクリ主催のコンテストバトルにダイキ達がコツン
リ参加するストーリーも予定です！！

ホウエンフリーダムカップ!! (前書き)

出来ました!

感想は明日返信します!!

あとは後書きをご覧ください

ホウエンフリーダムカップ！

今私はホウエン地方にいる

ミクリから息抜きにコンテスト大会に出てみないか？とお誘いがあつたからね

シロナやワタルは確定らしいが…アデクさんは復興やNを鍛えるため来れないらしい

残念だなあ…

「ホウエンフリーダムコンテスト？」

俺は博士に問い掛けた

「そうじゃよサトシ、トップコーディネーター以外にもポケモンレングジャーやベテラントレーナーも参加するお祭りじゃ」

へえ〜何か楽しそうだな！

「ピカピツ！！」

ピカチュウも頷いた

「しかも…今回は各地方のチャンピオンもやって来るらしいぞお〜？」

嘘だろ！？

「それホント！？オーキド博士！！」

博士は頷いた

イッシュに行く前にそっちに行ってみるか！！

「行くぞピカチュウ！！」

「ピツピカチュウ！！」

俺は準備を整えてホウエンへ向かった

待ってるチャンピオン！！

「ふうむ困ったな」

コンテストバトルなんぞ殆どした事がないし…

少なくとも私のポケモンでコンテスト向きはギャロップとバンギラス…後は未知数だから…ドサイドンとフォレトスにゴルージュ…演技の練習相手にカイリキーくらいにしよう

ギャロップは技を使えば映えるだろうしバンギラスはダンサーだ
フォレトスは真面目だし大丈夫

ゴルージュは珍しいのも合って好評価だろうドサイドンは…自重してくれば大丈夫か

さて…一次はともかく二次だよな…

合体技で尚且つ美しく！…いやそもそもコイツらに美しさを求める方が間違ってる！！

となれば…派手にかっこよく…か

…考えるのも意外と楽しいものだなあ

コンテスト会場の片隅で、ジョウトチャンピオン改め考古学者ドクターDとして参加しているダイキがいた

チャンピオンがいれば目立つ為変装しているのだ

勿論気付いた人がいれば正体を明かすし快くバトルするつもりだ

……ポケモンで一発でバレル可能性には気付いてない

そもそも実力はあるがマイナー気味なゴルージュや玄人好みのフォレスト等特徴がありすぎる

オマケにドサイドンなんて言う育成が最高難易度のポケモンを連れてればバレル確率は高くなる

それには気付いていないようだ

因みにワタルはワッター・デ・アールヨと言うワケの分からない偽名で

シロナは普通に参加する

因みに人気はシロナ>>アデク>ミクリ>ダイキ>>>ワタル>>

>ジムリーダーだったりするのでダイキとワタルの変装は意味がなかったりする

そんな中ダイキがふと見れば糸目の少年がウソツキーを撫でていたよく育てられているみたいだ

すると赤い服の女の子とポツチャマを抱えた女の子が糸目の少年に駆け寄って笑い合っている

するとピカチュウを乗せた少年も走り寄ってきた…

ん、アレはサトシ君か？

確かリーグの親交会で次世代の有望株だったな

機会があったら話し掛けてみるか…

……あら？ドサイドンが騒いでる

あのピカチュウを警戒しているのか？

じっくり見てみればとても鍛えているのが分かる

ふむ、一回戦つてみたいな

そう思いながら私は会場に向かった

「何だつて！？チャンピオンが3人も！？」

俺は偶然再会したハルカやヒカリ、タケシに言われた

「ああ…何でもあのシロナさんやワタルさん、後は会ったことがないダイキさんだ」

くうく燃えてきた！！

早く会えないかな…

ホウエンフリーダムカップ！！（後書き）

さてコンテストに当り…二匹の合体技を募集します！
対象はダイキの手持ちですがカイリキーは加えても構いません
コンセプトはとにかく派手に！です
カッコよければ更に良し！
美しさ？アイツ等には無理です
ではよろしくお願いいたします

アピールタイム!! (前書き)

出来ました!

まだまだ合体技は募集します

アピールタイム!!

今回の一次審査は2体のポケモンを繰り出しその2匹のパフォーマンスを披露して得点を換算

続く二次審査で華麗にバトルして点数をつける

一次と二次の合計で決まるため二次で負けても一次が高ければ逆転の可能性もある訳だ

ヒカリやハルカはあつという間に突破して次の試合相手が誰になるのか観察していた

「あれ？ねえハルカの次の相手ってあの2人の勝った方じゃない？」
ヒカリが指差した方を全員が見る

「え〜つと…：ジョウトのコーディネーター、ローラさんとジョウトの考古学者ドクターDだそうだ」

タケシが普通に読み上げた

「多分…：ジョウトのローラって人と戦うんじゃないか？」

サトシが言った

皆、ローラの演技に注目していた

「雷と氷のコラボレーションをどうぞ！」

ツインテールのローラがユキメノコとピチューを繰り出す

ユキメノコのおりのつぶてにピチューのほうでんを当てて壊し…

光輝いた!!

「これは強敵ね」

ハルカが呟いた

そしてドクターDことダイキがポケモンを繰り出した…：が会場はざわついた

「ギャロオオオオ!!」

ギャロップはまだいい

「バアアアアングラス!!」

明らかに一匹コンテスト向きじゃない！！

観客も審査員も口をあんどりと空ける

誰か知っているミクリは成程と苦笑した

「では行かせてもらいます…ギャロップ！！かえんほうしゃでこう
そくいどう！！」

ギャロップがバンギラスに向けかえんほうしゃを発射しながら動き
回る

それをバンギラスがヘッドスピンやブレイクダンス、拳げ句の果て
にフラダンスしながら余裕綽々と避けている

「信じられないわよ…」

ヒカリが驚く

「本来バンギラスはそんな陽気じゃないんだけどなあ…」
タケシも目を見張る

岩タイプ最強クラスの重戦車、バンギラスが華麗な動きでステップ
を踏んでいるのに常識はずれだからだ

「バンギラス！すなあらし！！」

バンギラスがすなあらしを起こすとその影響で火がすなあらしに乗
り巨大な火の竜巻になった

「これは凄いな…バンギラスもやるじゃないか」

こっそり隠れていたワタルも言った

「最後！あくのはどう！！」

次の瞬間黒い強烈な波動が火と砂の竜巻を一瞬で掻き消した

『うおおおおおお！！！！』

観客が一齐に盛り上がる

「コンテスト向きじゃないバンギラスでこんな演技を…」
審査員も評価している

ローラは驚いた

しかし二次審査は負ける気がしない

何故ならばピチューには伝家の宝刀ボルテッカーがある！
ユキメノコにはふぶきもある

最終合体技

ユキメノコのふぶきを纏いながらのボルテッカー…アイスボルテッカーで各地のコンテストを勝ち上がってきたのだ
今回も勝つ！

二次審査が始まり2匹が向かい合う
狙うは一番厄介なバンギラス！！

「ユキメノコ！ピチュー！必殺！！アイスボルテッカー！！！！」
ピチューが凄まじい稲妻と吹雪を纏い突撃する

「ピ〜チュチュチュウウウウ！！」

『なんて素晴らしい！！これは美しい！！』

実況も褒め称える

……だが相手が悪かった

彼は考古学者ドクターDだが本職はリーグチャンピオン、それにこのバンギラスはリーグ戦用とは言えマンムーと並びドサイドン達とやりあえる力を持つのだ

「バアアアアーン！」

右パンチ一発でアイスボルテッカーのピチューをすっ飛ばし戦闘不能にした

『……………は？』

実況も観客も言葉が出ない

バンギラスはシャキーンと何事もないようにポーズを決めている

……はつきり言って滅茶苦茶だ

そこからバンギラスを踏み台にして空からフレアドライブをしながらギャロップがユキメノコに突撃し又も一撃で戦闘不能に

「……………理不尽よ……」

ローラはガックリと膝を付いた

『な…なんと僅か二撃で戦闘終了！このポケモンは強すぎる！！ま

さかの大波乱か!？」

実況の叫びに観客もまた盛り上がった
優勝候補の一角にドクターDが名乗りを上げ、ハルカは闘志をみなぎらせた

オマケ

「なあタケシ、シロナさん達は会ったことあるけどダイキさんてどんな人なんだ？」

タケシはサトシに聞かれ思い出しながら答えた

「そうだな、マサラ生まれのジョウトチャンピオンで、理不尽なまでのパワーで敵をねじ伏せる人だな」

サトシはマサラ出身に驚きながらも訪ねた

「他のエピソードはないのか？」

タケシも直ぐに言った

「有名なのはポケモンリーグ本部を壊滅寸前まで壊した事と…最近だったらカントーは田舎、ジョウトはド田舎と言ったトレーナーをニコニコ笑いながら完膚なきまでに倒したとか…後は意外に親切で優しいらしいぞ」

人柄とやってることがかなり違う気がするな…とサトシは内心思ったが重大な事に気が付いた

「なあ、見た目はどんな人なんだ？」

タケシはチラッと見たことがあるので言った

「そうだな…確か背が高くくてコートを着ているか帽子を被ってる、後若いのにしらが…」

いってる最中サトシもタケシも気が付いた

「タケシ…さっきのドクターDって白髪だったよな」

オマケにあり得ないほどの強さのバンギラス…

「……きつと偶然だ!!多分!!」

「……そうだよな!!」
いくらなんでもチャンピオンが参加している筈がないと2人は結論した

そんな中ヒカリは準備を始めた

ヒカリはハルカより随分早く試合があつたのだ

二回戦

ヒカリVSワツタル・デ・アールヨ

対戦相手が最強の竜王だと言うことを誰も知らない……

「なあ…ダイキ」

「どうしたんだワタル？」

「どうすれば勝ちだっけ？」

「お前何しに来てんだあああああああ!!」

「人気上げたいんだよコンチクシヨオオオオオオオ!!!!!!」

……大丈夫かワタル!?

アピールタイム！！（後書き）

アイデアを使用させていただきまして
ありがとうございます

ワタルは一回戦シードでした
次はどうなる！？

ワッタルー！！（前書き）

出来ました

ワッタル！！

ヒカリの演技は好評価だった

マンムーとポツチャマを使ったの演技はこおりのつぶてにバブルこ
うせんを合わせるものだ

シャボンをこおりのつぶてで見事に打ち抜き破裂したシャボンが美
しく飛び散った

そしてワッタル・デ・アールヨが現れた

普段のボディースーツにマント…もはやバレバレである

会場の隅っこの方でダイキに腕を組んでしなだれ掛かっているシロナ
は呟いた

「ねえダイキ…ワタルは隠すつもりがあるの？」

ダイキも額に手を当てた

「分からないな…まあそれがワタルだしな」

ワタル改めワッタルが出てきた瞬間アレ、ワタルじゃね？見た
いな声が出てる

「出でよギャラドス、ハクリュー！！」

もう出てきたポケモンで自分がワタルだと宣言しているような物で
ある

「ギャラドス、うずしお！！ハクリューはなみのりだ！！」

うずしおが発生し水の渦をハクリューが優雅に泳ぎギャラドスがた
きのぼりの勢いで高速で移動する

「ラストだ…ギャラドスたつまき！！」

強烈な風がうずしおを吹き飛ばす！！

しかし…ダイキと似たような技だが決定的に違う点がある

それは他者への配慮

ダイキは一応派手にはやったが被害は天井の焦げ程度だ

ワタルはお構い無しの全力だ

結果竜巻で加速した水は誰彼構わず襲いかかる

「ぐあああああ!!」

揉んどり打つタケシ

「タケシイイイイ!!」

慌てて助けるサトシ

「おいおい!! 考えてるのかワタルは!」

シロナを庇いつつ水を避けるダイキ

チャンピオンは歳のアデクを除けば皆運動神経抜群である

そうでなかったらワタルのりゅうせいぐんから逃れる事は出来ない

一説によるとロケット団並みの身体能力とも言われているが全員バ

ツク転が出来るくらいには優れている

「……いつもごめんね」

シロナはちよつと詫びたがダイキは変わらずに言った

「良いんだって… 恋人を護るのは男の仕事だしな」

そうカツコつけて前を向いて… 口をあんぐりと開けた

「ギャラドスとハクリューが飛んでやがるうううううううううううううう!!!!」

ううう!!!!」

竜巻に乗って見事に飛んでいる

ワタルの変装マスクもすつ飛んで素顔が露になっている

審査員だが… 審査員席はほぼ壊滅している

ミクリもぶちギレかけている

ある程度予想はしていたがそれを遥かに超えられたのだ

「フハハハハハ!! どうだ!!」

ギャラドス達が着地しても見るものはいない

そこで気がついた

自重するべきだったと

「ワタルセ・ン・パ・イ!!」

ミクリが頭から血を流しつつ言った

「アンタは失格だあああああああ!!」

「なんだとおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!」

ワタル：審査員長ミクリを除き全員K Oの為失格
ヒカリの不戦勝が決まった

『さて…気を取り直して、本大会のスペシャルゲストを紹介します
！！シンオウチャンピオンシロナさんです！！』

実況の声に合わせシロナが軽やかに現れた

観客も盛り上がる『今回はゲスト解説者に加えなんと！ミクリ審査
員長とコラボしてパフォーマンスしていただきます！！』

シロナのトゲキッスが空を優雅に舞いミクリのミロカロスがそれに
合わせるようにアクアリングを複数発射する

その水の輪を華麗に抜けているトゲキッス

「きれい…」

ヒカリはため息を漏らした

「すっげえ…「チャ〜」チャンピオンってあんな事も出来るのかよ」
サトシは感心している

彼の夢ポケモンマスターに最も近い位置にいるチャンピオン達……

サトシの手にも力が入る

とは言えあの2人が例外なだけであり、ワタルのポケモンに出来る
のは海難救助

ダイキのポケモンは一部しかコンテストに向いていない
殆どのモンスターは発破解体の変わりしか出来ないだろう

「……シロナさんとお付きあい出来ないかなあ……」

何とか復活したタケシが呟いた時

ゾクツと背中にかが走った

「……何だ今の!？」

キョロキョロするタケシ

偶々移動中のダイキに聞こえてしまったのだ

ダイキからシロナを取ったらあつという間に胃痛に倒れるだろう
ある程度悟ったとは言え耐えきれない筈だ

いきなり独り言とは言え自分の恋人と付き合いたいなんて言われた

ので腹が立ってしまい一瞬思いつきり睨んだのだ

ダイキは気が済んだためそのまま歩き出した
するとワタルがいた

「やってしまった……」

ダイキは呆れたように言った

「まあ……しょうがないんじゃないか？ 普段より浮かれてたし」

ワタルは頭を掻き出した

「だよなあ……所でダイキ」

ワタルが真剣な顔になった

「なんだい？」

ダイキはだて眼鏡を拭きながら言った

「俺……結婚しようかと思うんだ」

ダイキは眼鏡を落とした

「は？……誰と？」

ワタルは照れながら言った

「いやあ……先月出会った女性なんだが……付き合ってくれって言った

ら式場予約までトントンと……」

なんだそりゃ？

「フハハハハハ！ お前より先に結婚してやるからな！」

ワタルは叫びながら行ってしまった

「結婚……か」

まだ早いよなあ

取り合えず考えておくだけ考えとくか

ワッタル!! (後書き)

ワタルは結局こんな運命…
奴は派手にやりすぎた…

久々の出番！！（前書き）

出来ました！

久々の出番！！

ダイキは久々にとあるポケモンをコンテストに出すことにした
コイツなら大丈夫だと判断したのだ

「頼むよ……」

ダイキは再び分厚いだて眼鏡に白衣の考古学者に化けて会場に向か
った

ハルカが繰り出したのはフシギバナとアゲハント

フシギバナのリーフストームに合わせてアゲハントが高速で移動する
すると鱗粉がキラキラと輝き美しさが際立っている

「よし！良い調子かも！！」

しかしハルカは油断はしない

ドクターDはどんなポケモンを持っているのか見当もつかないのだ
重量級か？軽量級か？

それにより二次審査は大きく変わってくる

ドクターDがボールを投げた

現れたのは……

「フレイィ？」

グレたバタフリーと

「エレエエエキ！！」

ギター片手のエレキブルだった

「バタフリー！！ちよのまい！エレキブルは演奏開始！」

コンテストには小道具の使用も認められている

電源が無いため殆ど使われないがエレキブルは電力を自給自足出き
るためエレキギターが使えるのだ！！

ハードロックな曲が流れバタフリーがロックンロールしながら舞い
上がる

審査員も苦笑いしシロナとミクリはダイキのポケモンならしょうが

ないと納得していた

相変わらず斜め上をいくダイキのポケモン達だ

「ブウウウウル!!!」

エレキギターで背面弾きをしたあと見事にソレを地面に叩き付けぶつこわしてフィニッシュした

「なんとというロックンロールだ…」

タケシが感心している

ルンパツパと一緒にある意味伝説のサンバを踊ったことがある彼もロックンロールなエレキブルに関心が出たようだ

『始まりました二次審査！勝つのはミクリカップ準優勝のハル力選手か！？はたまたダークホースとなるのかドクターD選手か！？いよいよスタートです!!!』

「アゲハント!!!ぎんいろのかぜ!!!フシギバナははっぱカッター!!!」

アゲハントの美しい羽から銀色の風が吹き荒れる

更にその風にはっぴカッターが加速する

「バタフリー！風に乗る高速旋回！エレキブルはじゅうでんしろ!!!」

「フリーイイイイイ!!!」

ワタルのプテラと分けただけありそのスピードは半端ではない

右下上上左左下上右とはっぴカッターを見事に全弾避けて見せた

『なんとバタフリー！素晴らしい速さで全弾避けました!!!』

実況が叫ぶ

『相当鍛えてるわねあのバタフリー、愛情を込めないとあそこまではいきませんよ』

シロナも言う通りバタフリーを実戦で使えるレベルにするにはかなりの腕が必要だ

いくらヤクザバタフリーとは言え持っている能力はダイキのポケモンの中でも下に位置する

しかし突き詰めたスピードは時として何者も凌駕する

ダイキはバタフリーを速さに特化させた

結果とんでもない速さを手に入れたのだ

……長距離飛行は出来ないが

「まだよ！フシギバナ…ソーラービーム！アゲハントはサイケこうせん！！」

紫と黄色の光線が螺旋を描き二匹に襲い掛かる

「バタフリーはサイケこうせん！エレキブルはでんじほう！！」

充電により膨れ上がった巨大な電力と紫の光線が1つになる

その2つの塊が中央で激突した

辺りに爆風が吹き荒れた

風が止み底に立っていたのは…バタフリーとエレキブルだった

「いや…ヒヤヒヤしたよ」

ドクターDことダイキが呟いた

『ホントに勝った無名の新星！！ドクターD！！準決勝進出決定！！』

「……良かった…怪我はしてない」

実況を聞き流しハルカは倒れた二匹の近くに走り寄っていた

二匹は戦えないが意識ははっきりしておりやや申し訳なさそうだ

ハルカは首を振って慰めている

ダイキはハルカに歩み寄って

「ありがとう、楽しかったよ…これを上げよう、使ってあげてくれ」

かいふくのくすりを手渡しながら言った

「あ！ありがとうございます！！えっと…準決勝頑張ってください！！」

ハルカとダイキはガツチリ握手を交わした
その様子に会場から拍手が沸き起こった

さてサトシ達がいる会場はAとDブロックの試合があり隣の会場は
BとCブロックの試合があった

その中で1人の少年が大騒ぎを起こしていた

「そんな…フライゴン!!」

ハルカと並ぶトップレベルのコーディネーター、シユウが破れたのだ
「良い勝負だったね」

破った少年の手持ちに会場がざわめく

『圧倒的です…これがシンオウ大会勝者の力なのか!? Bブロック
準決勝進出決定したのはタクト選手!』

売り子をやっていたロケット団も啞然とした

「あの子ここにまで来たの!？」

コジロウが叫ぶ

「ダークライにクレセリアってどんな奴が勝てるのよ…」
ムサシも呟いた

「とにかく明日のAとBの準決勝は絶対見るニヤ!!」
ニヤースの声に2人は頷いた

久々の出番！！（後書き）

さて！ダイキが全力を出せそうな人を探したらコイツとサトシしか居なかったと言う事実…

前々から考えていたのですよ

伝説VSぶっ飛び

多分この試合でダイキ君の正体バレます

久々の全力ドサイドンとストツパーフォレットスに期待してください

合体技も募集中！！

話しのリクエストも受け付けてます

現在はイブキの話です

あと三つくらい募集します

奮ってご希望ください

伝説を振り伏せる！！（前書き）

出来ました！

返信は後日！！

伝説を擦じ伏せる！！

「は？」

私は思わず目を疑った

次の相手…確かシンオウのジムをダークライ一匹で乗り越えた奴だよな？

「何でこんな奴が出てるんだか…」

だが負ける気はしない

何を繰り出してくるかは知らないが…擦じ伏せるだけだしね

私はゆっくり立ち上がり会場へ向かった

「嘘だろ！？タクトが出てるのか！！」

俺は叫んだ

「そうみたいだな…伝説の力で勝ち残ったんだろ？」

タケシが呟いた

「チャッ」

ピカチュウも鳴いている

「コンテストも勝ちに来たの！？」

ヒカリが叫んだ

多分ドクターDが強くてもタクトには勝てない可能性が高いし…もしヒカリが決勝に行ったらポッチャマ達が大変な事になる

「取り合えず…頑張ってくれよドクターD！！」

俺が負けた相手だけど…頑張っしてほしい

「ニヤース！！ナイスな席よ！」

今回はお金が無く衣装が用意できなかったので出れなかったムサシが言った

「当然だニヤース！」

ニヤースは胸を張る

「しっかし…何で伝説を持ってんだろ…まあ伝説持ってたら殆どのバトルに勝てるよな」

コジロウがぼやいた

伝説のポケモンは美しく、かつこよく、何より強くソイツしか使えない技も持っているのだ

「でも…ニヤーンかドクターDの方を見たことがあるんだニヤ…」

ニヤースは首を捻った

確か新聞だったはず…

「…確かに…どっかで見たような…」

…正解は彼等がたまたま買ったリングの包装紙に使われていただけである

「出てこい！！ダークライ！！ラティアス！！」

会場がどよめく

ラティアスのりゅうせいぐんをダークライがシャドーボールやあくうせつだんで撃破していく

会場は一気にタクトに魅せられた

「ドサイドン！！フォレトス！！」

ドクターDがドサイドンとフォレトスを繰り出した

フォレトスがこうそくスピンドで弾いた石をガンマンの様にロックブラストで撃ち抜き…最後に弾き出された巨大岩石をがんせきほうで

コナゴナに砕いた

しかしタクトの印象が強すぎて会場は余り盛り上がらなかった

『さあ始まりました！二次審査！勝つのは伝説の担い手タクト選手か！？はたまたダークホースのドクターD選手か！？……勝敗が見えてるような気もしますが…スタートです！！』

実況の掛け声に合わせるかのようにタクトは叫んだ

「直ぐに終わるよ！あくうせつだん！！」

時空すら裂くと言われるあくうせつだん

それは真つ直ぐにドサイドンに進み直撃した

「サアアアアアアア！！！！！」

がピンピンしている

「は……………何だつて？」

タクトは驚いている

『これは…ドサイドン効いてません！どれだけタフなのか！？』

実況の声が響く中ドクターDが口を開く

「……………確かに伝説は凄い……だけど本当に強いのは自らずっと鍛え上げて信じてきたポケモンだ……そうだろシロナ」

会場がざわざわと騒ぎだした

シロナを呼び捨てにする奴は殆どいないのだ

「そう……信頼の力と培った年月は伝説すら凌駕します……貴方なら誰よりも理解してるでしょう？」

親しみ……と言うか恋する乙女の目線のシロナ

「まあな……さて本領発揮と行きますか！！！」

白衣の中のスーツを崩し頭にソフト帽を被って眼鏡をしまう

猫背ぎみにしていた背をピンツと伸ばし腕に時計をはめる

『あ……………ああああああ！！な……なななななんと！！ドクターD選手の正体は……』

実況が叫ぶ中、ちよつと気障っぽいかなと思いつつ白衣を投げ捨てて言った

「さて！ドクターD改めトレーナーとして、チャンピオンダイキが相手になるうー！！」

会場が一気に盛り上がった！！

瞬間ドサイドン達も雰囲気が変わった

戦いの雰囲気だ

「あれが……ジヨウトチャンピオン！！！」

サトシが叫んだ

「すっごーい！！！」

「フォレトス！！だいはくはつだ！！」

「フオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」
カツと光り大爆発が発生した

「フオオ……………」

フラフラになりながら落ちてきたフォレトスをドサイドンが受け止め地面に置き

「ダアアアア！！」

「ラアアアア！！」

とまだギリギリ戦える二匹を振り向き様に纏めてメガホーンですっ飛ばした

「……………嘘だろう？」

圧倒的だった

「伝説のポケモンは確かに強い、だが…それだけでチャンピオンに勝つのは無理だな…また挑戦してこいよ」

タクトは頷いてボールにポケモンを戻し去っていった。あ…圧倒的です！！これがチャンピオンの強さなのか！？コンテスト大会！決勝進出！！」

チャンピオンダイキ…見事に伝説を挨拶伏せた

ちなみにジヨウトリーグのホームページにシロナファンの男達の恨みの書き込みが急増したそうだ

オマケ

「ねえ…コジロウ」

ムサシが話す

「なにムサシ？」

顔をひきつらせながらムサシは言った

「賞品盗むの…無理じゃない？」

「無理だね…」

オマケ2

ワタルはいつもの衣装に着替えてゆつくり会場にきて集まっていたダイキ達チャンピオン3人に話し掛けた

「なあ…お前達こんな提案が2つあるんだが…」

その提案を聞いた3人は頷いた

「素晴らしいですね先輩!!」

「貴方にしてはまともな案じゃない？」

「じゃあ…審査員に言いに行くか!!」

実況はダイキ達の意見を聞き驚きながらも喜んで放送した

『会場の皆様に2つお知らせします!!決勝戦が終了した後!!なんとシロナ、ダイキ組vsミクリ、ワタル組のダブルバトルを開催します!!』

会場のテンションが一気に上昇した

『更に…今から抽選ですが!!大会終了時にチャンピオンと6ON6が出来ます!!今すぐ申し込みを!!』

サトシは聞いた途端に走り出した

チャンピオンに挑めるなんて滅多にないからだ

タクトも申し込みをしに行きこっそり来ていたダイゴやシンジも申し込みに来た

結果

シンジvsワタル

ダイゴvsミクリ

タクト vs シロナ

サトシ vs ダイキ

と決定した!!

サトシはとても喜んでいたらようだ

さてコンテスト大会はいよいよファイナーレを迎える!!

伝説を振り伏せる！！（後書き）

さあドンドンカオスに…

6ON6に期待してください

多分ゴルーグが目立つと思います

フィナーレ!! (前書き)

出来ました!

今回はダブルですが、後書きのアンケートに協力していただければ幸いです

ファイナーレ！！

「やっばい…コンテストだけどサトシより先に戦うことになったやつた…」

ヒカリは少しビビりながらも目は輝きを失っていない

「行くわよポツチャマ、マンムー！！」

「チャーマ！！」

「ムウウウウウ！！」

ヒカリの合体技は綺麗だった

ポツチャマのみずあそびで飛び散る水をマンムーのふぶきで瞬時に凍らせ、その複雑なオブジェをポツチャマがマンムーにまたがり口デオを披露した

ポツチャマの可愛さが際立つ演技だった

ただマンムーを出したとき向こうのダイキはは意外そうな顔をしていた

(何故だろう)

と思いながらヒカリは下がった

ダイキは苦笑いしながら繰り出した

「オノノクス、マンムー！！出番だ！！」

現れたのは珍しいドラゴンポケモンとマンムー

だが…大きさが倍近いのだ

「マ…マア？」

ヒカリのマンムーが思わず後ずさったデカさ！！

「でつかあああああ！！」

サトシが思わず叫ぶほどのデカさだ！！

「オノ…」

オノノクスがジロツとポツチャマを見る

「マアアン？」

マンムーもギロツとポツチャマを見る

「ポ……ポポポポツチャ……」

コワモテに睨まれじりじり下がる涙目ポツチャマ

マンムーはおもむろに振り向きれいとうビームで氷の大塊を作りオノクスが片っ端から斬りまくり、最後にマンムーが角で突き続けて……カツコいいと言うか美化されたポツチャマの氷像が現れた

「ポ……ポチャアアアアアア……！！！！」

大興奮するポツチャマ

それを見てオノクスとマンムーがニツコリと笑った

ダイキの手持ちの中で一二を争うコワモテだがこの二匹は誰よりも優しくて人懐っこいポケモンだ

「アハハハ……ポツチャマ喜んでるよ」

しかし……途中でズーンとポツチャマが落ち込んだ

氷だからいずれ溶けるのだ

「オノオーノクス！」

「マンムーウウウウ！」

「ポツチャ？ポツチャー……」

また喜んでいるポツチャマ

「え……つとニヤにニヤに……ドラゴンが大丈夫だよ！、マンムーが今度は石で作ってあげるから元気出せ、ポツチャマがホント？ヤツター……って言うてるニヤ！顔に似合わない優しい奴等だニヤ」

ニヤースは片隅で頷いていた

『始まりました！決勝戦！！勝つのはヒカリ選手か？はたまたダイキ選手か？いよいよスタート！』

「マンムー！！ジャンプからふみつけて押し潰せ！！」
マンムーが高らかに舞い上がり落下した

「ポツチャマ！回転して反撃のたいあたり！」

ポツチャマがクルツと回転して避け体当たりする
だがダメージにならない！！

固すぎる上にタフすぎるのだ！！

「うっそ…真横からいったのに」

ヒカリも思わず呆然とした

体重が軽くても重いポケモンを吹っ飛ばす事はよくある

バランスを突けば引っくり返る

ポツチャマはソコを突いたがマンムーが強すぎるのだ

「オノノクス…アッパー式でドラゴンクロー！！」

地面に一気に真つ二つに深い亀裂が出来た

クローの衝撃波がヒカリのマンムーに襲いかかったがちょうどマン

ムーが何かを飲み込んだ

瞬間凄まじい速さで避けた！

『お見事ヒカリ選手！マンムーが一時的に強化されたぞ！！引っくり返るかこの試合！？』

その時ダイキがニツと笑った

チャンピオンになってからもう10年になる

ポケモン達に胃を痛め、髪の毛と引き換えに一緒に強くなって…けどこんな事、技を飲み込ましての強化なんてのは考えもしなかった
！！

…だからこそ勝負は楽しいしやめられないんだよな！！

「いや、驚いた！！私にはとても思い付かない発想だ！…見よう
見まねだ！マンムー！れいとうビームを飲み込め！！」

マンムーはれいとうビームを撃つ寸前に飲み込んだ

結果…

「ムウオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

大成功だ！！

「げっ！流石チャンピオン…あつという間に真似しちゃったよ…」
ヒカリも驚きながらも笑っている

誰よりも勝負を楽しめる人は他の人も熱くさせる

チャンピオンは皆例外ないしサトシも同じだ

「マンムー！じしん、最後に！オノノクスはげきりん！！」

マンムーが激しく地面を揺らしポツチャマ達をフラフラにし…オノノクスのげきりんが二匹をまとめて撃破した

「あゝあ…でも記念になったかな？」

ヒカリはやや悔しそうにでも楽しそうにダイキと握手した

「ありがとう！君のお陰でまた1つ戦法が増えたよ」

目を回しているポツチャマに薬を塗りながらダイキは笑った

『優勝したのは！！チャンピオンダイキ！やっぱりチャンピオン強かった！！』

こうしてコンテストは幕を閉じチャンピオン同士のダブルバトルが開かれる！！

ちなみに一次審査だけならダイキに勝ってる人も居たが二次審査で全部ひっくり返すと言う荒業で圧勝していた事は審査員しか知らない…

ファイナーレ！！（後書き）

はい、ダブルバトルの手持ちですが各一匹ずつのバトルになります
そのポケモンですが：通常と伝説どちらがいいでしょうか？

伝説の場合ダイキはギラティナ、ワタルはレックウザで固定になります

シロナ、ミクリは皆さんに書いて貰ったポケモンになります

因みにヒードランはダイゴさんがちゃっかり捕獲しているので無し
です

まあダイゴの話もいずれ書きます

皆さんの協力でダブルバトルが変わります

そしてサトシ君のメンバーも考えていただければありがたいです
皆甲乙付けがたいので

ただしサトシ君のメンバーは条件として

1 ピカチュウは必ず

2 ゴウカザルまたはリザードンが入っていることです
では皆さんの意見をお待ちしております

THE・シヨータム(前書き)

出来ました

感想はまだ待ってください!

なおアンケートですがメッセージ送信を含め通常になりました!

伝説はまたイフとしてやります

THE・シヨータム

さてミクリに言われて今私は着替えている

別にそこまでしなくても良いと思っただけどな衣装さんから渡されたのはいつも通りの黒いロングコート…だが色々バージョンアップ品なのか布地が見違える程綺麗なタイプだ

流石はミクリ…手は抜かないな

後は来ていた茶色のスーツを黒いスーツに変えて前を開けて着崩して最後に帽子とコートを羽織って出来上がり
何時もよりちょっとだけ高級品になっている

さあ…行くか

『遂に始まる世紀の一戦！リーグチャンピオン同士のタッグダブルバトル！勝つのはこのワタル、ミクリ組か？はたまたダイキ、シロナ組か！』

水上のアーティストでありコンテストマスターのミクリ

大空を支配しありとあらゆる龍を操り相手を絶望させるワタル

大地を砕き圧倒的な力で相手を押し伏せるダイキ

流されず自らのスタイルを貫き舞うような優雅ささえ感じられるシ

ロナ

こいつらが激突するなんて滅多に無いのだ

それがいま！激突する！！

「行け！ミロカロス！！」

「潰せ！ギャラドス！！」

「舞え！ロズレイド！！」

「壊せ！カイリキー！！」

チャンピオンが鍛え上げた四ひきが姿を現した

「カイリキー！！ストーンエッジ！！」

石の刃がギャラドスに襲いかかる

「させませんよ…ミロカロス、ハイドロポンプで押し流せ！！」

がミロカロスのハイドロポンプがストーンエッジを押し流した

「隙だらけよ…ロズレイドしびれごな！！」

ギャラドスに向かってしびれごなをまくロズレイド

「ギャラドス！とびはねるでかわせ！！」

間一髪のタイミングで飛び上がるギャラドス

「私のカイリキーの前で飛ぶとは良い度胸だな！ばくれつパン」な
みのりだ！「カイリキー！！」

いざばくれつパンチをしようとした瞬間ナイスなタイミングでミロ
カロスのなみのりがヒットした

「リイイイイイ…」

揉んどり打ったカイリキー

「ハツハハハハ！！ギャラドス、カイリキーに襲いか「リーフスト
ーム！！」こつちもか！？」

飛び跳ねたギャラドスを見事にロズレイドは打ち緒とした

「ロオオオオオオ！！」

ミロカロスのれいとうビームがロズレイドに迫る

「カイリキー！！」

がカイリキーがその筋肉をビキビキにして強くし止めた

「ちっ！流石は貴方の手持ちの中でも古株なだけありますね…」

ミクリが愚痴った

「食らえ！！たきのぼり！！」

ギャラドスが雄叫びを上げ突貫する！！

「ギャアアアアア！！！！」

それをカイリキーは真正面から受け止め

『うおおおおおうお！！カイリキーがギャラドスを投げ飛ばしたあ
あああ！！！！』

そのまま天高く投げ上げた

「シロナ！時間を稼げ！！」カイリキーが集中を始めた

「ミロカロス！！ハイドロポン！まかせなさい！しびれごな！！」
つくそう！！」

シロナは絶妙なタイミングでミロカロスの動きを止めた「くう…流石は息があつてますね…憎たらしいほどエレガント！」

ミロカロスの動きが止まった間に落ちてきたギャラドスに
「リッツッキイイイイイイ！！！！！！！！！！」

きあいパンチのアップーが炸裂しギャラドスをノックアウトした
「ギャラドスウウウウウウ！！」

ワタルが絶叫した

「今でしょう！ハイドロポンプ！！」

無防備なカイリキーにハイドロポンプが直撃し撃沈させた

「よしっ！たおし！エナジーボール！」しまったアアアア！！

油断したミロカロスを後ろからエナジーボールが直撃して倒した
「後ろがから空きよ？……まあ私とダイキのコンビに勝つなんて無理だけどね」

シロナはニコニコ笑顔で言った

「ハイハイ…ごちそうさまです」

ミクリは苦笑い

「フツ…俺には嫁がいるからな」

ワタルはそっぽを向いた

「私達…段々バカツプルになってないか…特にシロナが加速度的に…」

ダイキが何を今さらな事を言っている

『見事！流石と言うしかないハイレベルな戦い！次は個人戦！トツ
プバッターはサトシ選手vsダイキ選手です！！』

サトシは立ち上がり闘志を燃やした

サトシが遂に伝説の破壊神に挑む！

THE・シヨータム(後書き)

さてサトシの手持ちですが…恐らく
ピカチュウ

ゴウカザル

カビゴン

ジュカイン

ドンファン

キングラーかブイゼルかオオスバメのどれかになりそうです

因みにダイキの手持ちは

ドサイドン

カイリキー

オノノクス

カビゴン

ゴルーグ

ギャロップかハガネールになる予定です
期待しててください

所で話は変わりますが…皆さんのポケモンの曲でお気に入りはないですか？

ただの興味ですがよろしければ書いてください
因みに私は r e a d y g o と風と一緒にです

そびえ立つは不敗の破壊神（前書き）

出来ました！

そびえ立つは不敗の破壊神

「来たぜピカチュウ…」

サトシが呟く

「ピツカ…!」

ピカチュウが答える

相手はジョウトリーグ最強のトレーナー

「さて…準備は良いかい？」

ダイキも内心ワクワクしている

サトシはリーグでも有名であり奇跡を起こす凄腕のチャレンジャーとして知られている

どんな力を見せてくれるのか…楽しみだ

「行くぜ…カビゴン！君に決めた！」

「出番だ！カビゴン！つてなにい!?!」

双方カビゴンと言う珍しい事態になった

「なっカビゴン!?!」

そうこうしている間にダイキのカビゴンはゆっくりと四股を踏んだズウン!!ズウン!!と音が響く

「カビゴン…来るぞ!!」

サトシのカビゴンも体を構えガツチリと待ち受ける

「カビ…」

ジツクリと立ち会いの姿勢を取って

「カビイイイイイイ!!」

ぶちかました

「カツ!?!」

サトシのカビゴンが浮かんで飛んだ

「な…なんてパワーだ!!」

タケシが思わず叫んだ

「頑張れカビゴン！メガトンパンチだ！！」

グツと堪えたカビゴンの強烈なパンチがダイキのカビゴンに直撃した

「カビツ…カアアアアアア！！」

直撃し痛がつたがそのままグワツと睨み付けカビゴンを持ち上げた

「カビ！？「ガアアアアアア！！」カアアアアア！？」

そのまま上空へぶん投げた！！

「うそ…信じられない！！」

ハルカが叫んだ

ヒュルルルルルと落下しドゴーン！！と墜落しクレーターが出
来た

「カビゴーン！！」

サトシのカビゴンは目を回している

「これが…破壊神の全力か」

見ていたシンジがポツリと呟いた

「さて…いけっカイリキー！」

「頼むぞゴウカザル！！」

共に格闘タイプだ

「ゴウカザル！！ほのおのパンチ！」

ゴウカザルのパンチがカイリキーの頬に突き刺さった

「リイキ…」

カイリキーは痛がりながらもニヤリと笑った

「サトシ君…カイリキーの特性を知ってるかい？」

サトシはいきなり言われて戸惑ったがすぐに言った

「えっと…たしかこんじょうだと…」

ダイキは笑っていった

「その通り！ただし半分だ、カイリキーには1つ珍しい特性がある」

カイリキーがジリツと動いた

ゴウカザルは素早いフットワークで翻弄している

「それはノーガード！双方の技が例え空を飛ばうが地面に居ようが
あたる…つまりどんな技も必中になる！！」

カイリキーが地面をブツ叩いて発生したのはストーンエッジ！！

「ザアアアア！！」

全弾が直撃した

「…タフだね、よく鍛えてる」

ギリギリゴウカザルは堪えた

その時だ

ゴウカザルが燃え出した

「そうか…ゴウカザルはもう……か？」

立ち上る炎が尋常じゃない！！

「…噂には聞いてたがここまでとは…」

ワタルはたまたま知っていたがここまでとは知らなかった

「こりやもうかじゃなくてごうかってレベルだぞ！？」

ダイキも驚いている

明らかに通常の2〜3倍は強化されている

「いっけえ！！フレアドライブ！！」

とんでもないほのおを纏ったフレアドライブがカイリキーに直撃した

「リアアアアア！！」

そのまま思いつきり叫んだカイリキーが撃沈した

「な…なんてバカげた火力を持つてるんだ…だがそうでなくちゃ面

白くない！」

ダイキは直ぐ様気絶したカイリキーをボールに戻し直ぐ様次をだした

「さて…次はコイツだ！！倒せるか！？」

ダイキが出したポケモン

それは

「ゴルウウウウウグ！！」

「な…何だあのポケモン！？」

サトシも驚いた

「コイツはイツシユのポケモンだ！…さあ楽しもう！…」
ダイキは笑いながら言った
勝っても負けてもきつと楽しめる…ダイキは確信した
戦いはより激しさを増す！！

オマケ

「ダイキの笑顔…いいわね」

「さつさと拭いてくださいよ…鼻血がダラダラ出てますよ…全く」

「ごめんなさいね…でめ素敵だしね…ああ」

「ダメですねこれは…ダメナならぬデレナになってしまったては…せめて自分の試合の時には復活して欲しいですが…」

チャンピオン達で一番口が浅いミクリ

ダイキにデレナになってしまったシロナを見ながら次にある彼女の試合を思っ溜め息をついた

チャンピオンはみなどこか抜けている…それを痛感したミクリだった

そびえ立つは不敗の破壊神（後書き）

ゴウカザル大金星です

さて次は不可思議ゴルグとキングオブバカのハガネールの出番になると思います

なおマイページの活動報告に番外を載せました

よろしければそちらもお願いします

ダイキがピンクの髪の貴族の少女に召喚された話です

なお前回の曲の質問も答えてくださるとありがたいです

今度歌をモチーフにした話を書きたいので

チャンピオンの底力(前書き)

出来ました！
次回決着！！

チャンピオンの底力

「戻れ、ゴウカザル！」

相手が悪い気がする

ゴルージュ……見た感じ重量級だよな

「ジユカイン！！君に決めた！！」

「ジユウ……」

ダイキの顔がほんの少し歪んだ

（初見でコイツを地面と見破るとは……流石だなサトシ君、だがコイツは面白いぞ？）

ホントはスピードで翻弄しようとしたただけだが

「ゴルージュ！シャドーパンチ！！」

「ゴオオオオオオオ！！」

ゴルージュの繰り出す重い拳がジユカインにヒットした

「ジユプウウウウ！！」

ジユカインが飛んでいく

「タケシ！サトシのジユカインが！」

ヒカリが叫んだ

「分かってる！……チャンピオンってここまで強いのか……」

タケシがぼやいた時ハルカが言った

「ねえタケシ！あの人の専門ってなに！？」

専門……つまりエキスパートタイプだ

ポケモンにも当然属性があり大抵ジムリーダーやチャンピオンは一種類のタイプで統一している事が多い

つまり弱点をつけば勝ちやすいのだ

「……ダイキさんはエキスパートタイプが無いんだよ」

が稀にエキスパートタイプが無いジムリーダーやチャンピオンがいる
ダイキやシロナがそれにあたる

「俺は手持ちを見たことが有る訳じゃないからはっきりとは言えないけど…シロナさんは完全なテクニカルオールラウンド、ダイキさんは見ればわかるように重戦車型だ、いわゆるテーマで統一している人なんだ」

まあ言うならばじめんタイプとかくとうタイプに弱いものが多いが
体力、防御がずば抜けているため余裕で耐えて、サブウェポンやメ
インウェポンで撃破するのだ

「ジユカイン！リーフブレード！！」

ジユカインがゴルグを斬ったときかなり痛がった

「けっこう食らったな…」

ダイキがポツリと呟いた

「ゴルグはじめんタイプか！！ジユカイン！タネマシ」そらをと
ぶ！！」は！？」

会場の殆どが度肝を抜かれた

「じめんタイプが…飛んでるだど？」

シンジも呆然と呟いた

「……アレが飛ぶとは誰も思わんよな…」

ワタルが呟いた

ヒーローに憧れるゴルグは空中で三回転ひねりをしながら…いわ
ゆるライダーキックで急速降下して

「ゴオオオオオオオルグ！！」

ジユカインを蹴っ飛ばしノックアウトした

「……じめんタイプが飛ぶなんて…」

サトシは改めてポケモンが奥深いと思つた

「ハガネール！吹き飛ばすぞ！！」

「ドンファン！！君に決めた！！」

フィールドに鋼の要塞と戦車が現れたが…

ドンファンを一撃で吹き飛ばした

「ドンファアアアアアアン！！」

サトシが叫ぶ

「さて…まだ終わらないだろうサトシ君！！」

ダイキの声にサトシが答えた

「……当然！まだ俺は諦めないぜ！！」

2人のバトルはクライマックスを迎えようとしている！！

チャンピオンの底力（後書き）

次回！最終決着！！

オノノクス対キングラー

そして…

ドサイドン対ピカチュウ！！

そう言えばですが…

見るとしたらドチラが良いですか？

？ポケモンリーグ大忘年会

？ポケモン大騒動（空からポケモンが降ってきて…）

決着（前書き）

出来ました！

返事は明日返信します！！

決着

「キンググラー！！君に決めた！！」

「切り裂けオノノクス！！」

現れたのは鋭き巨大なハサミのキンググラー

鋭き爪と牙を持つオノノクス

「キンググラー！！クラブハンマー！！」

サトシの声に合わせ殴りかかるキンググラー

「オノノクス、りゆうのまい！！」

オノノクスは神秘的な踊りを始めた

その隙にオノノクスの顔を殴り抜いた

「ノツ！！オノノオオオオ！！」

痛がったオノノクスだが目にギラリと闘志が宿った

「オノノクス…ドラゴンクロー！！」

鋭い爪の一撃がキンググラーのハサミに直撃して吹き飛ばした

「キンググラー！！」

サトシが叫んだ間にオノノクスが縦に大回転しはじめた

ドラゴンタイプ最強の物理技…げきりん！！

「グラーアアア！！」

キンググラーがゴロゴロ転がっていった

「もう一度！ゴウカザル…君に決めた！！」

「最後だ…ドサイドン！！」

ドサイドンともうか状態のゴウカザルだ

「ゴウカザル、あなをほる！！」

ゴウカザルが凄まじい速さで地面に潜っていった

「何をするつもりだ…ドサイドン！！じし「フレアドライブ！」何だとお！？」

ダイキも度肝を抜かれた

フィールドが火の海になったのだ!!

「ザルアアア!!」

ズボツと地面から這い出てきたゴウカザル

「私もまだ若いつもりだけど…コレは流石に思い付かないな」

ダイキも感心している

「ゴウカザル!!インファイト!!」

無数の拳がドサイドンを殴り付ける

がドサイドンはビクともしない!

「……嘘でしょ?効いてないなんて!？」

ヒカリが叫ぶ

「いわとじめんタイプのはずだから…かくとうはこうかばつぐんの

筈なのに!!」

ハルカも言った

だがシンジだけは気が付いた

「そうか…ハードロックか」

ハードロック…ポケモンの中でも極めて強力な特性の一つ

こうかばつぐんの技を弱めてしまうのだ

こうかばつぐんは致命傷になりやすいがコレがあるドサイドンやバ

クーダは異様にタフなことが知られており戦術に広がりがあるので

「サアアアイドン!!」

ズガアアアアんと音がするほどゴウカザルをアームハンマーで叩き

付けた

「ザルウウウ…」

もともと弱っていたゴウカザルは一撃でダウンした

火の海になっているフィールドで多少なりとも火傷によるダメージ

を受けているがソレを感じさせないパワーである

「コイツが私の切り札だ、私の手持ちの中の最強…コイツを越えれ

るかサトシ君？」

サトシ君が頷いた

「越えてやるさ！！ピカチュウ…君に決めた！！」

「ピカア！！」

黄色の人気者ピカチュウが燃え盛るフィールドに現れた

「ドンドンドンドン！！」

足を激しく踏み鳴らしドサイドンがじしんを繰り返す

「かわせっ！！ピカチュウ！！」

ピカチュウは軽やかに飛び上がり避けた

「ドオオオオオオオ！！！！」

地鳴りを起こしながら角にエネルギーを貯めメガホーン状態ではく進するドサイドン

「ピカチュウ！！アイアンテールでカウンターシールド！！」

カウンターシールド？

私は頭に疑問符が浮かんだ

何だ？それは技なのかい？

聞いたことがないな

「チャヤヤヤア！！！！」

ピカチュウがメガホーンを回転して受け流して…

「ドガガカアアアア！！」

ドサイドンの顔面にアイアンテールが直撃した！！

攻防一体というやつか…

「よしっ！！アイアンテールがモロに入った！！」

タケシ達が喜ぶ

普通ならそうだろう

燃え盛るフィールドによる火傷にゴウカザルのインファイトにピカ

チュウの鮮やかなカウンターのアイアンテール

撃沈は間違いない

そう……普通なら

ダイキは手を差し出した
サトシはガツチリと握手した
会場から割れんばかりの拍手が起こった
2人のバトルは皆の記憶に残っただろう…

「やっぱり…素敵ね」

ミクリは呆れを通り越して引いていた

「いや！恍惚の表情で鼻血を出さないで下さい！」

シロナはダイキの雄姿を見すぎて鼻血が出ていた

「いいじゃない…それだけ私の恋人が素晴らしい証じゃない!!」
シロナは反論する

「もう…どうにもならないか…ミロカロス！さいみんじゅつ」

さいみんじゅつにより寝てしまったシロナをミロカロスに乗せて奥へ運ぶミクリ

「……事務局長に怒られるのはゴメンだ」

ダイキがポケモンに苦労するならミクリはチャンピオンの同僚に苦労しそつである

番外 大忘年会その1（前書き）

チャンピオン戦が難航中ですので忘年会編を投稿します
多分3〜4話で終わります

番外 大忘年会その1

「ん？これは…ああ！今年は私が幹事か！」

ポケモンリーグ年に一度の大忘年会

イッシュは独立してやっていたのだけど、今回は始めて一緒にやるのだ

で…持ち回りで今回は私が幹事になったのだ

ジヨウトと言えばエンジユに代表される和が有名だ

さて…幹事として頑張りますか

まずは皆にアンケートを取らないと…

マズイ…みな見事にバラバラだ！！

例えばフウロさんは

『眺めがいい所！だんがいのどくつあたり！！』

だけどカツラさんは

『エンジユの紅葉がみたいなあ！！』

でギーマさんは

『フフ…コガネでゲーム大会はどうだい？』

バラバラすぎるわああああああ！！

ん…おやこれはアデクさんか

『まいこさんに会ってみたいのう！！イッシュには無い文化だからな』

よし…まいこさんは確定と

会場は…ええい！！しょうがない！！

電話かけて…と

『もしもし…マツバですけど』

エンジユのジムリーダーマツバは直ぐに出た

『マツバか？私だ、ダイキだよ』

『珍しいですねダイキさんが掛けてくるなんて？何があったんですか？』

『スズネのこみちを解放してくれないか？』

向こうの沈黙が痛い

『……理由をお願いします』

マツバが問い掛けてくる

『……忘年会だ……』

向こうからため息が聞こえた

『……お疲れ様です、毎年幹事の方は苦勞されてる見たいですね…
分かりました解放します、ただし文化財なので気を付けてください
よ！…』

助かったあ！！

『感謝するよ！ありがとう！』

よし！会場確保！

さて…次は料理か…

料理がうまいのもエンジユだな

「お〜い！カナナさん！！」

近くで書類とにらめっこしているカナナさんを読んだ

「はい、どうしましたチャンピオン」

カナナさんは直ぐに反応してくれた

「悪いんだけどエンジユの料亭と歌舞練場に電話して「忘年会の料理と出し物ですか！？分かりました！」…頼みます！」

直ぐに理解してくれてありがたいや

さて…次はお土産だな

今時の土産物は…あいつに聞こうか

『もしもし…アカネやで』

そう流行に詳しいであろうコガネのジムリーダーアカネである

『もしもし？ダイキだけど久しぶりだね』

『おお〜我らが大将やんけ！どないしたん？』

何故か大将と呼ばれるんだよね

『おう、忘年会なんだがはよりの土産物を教えてくれないか？』

アカネは暫く悩んでから言った

『……………いかりまんじゅうかなあ？』

……………いかりまんじゅうね

『それは……………昔からだよね？』

『だってジヨウトに名物ないやん……………言うな……………言わないでくれ……………』
ほなな』

何だか悲しくなってきたな

さて……………準備しなけりやな

大忘年会当日

「さあ！今日は楽しむぞ！！」

ワタルが言う

「まいこさんに会えるのか……………楽しみだ」

アデクが呟く

「ほう……………この紅葉は見事ですね、まさしくエレガント……………」
ミクリも言った

普段は見る事が出来ないので皆好評のようだ

ダイキが必死こいて準備をした甲斐はある

皆が着々と敷かれたゴザに座って酒、ジュースを準備する

そして…

「はい！皆さんコップ持つてください！」

ダイキが音頭をとる

「え〜っと今年はいッシユの皆さんも加えまして盛大になりました

！、では今年の苦労を労いまして…乾杯！！」

『かんぱああああああい！！』

皆笑いながら飲み始めた

「なんでお前フサフサなんじゃ？」

カツラがヤナギに言う

「知らんなあ…乾布摩擦か？」

ヤナギが頭を捻りながら言う

「ハツハツハツ！！笑えばいいんじゃないよ！」

テッセンがバンバン2人を叩く

「ちよつと！飲みすぎでじゃないイブキ！！」

シロナがイブキをたしなめたが…

「ヒック！…リア充はだあえつてなしゃいよ！！ヒック！ワタル
にいしゃまのびけやるおおおおお！！！！！！」

悪酔いしているイブキ

「俺の歌を聴けエエエエエエエエエエ！！！！！！」

「ちよつ！デンジが壊れた！！」

…もう既にカオスである

大忘年会はまだまだ序盤！！

これからどうなる！？

番外編 カオスは続くよ何処までも！(前書き)

ありがとうございます

番外編 カオスは続くよ何処までも！

「アカネ歌いまーす！！」

宴会は続き皆好き勝手にやり始めた

デンジが歌い始めた後皆全員一曲歌う羽目になってしまった

因みに曲の合間には…

「この時を待っていた…勝負だレンブ！！」

シバが上半身を裸にして筋肉に力を入れる

「ふっ…これだから面白い！」

レンブも構えギラツと目をたぎらせる

「よし！！ワシが審判をやるぞ！！」

シジマが笑いながら言う

「おおおお！！楽しみだぜスモモ！！」

トウキは盛り上がり

「はい！見逃しません！」

スモモも頷く

「オラアアアアアアアアアアア！！！！！！」

2人の拳と蹴りが交差し汗が飛び散った

「紅葉が綺麗ですわね…」

魚を食べつつエリカが呟いた

「そうですね〜上手いですよ！ジョウトに来てよかったな…」

デントが相づちを打った

イツシュヤカントー、ハウエンにシンオウは文化の発展のせいで自然を置き去りにしている

しかしジョウトはそれらに流されず独自の文化を作ってきたのだ
「ホント…きて「ウーハー！！」「うるさい！」

「確かにちよつ「おおおおお！！」静かにしなさい！！」
デントとエリカが暴れまくる2人に突っ込んだ

「ハツハツハツ！！俺も混ぜろ！！」

マキシがそんな常識人2人を尻目に乱入していった

「上等だ！！」

空手のシバ、キックボクシングのレンブ、プロレスのマキシと言う
暑苦しい三つ巴の戦いが巻き起こった

「ヒック…世界が回るの〜」

アイリスがふらふらしている

「ちよつ！誰だ！この子に酒を飲ましたの？」

アロエが叫ぶ

「ワシだけど？」

カツラが事も無げに言った

「貴様ああああ…私の孫によくもおおおおお！！」

シヤガがカツラの首を締め上げた

「ぐおっ！！ち…ちよいまち…」

カツラは苦し紛れにタップする

「…おじいちゃんか3人いるうっ！！キャハハハ！！」

フラフラアイリスを見ながらアロエが頭を抱えた

「どうすりゃいいのさ…」

「次はダイキさんやで！」

カラオケの番が回ってきた

「さて…んじゃ歌いまーす！！」

『おおおおおい！！！！』

「仲間の数はそりややつぱりしつかりがちり多い方が良い」
結構前にオーキド博士が歌った曲だ
因みにもう発見されたポケモン達は151匹を越えているが未だに
歌詞は151匹のままだ
しかし、いろんな人に愛されている曲である
皆ノリノリで手拍子している
ここの集まりは平和のようだ

「ウフフフ…良い男ばかりねえ…ナツメ？」
カンナの言葉にナツメは頷いた

「ええ…選り取りみどりよ…さて…ミクリ×ワタルかしら…それと
も…」

カンナがあとをつぐ
「レンブ×シバよね…」
2人して向かい合って

『腐腐腐腐腐腐腐…』
……コイツらは変わらないようだ

「お一つどうぞ」

まいこさんからの酌を受けるアデク

「おお！すみませんなあ！！」

アデクはご機嫌だ

「いえいえ〜チャンピオンはんも楽しんでおくれやす〜」

まいこさんは如才なく言う

「ハッハッハッ！！いやああまいこさんは色っぽいのおなあカツラ
！」

年長組はまいこさん相手にお酒を飲んでる

「うおーい！！確かに確かに！年甲斐もなく燃え上がりそうだ！！」
カツラはハイテンションのまま

「ふう…気心の知れた奴等と酒を飲む…良いものだな」
ヤナギはシミジミと言った

「確かに…たまには良いものだ」
シヤガも寛ぎながら言った

皆思い思いに酒を飲み、ジュースを流し込みご飯を食べる…そんな
どんちゃん騒ぎに一匹のポケモンが気が付いた事はまだ誰も気付か
ない

「皆ああああ！！ポケモン達にも味会わせてやろっじゃないか！！」

『よっしやああああああ！！』

寧ろ暴走が始まった！！

番外編 カオスは続くよ何処までも！(後書き)

次回！あのポケモンがついに怒った!？

番外編 ちよつと待てええええ!! (前書き)

次回!地獄の追いかっこ!

番外編 ちよつと待てええええ!!

ポケモン達が飛び出したことで辺りはよりカオスになった

酒をがぶ飲みするドサイドン

くすぐりまくってるエリカのモジャンボ

アイリスに乗られて困惑気味のカビゴン

辺りは更に混沌としてきた

「酒が足りんぞ！早く次！！」

ヤーコンはお銚子片手に叫ぶ

「む…飲みすぎだろっ」

ハチクが注意するが聞いちゃいない

「やっぱり岩っていいよね」

ヒョウタがツツジに話し掛ける

「確かに…あの無骨さがたまりません」

岩タイプ談義に花を咲かせれば

「ほう！アサギの灯台の管理もなさっているのか、いや家の息子に

も見習わせたいもんだ」

トウガンはミカンに話し掛けていた

「いえ、アタシも好きでやっている事ですから…ヒョウタさんもち

やんとクロガネ炭鉱の管理をされてますし…」

ミカンは謙遜しながら言った

「ドン！」

ドサイドンはヒョウタのラムパルドと肩を組み陽気に料理をパクついている

「リイイイイキアアアアアアア！！」

「ナゲエエエエエエ！！」

「ねえカビゴン！アツチ行ってみようよ」

カビゴンはアイリスを頭に乘せてドスドス歩き始めた
見えるのはスズのとう

ジョウト最大の名所にして文化遺産だ

「おつきい…綺麗…」

アイリスは息をのみ

カビゴンも見上げた

「あれ？」

アイリスは目を擦った

カビゴンも同じく目を擦った

頂上に何かいるのだ

「カビゴン…ジャンプできる？」

アイリスの言葉にカビゴンは頷き…地面に向かって被害が出ないよ
うに調節しながらはかいこうせんを発射し…飛び上がった

そして一瞬だけハッキリと姿が見えた

其処にいたのは巨大な鳥ポケモン

ズンと着地したカビゴンとアイリス

「…ねえ？あれ何だろ？」

カビゴンに訪ねるがカビゴンは首を振った

その時である

テンションの上がったカツラのブーバーンがかえんほうしゃを出した
その射線はスズのとうの天辺

つまりあの巨大な鳥ポケモンが居た場所だ

其処に直撃した

「！！…カビゴン急いで御主人の所へ走って！」

アイリスに言われカビゴンは全力で走った

チャンピオン達とマツバやアカネはのんびりとしていた
そこへカビゴンが地響きを立てて走ってきた

「どうしたんだいカビゴン？あれアイリスちゃんも？」

ダイキは首を捻った

「さっきの見た！？かえんほうしゃ！」

皆頷いた

「アレはギリギリだな…燃えたらどうするんだ！」

ワタルが言ったとき

「頂上にポケモンが居たの！！でっかい鳥ポケモン！！」

シロナやワタルにミクリは首を捻ったが

マツバとダイキは凍りついた

「今……なんと？」

マツバが声を絞り出した

「だから！！でっかい虹っぽい鳥ポケモンが居たの！！」

アイリスの叫びが響き…ジヨウトの関係者全員が止まった

ジヨウトに住む人は誰でも知っている

エンジュは其れに深い間柄だし…ダイキは論文でこのポケモンの歴

史について書いたこともある

「まさか…ホウオウ？」

ダイキが呟いた途端

スズのとうの天辺から火柱が立ち上り巨大な影が飛んできて

「ホオオオオオウ！！」

叫びを上げた

『ふざけんなああああああああ！！』

ジヨウト関係者全員が絶叫した

「全員退避！！戦ったら辺りが不味い！！」

ジヨウト組の大パニックに他の地域も事態を察知した

確かに撃退は出来るだろうが辺りを巻き込むため文化遺産が壊滅し

てしまうからだ

そして…

リーグ関係者と下界を眺め微睡んでいた処をカツラのブーバールの

かえんほつしやに叩き起こされたホウオウの追いかけてここが始まっ
た！！！！！

番外編 逃げる！地獄の追いかっこ！（前書き）

出来ました

次回で番外編は終了です

番外編 逃げる！地獄の追いかっこ！

「ぬあああああ！！！」

シバ達武闘派が凄まじい早さで逃亡する

「とにかく走れえええええ！！！」

ワタルが全力でダッシュする

シロナも走る

「ヤナギさん乗ってくれ！！！」

「すまん！恩に切る！！！」

ヤナギを背負って走り出すダイキ

「何故…こんな事に！！！」

カツラがギャロップで悠々と抜いていった

「アンタのブーバーンのせいでしょうが！！！」

センリがツツコミを入れた

ドサイドン達を慌ててボールに入れて走り出す

「ギオオオオオオ！！！」

すぐ横にだいもんじが着弾した

「うあわだあああああ！！スズネのこみちがあああああ！！！」

！！

マツバが叫ぶ

メラメラ燃え出した森

「ミロカロス！ハイドロポンプです！！！」

ミクリのファインプレーによりなんとか消えた

「ミクリのミロカロスで消火が精一杯！？ありえん！！！」

通常より遥かに強大な力

まるで…

「私のドサイドン達と同類か！？」

ダイキのドサイドンは伝説を凌駕する

だがホウオウが…あの死したポケモンすら甦らせる力を持つあのホウオウがダイキのそれと同じならば？

目も当てられない！

「どうするんだダイキ!？」

少なくともジムリーダーークラスや四天王では押さえられないならチャンピオン5人なら？

「よし！チャンピオン達で食い止める!!！」

それに合わせてアデクさんがクリームガンを繰り出した瞬間れいとうビームが飛んできた

『は!?!』

全員が目を疑いホウオウが叫んだ瞬間

「クオオオオオオ!!！」

「ラアアアアアイ!!！」

「ガアアアアアア!!！」

物影から三匹のポケモン

「なんでこの子達までくるのよ!！」

シロナは思わず叫んだ

エンテイ、スイクン、ライコウ…最悪だ

「む…周辺のポケモンも活性化しているな」

アデクさんが呟く

「楽しい忘年会が…なぜ?」

ミクリが愚痴をこぼした

そりゃそうだろう

何しろ殿になった私達の回りには獰猛に活性化した野性ポケモンの群れ

幾らなんでもキツイ

本気でやれば出来ないこともないが確実に地形が変わって二次被害が起こりかねん

せめて…私達に匹敵するトレーナーが入れ…居たアアアアア
!!!!!!

「すまん！少し時間を稼いでくれ！！」

私は叫んだ

「任せる！打開策に期待してるぜ！！」

ワタルがガッツポーズを決めた

私はそのままゴルーグに乗り飛び立った

「やれやれ…多すぎるだろう！！」

アデクさんがバツフロンで薙ぎ倒しながら言った

「そうですね…まあ対になる海の神が居ないだけマシでしょう」

ミクリのホエルオーがしおふきで広範囲を一気に倒す

「ダイキ…まだ？」

シロナが呟いた時

突然エンペルトが現れて敵を吹き飛ばした

「ワツハ！！皆さんご無事でしょうか？」

現れたのは燕尾服の執事

「キャツスルバトラーのココラン！？」

そう名執事のココランである

「ダイキさんの要請が会ったので参りました」

すると空からドサイドンと共にダイキが落下してきた

「待たせたな！」

ダイキが笑いつつ言った

更に後ろに人影がある

「なるほど…そう言えばダイキ仲良かったな、オマケにチャンピオンクラスなのは間違いないしな」

ワタルが呟いた

「ワーオ!!! 珍しいポケモンばかりですね!!!」

ファクトリーヘッドネジキ

「大丈夫ネ! レッツファイト!」

ルーレットゴツデスダリア

「チャンピオンは負けられないからしんどいわね? でも尊敬できるわ」

ステージマドンナケイト

「うむ!!! 全力でお相手しよう!!!」

タワータイクーンクロツグ

フロンティアブレン達だ

バトルフロンティアはポケモンリーグの外局だが規模は本家に負けず劣らずの巨大組織

必然的にフロンティアブレンもチャンピオンクラスの实力があるのだ

「さて…強力な助っ人も来たことだし、いっちょ始めるか!!!」

『おっ!!!!!!』

ダイキの号令に皆が合わせた

エンジュとアサギの間の道路にて大決戦が始まった!!!

番外編 逃げる！地獄の追いかっこ！（後書き）

次回

リーグチャンピオン & amp; フロントティアブレイン vs ホウオウ
一派！！

番外編！！伝説V S トレーナーズ！！（前書き）

久々の投稿です！！

番外編！！伝説V S トレーナーズ！！

「エンペルト！ハイドロカノン！！」

溢れんばかりの水の本流

しかしスイクンのれいとうビームで相殺する

「ネジキ！頼んだ！」

クロツグがレジギガスを繰り出す

「了解です、アーボックいえき」

アーボックのいえきによりレジギガスのデメリットが消え爆進しはじめた

「行くわよハッサム！バレットパンチ！！」

ケイトのバレットパンチが回りの野生ポケモンを蹴散らす

「サンダー！！10万ボルト」

ダリアのサンダーがエンテイに襲い掛かる

「ミロカロス！みずのはどう！！」

ミクリがさかさず援護する

「オオオオオオ！！」

ホウオウがせいなるほのおを吐き出し辺りが燃え襲い掛かる

「任せる！ドサイドン！！がんせきふうじ！！」

がんせきふうじで出来た岩が炎の進行を阻む

「レックウザ！ドラゴンクロー！！」

レックウザのドラゴンクローがホウオウに襲い掛かるが

「コオオオオオオ！！」

ライコウのほうでんが直撃し墜落した

「なっレックウザが！？」

「ロスレイド！エナジーボール！！」

シロナのロスレイドがエナジーボールを放ちスイクンを吹っ飛ばす

「いけえレジギガス！にぎりつぶす！！」

ギラティナがギロリとホウオウを睨んだ

「もう一息だ！！レックウザ！！」

レックウザが再び浮かぶ

「ゆけえいウルガモス！！」

アデクがウルガモスを繰り出す

「出番よガブリアス！！」

「ホエルオー出番です」

ミクリが微笑む

そしてブレーンもニヤリと笑った

「っっりゅうせいぐん！！」

シロナ、ワタル、ダイキのドラゴンによるりゅうせいぐん

「オーバーヒート！！」

アデクのウルガモスが業炎を繰り出す

「しおふき！！」

ミクリのホエルオーが盛大に吹く

「ハイドロカノン！！」

コ克蘭のエンペルトが

「マグマストーム！！」

ネジキが連れてきたヒードランが

「ギガインパクトオ！！」

クロツグのレジギガスが

「かみなり！！」

ダリアのサンダーが

「バレットパンチ連打！！」

ケイトのハッサムが次々に大技を繰り出した！！

その全弾がホウオウ達に直撃した

煙が晴れ…

「……しんどいのう」

アデクがばやきながら見ると

ホウオウ達はヨロヨロと逃げ去っていった

『……………勝った……………』

流石最強クラスの伝説…

ダイキを含むチャンピオンズにブレイン達を加えて漸く撃退に成功したのだ

ただし…周辺の被害が半端ではないが

「どうしようかねコレは……………」

ダイキがポツリと呟いた

大地は抉れ、割れ、熔けてクレーターが出来ている

森は燃えて山は崩れ大被害だった

この時メンバー達は同時に思った

『……………事務局長になんて言えば良いんだろう……………』

この後全員が取り調べを受けカツラの給料が前代未聞の七割カットになった事は言うまでもなく……………

チャンピオンとブレイン達は事務局長の前で正座し説教を受けた

そこにいたのは最強のトレーナー集団だが…リーグの砦、事務局長

には逆らえないようだ

ちなみに会長は宥めようとしたが逆に論破されダイキ達は助けを失い…実に3時間正座していた

なおこの後グレンジムが物理的に悲惨な事になったが…誰がやったか定かではない

因みに島には複数の足跡があったことが分かっている……………

番外編！！伝説V S トレーナーズ！！（後書き）

これで番外は終わりです

そして本編シロナ達の戦いが終わったら…最終回三部作を投稿する
予定です

しかしまだやりたいことはあるので番外編は掲載しますが

やっぱり奴は変わらない(前書き)

こんな感じですよ

後書きのアンケートにご協力下さい
ぜひご協力下さい!!

「ハガネール！！私達を守れ！！」

ハガネールがとぐるを巻きダイキとシロナとミクリを包み込む
爆音が止み…外を見れば壊滅している会場が…

「まだやるか？」

ワタルが勝ち誇った様に言った

「どうすればいい…？」

シンジは考え込んだ

ちなみにダイキはエライモノを発見した

「しつかりしろタクト！！」

黒焦げのタクトだった

「僕の…伝説が…一撃」

ふと回りを見ると…ジラーチ、ラティアス、ダークライ、クレセリア、デオキシス、スイクン…どこから捕まえてきたんだと言わんばかりのオールスターだ

まあワタルやダイキにとっては障害にすら成りはしないが

クロツグやリラ、ジンダイクラスなら流石に手こずるが捕まえてるだけなら完封出来る

「ドダイトス！！バトルスタンバイ！！」

大地を踏み締める陸亀が現れたが

「げきりん…君はまだ俺には遠く及ばん！！」

カイリユ一のげきりんがドダイトスを一撃の元に葬り去る

シンジは戦法を切り替えた

ドラゴンは殆どの相手に等倍を取れる

だが唯一はがねだけは半減されるのだ

「ボスゴドラ！！バトルスタンバイ！！」

現れたのはボスゴドラ

「以前とは技が違うぞ…もろはのずつき…！！」

いわタイプ最強の技がいしあたまにより反動なしで繰り出された

全てのイベントをぶち壊したワタル
当然のごとくブログは炎上し、4ちゃんで叩かれてサーバーも落ちた
サーバー会社は言った
「またワタルショックか!!」

ワタルショック……ワタルがやらかした事のせいで自社のサーバー
が落ちる事

やっぱり奴は変わらない（後書き）

さて番外新シリーズとして長編イフシリーズをやりたいと思います
これはダイキがシロナの電話番号を入手するよりまえの早い段階で
胃を壊しチャンピオンをやめたら…いわゆる一部終盤アンケートに
書いてあったフロンティアルートです
ヒロインはリラの予定です

なお新しいフロンティア施設のボスになるまでと、なったあとのワ
タルとの最終決戦まで描く予定です

そこでお聞きしたいんですが…ダイキの手持ちはドサイドン、カビ
ゴンまたはカイリキー、バンギラス、ギャロップまでが確定です

通常の内、カビゴンかカイリキーのどっちかがお休みになります
そしてブレーンの代名詞の伝説ですが…

1 世紀末レジギガス

2 ハイスピードエムリット

3 甘えん坊ジラーチ

のどれかから選んでください
皆さんの力を待っています

イフシリーズのダイキ（前書き）

設定です

見れば楽しくなります

イフシリーズのダイキ

年齢は17

12歳と言う極めて早い段階にドクターストップで引退した

その為金髪だが前髪に白髪がある

チャンピオンを引退した為暇になりハヤト達と遊んでいる内に一人称が俺になる

趣味は文通

新しいフロンティアアブレインの募集を見てオーキド、ウツギの両博士とハヤト、マツバ、ヤナギ、アカネの親交がある4人のジムリーダーの推薦状を引つ提げてホウエン地方へ向かう

なりたい理由は胃の完全回復の後暇でしようがないのとリーグだとしょっちゅう戦うため再発の恐れがあるがフロンティアアブレインならその恐れがあまりないから

服装

ラフな服装

ジーンズにTシャツとジャケット

ジャケットの内側に元リーグチャンピオンのバッチがしてある

手持ち

ドサイドン

プロテクターを食って進化

ダイキ最強の手持ちにしてダイキ四天王の一角

テラフリーダム

カイリキー

怪力無双

バーベル上げ中に進化

通信交換しないとダメな筈だが…

同じくダイキ四天王の一角

フリーダム

バンギラス

弱点が多く使いづらいがドサイドンと互角にやり合う猛者

ダイキ四天王の一角

レッツ！！ダンシング！！

ギャロップ

バトルファクトリーのネジキから引き取る

スピード凶

自転車代わり

エレキブル

天性のミュージシャン

かみなりやクロスチョップと万能な戦い振りが出来る

ジラーチ

空から降ってきて看病してくれたダイキになつく…と言うか惚れてる

甘えん坊で独占欲が強い

ボールから飛び出して頭か肩に乗る

女の子が来たら睨み付ける

が…可愛いため恐くない

ダイキ四天王

現在のダイキの手持ちの中でトレーナーのプライドと手持ちを一体で粉碎できる最強の4体

すなわち

ドサイドン

カイリキー

バンギラス

カビゴンである

本来の歴史ならバンギラスが抜けてオノノクスが入る

カビゴンは現在オーキド牧場の工事の手伝い中なので一時離脱中

補足

ワタルはダイキがシロナにアプローチしてないのでシロナ口説き中

エニシダはダイキが向かっていることを知らない

イフシリーズ！フロンティアルート（前書き）

さあ新シリーズ開幕です！！

イフシリーズ！フロンティアルート

ああ暇だな…俺は眠たげに思った

アサギシティにある一軒屋に俺は住んでいた

チャンピオンになってから2年程過ぎたある日の定期検診

『相変わらず胃が痛くて…』

『アンタ…引退しな』

『は！？？どういう事です！！』

『胃が限界だ…チャンピオンの重圧って奴もあるんだろうが…このままやっていると死ぬぞ』

流石の俺も命は惜しかったので引退した

余りに速かったな

一人称も気楽に俺にして、アサギシティに引っ越してからもう5年になる

ワタルとたまにバトルするから腕は衰えてはない

あと何人が相棒が増えた

代表的なのが…

「ジラー」

頭の上に乗っかってるジラーチだ

「よしよし…取り合えず動くなよ」

更々と手紙を書く

コイツはオスなのかメスなのか…多分メスかな

伝説に性別はヒードランを除いて居なかった筈だがなあ

ある日コイツは家の屋根をぶち破って落ちてきた

慌ててポケモンセンターに運び治療した後だ

「ジラーチ！！」

俺を見た瞬間に目がハートになった気がした
それ以来ボールに入れてもすぐに飛び出している
カビゴンは今は手持ちにいない
アイツはオーキド博士の頼みで牧場の大改修の手伝いをしている
カビゴンは相撲好きだけで極めて後はまともだ
たまにオーキド博士と泥だらけになった写真や美味しいものを食べて
ご機嫌な様子が送られてくる
期間は1年だが人懐っこいから大丈夫だろ
オーキド博士にも慣れてるし

オーキド牧場

「カビカビカビ!!」

岩を壊しまくるカビゴン

「カビゴン、お昼の時間じゃぞ?」

カビゴンは目を輝かせ隣のオーキドをかつぎ上げ歩き出した

「今日はカレー味のフードじゃ!」

「カビツ!? ゴーンツ!!」

意外と良いコンビのようだ

「……それでは貴方もお元気です」と

手紙を書き終えて特殊な笛をふく

すると空からカイリユーがやって来る

カイリユー郵便と言う奴だ

「それじゃ…これを頼んだよ」

カイリユーは頷き飛び立っていった

2年ほど前に海岸にいわゆる…ボトル入りの手紙が流れ着いていた
たまたま泊まりに来ていたマツバさんによればフラグが立つ!との事
手紙の文字は綺麗で名前はリラと言つらしいが性別の判定がつかない
暇だから自分の住所も添えて手紙を送った

それが縁で今も手紙を送っている

「ジー…」

「いや何で睨むのジラーチ？」

さて…準備でもしますか

新しい冒険のために！！

愛用していたリュックを取り出し新調した靴に履き替える
最新型のポケギアを持って外に出る

外には友人が待っていた

「や！ダイキさんどちらまで？」

ひこう使いのハヤトがピジョットに乗りながら言った

「ホウエン地方へ！」

さて…俺の新たな旅立ちだ！

「あん？リラ何やってんだ？」

俺はリラに話し掛けた

「な…何でもないよ！」

たつく…もう少ししたらカントーに施設を移すつてのによ…

すると近くに居たアザミが言った

「文通中の男の子がいるんだそうよ…どんな子なんだか」

ジンダイやウコンは可愛がつてるからなあ…生半可な男じゃボロボロにされるぞ

「そついやエニシダが新しい施設を作るって？」

俺は隣のヒースに聞いた

「そうらしいね…今回は一般応募と推薦状持ちで争って決めるみただけだ…」

……へえ…

「その通りさヒース！！」

振り向けばエニシダが居やがった

「新しく作られる施設は1ON1の決闘場!!その名もバトルコロ
ツセオ!!そのコロツセオボスを決めるのさ」

……まあ仲間が増えるのは歓迎だ

楽しみにしとくか

イフシリーズ！ 開幕の笛（前書き）

ダイキ君の第一戦です

なんだか相手が可哀想になってきた

イフシリーズ!! 開幕の笛

「ようこそ! 皆さん: 私がオーナーのエニシダです! ようこそバトルフロンティアにいらっしやいました: 早速ですが受付を!」
エニシダさんの声が響く

引退したのは5年前だからもう俺は過去の人間だからそんなに有名じゃない

回りを見るとアイドルトレーナーとして有名なフブキがいた

『キヤーツ!! フ・ブ・キサマァー!!』

追っかけの数およそ100人!!

「ハハハツ!! 必ず勝つよ皆!!」

一応ポケモンリーグベストフォーと実力はある

どうも好きになれないな

アツチには新時代のニューウェーブは俺だ! と叫んでる奴がいる

アイツはバトルキングと名乗っているブームとか言う奴だな

「俺が最強だ!! 負けやしねえよ!」

雑誌のインタビューに答えている

因みに雑誌の記事はフブキとブーム一色だった

そここうしている内に俺の番だ

「お名前と履歴、推薦状がありましたらどうぞ」

俺は無言で差し出す

「……えっ!?! ……うそ…よろしければバッジを見せてください」

「はい、どうぞ」

俺は服を裏返しバッジを見せる

「はい…いや感激です!! 頑張ってください!!」

受付さんの激励を受けて俺は笑って手を振った

据え付けられた掲示板に名前が出る

一回戦の相手はフブキか

「オーナー!!」

受付ちゃんが話し掛けてきた

「どうしたんだい？」

僕は普通に答えた

「こ…これです!!」

そして差し出されたファイルをみた

「な…っ!!これは本人が!？」

ファイルに乗っていたのは推薦状持ちのトレーナーの1人

推薦状がある数だけ3ON3のバトルでポケモンに道具を持たせていいのだが…彼が本人なら必要すらないだろう

予選突破者はフロンティアブレイン3人に認められて始めてブレインになれる

だが彼なら一発だろう

…速すぎる引退をした破壊神

セキエイ高原を灰塵にした2人の天才の1人!!

初代ジヨウトリーグチャンピオンダイキ!!

これは凄い人が出てきたね…

「フブキ!!フブキ!!フブキ!!」

回りの観客の歓声が響く

『さあ…はじまります!フブキ君のブレイン挑戦が!皆さん!!フブキ君の挑戦を4時間生のぶっ通しで中継します!記念すべき第一戦の時間がやって参りました!!』

フブキ君ブレインへの道!!とか言う番組のスタッフが叫んでる

『頑張つて!!』

多分別スタジオのタレントの応援が響く

「悪いけど…君の挑戦はここまでだよ!運が悪いね」

サラツとポーズを決めているフブキ
観客が盛り上がる

だけど悪いがこっちの台詞だ

「いけっ！！チャーレム！！」

「踏み潰せ！！ドサイドン！！」

勝ち誇ったような笑みを浮かべるフブキ
だが…

「ドサイドン！！じしん！！」

ドサイドンのじしんでチャーレムが一撃で昇天した

『はっ？』

マスコミが呟く

「ふ…ふん！まだだいけっトドゼルガ！！れいとうビーム！！」

「ドオオオガ！！」

『こ…これは強烈だあ！』

マスコミが叫び観客も盛り上がる
が

「ドサイドン！！ストーンエッジ！！」

「ドサアアアイドン！！」

岩の群が襲いかかりまたまた昇天したトドゼルガ

『あああああ！？フブキ様のポケモンがあああああ！？』

ファンが悲鳴を上げる

「こ…こここ！！これでどうだ！！ザンゲース！！インファイト！！」

「ザンツ！！」

ザンゲースが拳を叩き込む

『行ったあああああ！！フブキ君の切り札ザンゲース！！こうかはつぐんだ！！』

「やっぱりフブキ様は強いわあ」

はしゃぐ観客とマスコミ

だが相手が俺だ…運が悪かった

「アームハンマー！！」

「ドオン！！」

ズツガアアアンと鈍い音と共に地面の中にザンゲースが頭から沈没している

間違はなく戦闘不能だ

『……………皆さん…予測できたでしょうか…？フブキ君が手も足も出ませんでした…』

「フブキ様…が」

「き…君はいつたい何者だあああああ！？」

フブキの叫びに俺は答えた

「俺はダイキ……………初代ジョウトリーグチャンピオンだ！！」

その声は高らかに響き渡り会場にどよめきとこっそり見学していたブレインの魂に火を付けた

5年の月日をえて最強の破壊神が凱旋し完全復活を遂げた

イフシリーズ!! 鎧袖一触!! (前書き)

ダイキのポケモンである以上ジラーチも普通でないです

イフシリーズ!! 鎧袖一触!!

会場に来た夢追い人達に絶望が広がる

あのブームですら

「……………おいおいマジかよ……」
と言うほどだ

今は引退してけっこう経っているから有名じゃないとダイキは思っていたがそんな訳はない

ポケモントレーナーを指すなかでダイキを知らない奴は殆どいないと言っている

嘗てはワタルとダイキの内どちらかがポケモンマスターになると言われていた程だ

リラは目を見開いた

「へえ……凄い人だね」

「あーっ!! また勝った!!」

コゴミが叫ぶ

「カイリキー1匹で3タテ…化け物だなまさに!!」

ジンダイが叫ぶ

ちなみにブレインの中ではジンダイが一番ダイキのカイリキーと相性が悪い

レジ軍団はばくれつパンチからクロスチョップで撃墜されサンダー達はストーンエッジでアウトだ

「伝説のポケモンはなんだろうね?」

ヒースがワクワクしている

ダイキの第3試合

ここからコロツセオルールに従い道具無しのカチンコ1on1だ
ただし例外としてなげつけるに使うための物は効果が発動しない物
に、しぜんのめぐみも同様な木の実に変えて行う

「イキナサアア！フリーザー！！」

ギタリストのジョニーがフリーザーを繰り出す

極希だが伝説のポケモンも繁殖している

つまり手に入れることは不可能ではない

「出番だジラーチ！！」

「ジラツチ！！」

ゴツイポケモンばかり使っていたダイキがファンシーなポケモンを
繰り出した

ジョニーは内心バカにした

だがあの…ダイキのポケモンである

「フリーザー！れいとうビーム！！」

フリーザーのれいとうビームをヒラヒラ避けるジラーチ

「ジラーチ！！アレをやれ！！」

ダイキの声に合わせジラーチは祈り出した

「エアスラッシュ！！」

流石に当たってしまったがはがねタイプゆえびくともしない
そしてそらに暗雲が漂った

「はめつのねがい！！」

空から光輝く光線がフリーザーを飲み込んだ

「ザアア……」

いちげきげきちん！！

オマケに特大クレーターを発生させた

『……………アレはジラーチじゃない……………』

会場全員がポツリと呟いた

「ジラジラ〜」

ダイキに飛び付いて甘えるジラーチ

「よしよし、ごころうさん」

ダイキの爆進は続く

ダイキは何故ここに来たのだろうか

実はフロンティアブレインになりたいとは別の目的がある

以前リラから来た手紙にこんな一文が合った

『君はホントに愉快だね！いつか会ってみたいよ』

と言う物があった

幸いにも住所はフロンティア職員の居住区と分かっている

そう考え込んだときハヤトからブレイン募集の話聞いていて何時でも推薦状を書くと聞いていた事

そろそろ自分も再び返り咲こうと思った矢先だったので決意したのだ

因みにダイキは機会がありジョウトのフロンティアブレインと戦い勝利している

フロンティアのルールを学べた事も挑戦に拍車をかけた

……ダイキの公式戦成績に数少ない黒星がついたが

（ネジキとの一戦である…ネジキはラティアス、ヒードラン、メタグロス…ダイキはラムパルド、ボーマンダ、アゲハントだった…アゲハントがヒードランに焼かれ劣勢になり粘ったものの敗北）

しかし現時点でリラがブレインだとは知らないダイキだった……

イフシリーズ!! 鎧袖一触!! (後書き)

何だかジラーチが甘えん坊でなくヤンデレにカテゴライズされる気がしてきた

………まだ甘えん坊ですよね？

イフシリーズ！ 約束は守る（前書き）

ありがとうございます

リラと邂逅！

イフシリーズ！！ 約束は守る

大地が揺れる

対戦者のブームは恐怖していた

「バアン？」

ブームの手持ちはバンギラスにより一瞬で壊滅した

フーデイン きあいだまをかわして噛み砕く

サイドン じしんでKO

ファイヤー ストーンエッジでサヨナラ…

「次元が違うぜ…」

ブームは涙も出なかった

さて1日が終わりダイキは居住区に向かっていた

「手紙に寄ればこちら辺の筈なんだけどなあ…」

回りを見れば高級な住宅ばかりである

「どこだよココ…ホントにこちら辺にあるのか？」

必死になって探し回り辿り着いたのは…

「バトル…タワー？」

近くに居た人に聞いてみた

「すみません！バトルタワーの頂上とかに誰か住んでいます？」

受け付けさんは笑っていった

「頂上にはタワータイクーンオーナー…リラ様がいらっしやいますよ？勝ち上らなければ会えません」

………リラ？

………タワータイクーンなのかアアアアアアアアアア！！

「どうしよつかね…会いに来たんだけどね…よし！すいませんが挑戦申し込みします！」

……この日受け付けは受け付けた事を後悔した

「ふんふくん…」

リラはのんびりと自室で寛いでいた

「にしても…『今度遊びに行きますよ』か…無理だろうな」

リラとて女の子である

人並みに恋ぐらいする

大抵の恋は直ぐ終わる

まず会いに行くのが困難だ

滅多に下りてこないタワータイクーンな為自ら会いに行くしかない

自分がブレーンに成れば別だが

更に絶対条件として自分に負けるとしても互角の戦いが出る人物

で無ければならない

彼女が恋しても2の条件を満たさなければアウトだ

ちなみにブレーンの男性陣はすべて満たしているが

ウコン……年取りすぎ

ジンダイ……暑苦しい

ダツラ……興味なし

ヒース……変態

と残念すぎる状態だ

「はあ…僕って一生恋なんて出来ないんだなあ…」

ため息をついた

その時だった

「あれ？挑戦者ランプが……はい！！いかなきゃ！！」

リラは駆け降りた

化け物…と受け付けは思った

ギャロップとカイリキーだけでここまで制覇した人は例がない
嵐としか言いようがない
現時点で新ブレンにもっとも近いと言われているだけはある
破壊神と呼ばれる訳が分かった

「アレ？貴方は…昼はご苦労だったね」
リラがゆっくりとやって来た

「ああ、こちらこそ…にしても自分の職業くらい書いといて欲しい
よ…俺ホントに驚いたぞ!？」

リラが？を浮かべている
「え〜っと…ゴメン話が見えないんだけど…」
と言い出したので手紙を引っ張り出す

「ほら！約束通り会いに来たぞリラ!!」
リラは止まった
そして

「うええええええええええええええええ!!!!」
引っくり返らんばかりに驚いた

「え…嘘…僕！そんな!?ダイキつて…え!？」
何大パニツクになつてるんだ？

「取り合えず落ち着け!!な!」
肩をガシツと掴んだ

アレ？男にしては華奢だよな…まさか…
「アワワワ…いや…そのいきなりそんな…」
え？

女の子オオオオオオオオオオオオオオオオ!!!
しかしこうしてみると女にしか見えないな
「まあ…取り合えず書いてあったから来たぞ」

リラは心底驚いた

手紙に無理だろうなと思いながら書いた一文を忠実にやってのけたのだ

(コレは…運命かもしれない)

そう思うのも無理はない

恐らく明日あたりジンダイ、ウコン、コゴミと戦い認められれば正式にバトルフロンティアの新ブレンとして認められる
既にダツラがダイキ支持を表明しているためだ

この日は戦いはず談笑して終わりになった

その後リラは思い立ったように電話した

『もしもしコゴミ？僕だけど……うん…変わってくれないかな？…

……ありがとう』

「さて…今僕が密かに抱いてる思いが本物かどうか…確かめないと…」
リラは微笑んで部屋に戻った

イフシリーズ！！ピラミッドキングVSジヨウトの覇者（前書き）

中々返事が返せなくて申し訳ないです

イフシリーズ！ピラミッドキングVSジヨウトの覇者

「この時を！！待っていたぞ少年！！いやダイキ！！」
暑く吠える1人の男

「言葉はいらぬ…ピラミッドキングのジンダイ！！いざーフリーザー！！」

「上等だ！！ジヨウトの覇者の力を見せてやる！！ギャロップ！！」
氷の鳥が現れ炎の馬が出現した

「フリーザー！！みずのはどう！！」
放たれるのは水の波！

「ギャロップ！！こうそくいどうで加速！振り切れ！！」

「ロオオップ！！」
急加速し相手を振りきる

「ぬ…そらをとぶ！！」

「フリーイイイイ！！」

フリーザーが一気に飛び上がった

「ジンダイさん…全ポケモンでもっともジャンプ力があるポケモン…ご存じですか？」

「む…バネブーか？」
俺は首を振る

「正解はギャロップ！！そのジャンプ力は300mを超える！！フレアドライブ！！飛び上がれ！！」
ギャロップは炎を纏って突進した

「なにい？」

スカイハイしたギャロップが滞空しているフリーザーをすっ飛ばした

「な…なんと…流石はチャンピオンだっただけはある！ファイヤー！！」

「戻れギャロップ！！いけっドサイドン！！」

火の鳥と大地の要塞が出現した

「むう…相性が悪いな、がまけん！だいもんじ！！」

超高熱がドサイドンを襲う

しかし…ダイキ最強の手持ちはこの程度で止まりはしない！！

「オオオオオ！！」

ドサイドンが吠え地面をブツ叩く

ストーンエッジだ

「フウアアアア！！」

墜落したファイヤー

「ハ…ハハハハハハ！流石だ！見事だ！！これ程までに楽しい戦いは久しぶりだ！！サンダー！！」

「出る！！バンギラス！！」

雷鳥と暴君が現れた

砂嵐が吹き荒れる

これによりいわタイプの特防が上昇する

特殊攻撃が多いサンダーには痛手だ

「落ちよ！！かみなり！！」

しかし伝説の鳥ポケモンの一撃は強烈だ

太い稲妻がバンギラスを襲う

「げっマヒしたあ！？」

ビリビリと痺れているバンギラス

が目の闘志は消えるどころかたぎっている！！

「バアアアアア！！」

両手を地面に突っ込み跳ね上げる
いわなだれだ

「なんとお!!！」

サンダーを一撃で撃沈させた

ジンダイは暫く下を向いていた

そして笑った

「見事だ少年よ!!ダイキよ!!このジンダイ!君を新ブレインに
相応しいと認めよう!!！」

ジンダイは大声を上げた

「ありがとうございます!!！」

ダイキ: フロンティアブレインまで後二勝!

一日前のワタル

「なあシロナ: 今度出掛けないか？」

私服をきたワタルは口説いていた

「う〜ん: 良いわよ？」

ワタルはガッツポーズを取りながら場所をシロナと相談していた
その時だった

「ん? テレビ特番: フブキフロンティアブレインへの道?」

シロナが気が付いたのでリーグロビーのテレビを着けた

チャンネルが多く中々見つからない

「フブキ: たしかアイドルトレーナーだったな、実力あるのか？」

ワタルは呟きながら見ていた

「あ: 写るわよ」

そして写ったのは意気消沈のスタジオだった

「「なんで!」」

2人同時に突っ込んだ

時計を見ても始まって一時間しか立っていない

何故？しかも失敗と看板が出ている

「ホントに何があったんだ？」

司会のタレントが喋り始めた

『いや：フブキ君はよくやりましたよ！相手が強すぎただけなんです！多分：それでは残り時間フブキ君の名試合をどうぞ…』

「何があつたんだ！？」

四時間枠がなんと一時間で終了し残りは過去試合のベストセレクション

何があつたんだと知らない奴は言いたくなる

「ポケモンニユースは！？」

シロナがポケモンニユースを着けた

『番組の途中ですが臨時ニユースです』
臨時ニユース？と2人は息を飲んだ

『現在行われている新ブレーン決定戦において優勝候補フブキ選手が一回戦で脱落、そして初代ジョウトリーグチャンピオンダイキ選手が現役復帰し圧倒的実力でフブキ選手を下しました』
ワタルは聞いた瞬間嬉しくなった

「そうか！あいつ：また正式にトレーナーに復帰したのか！」

親友でありライバルだったダイキの復帰はワタルにとっても嬉しいことだった

「嬉しそうねワタル」

シロナが言う

「ああ！またいつかアイツと雌雄を決するときが楽しみだ！」
ワタルは叫んだ

破壊神の友の竜王はその日からとても機嫌が良かったと言っ…

イフシリーズ！！酔っ払いの挽歌（前書き）

久しぶりの投稿です！！

たまった感想は明日返信させていただきます

イフシリーズ！酔っ払いの挽歌

「……………」

ダイキが呻く

「マイ…ゴット…」

ヒースが嘆く…………

ドームは壊滅していた

何故？

それは一匹の化け物のせいだった

その名はカイリキー

さてダイキのカイリキーは圧倒的なパワーとラッシュによる殲滅戦が得意でありドサイドン等と同じくダイキのエースである
では何が？

バトル一時間前

カイリキーはダイキに内緒でボールから抜け出し散歩していた
その際にとある木の実を発見した

「リキア？」

カイリキーは木の実をもいで口に放り込んだ

「リキイイイイ！」思わず叫び出す程の美味！

カイリキーは調子に乗って食べまくった

……後でダイキが調べたところこの木の実はアルコールが含まれて
おり天然の酒の材料だった

ダイキにバレないようにボールに戻った

悲劇の始まりだった……

「ようこそ！待っていたよダイキ君…君は強い、だが負けないよ」

「こっちこそ負けるわけにはいかないな！勝つのは俺たちだ！！」

ヒースがウインディを

ダイキがカイリキーを繰り出した……が！！

「ウイ……リック……！」

顔が紅い

「は！？」

ヒースとダイキが声を揃えた

「………すみません…出したことを無かったことにして良いですかね？」

「……構わないよ…君も想定外だったみたいだし……」ダイキが戻そうとした瞬間

「リィ……アッハアアアアア！！」

グネグネかわし紅い光が当たらない！！

「は！？いやカイリキー！！お前戻って！！」

そう叫んだ瞬間

フラツとした動きから繰り出したパンチがウインディをすっ飛ばした

「いい！？」

ダイキが目を見開いた

「これは…酔拳！？くっ……ダイキ君！！カイリキーは酔っ払って命令を聞いていない！行動が読めないから全力で止めるぞ！！」

「了解！！サポートします！！」

が…酔うとは即ち肉体と精神のリミッターが外れることだ

人は無意識の内に力をセーブし理性で本能を押さえ込む

ポケモンも本質的には変わらない

こう言ったりリミッターは本来命の危機に外れるが重度の酔いによって外れてしまった

……結果ヒースのラグラージは愚かダイキのドサイドン、バンギラス、ギャロップ、エレキブルまでが撃破される始末
更にはジラーチのはめつのねがいすら避け、ばくれつパンチでKOしたカイリキーは酔いが回ってようやく眠り騒ぎは収まった

「……コイツには絶対酒は飲ませねえ」

「そうしてくれ…是非とも」

「……俺の試験は？」

「……メタグロスの特性は？」

「……クリアボディです」

「うん…合格」

「……わーい……くっ……なんかもう……動きたくないです」

「僕もだよ…っう…」

トップクラスの実力者がボロボロで呻き声をあげ…気絶したポケモン達が積み上がるなか

「ZZZ…リキ…イ…ZZZ」

予測が付かない酔拳にてダイキ達の手持ちを全滅させたカイリキーが高いびきを搔いていた……

後日カイリキーは重度の頭痛…つまりは二日酔いに襲われるのはまた別の話……

イフシリーズ！！酔っ払いの挽歌（後書き）

ヒース達の手持ちですがアニメ+ゲームになってます

前回ジンダイがアニメで持っていないフリーザーはゲームでの手持ちです

なのでリラの手持ちにライコウが入ることをご了承ください

また事情によりあなをほるがドサイドンのメインになります

自分が言うのもおこがましいですがこの小説を読んで少しでも笑っていたらできればこんなに嬉しいことはありません

リハビリ番外（前書き）

中々かけず申し訳ありません
リハビリとして番外編を投稿します
イッシュ地方の話です

リハビリ番外

イツシュ地方にて旅を続けるサトシ達
とある町にて

「ここが噂のカフェか!!」

デントがカフェに向かって一直線に走る

「あ!?デント、置いてかないでよ!!」

アイリスがその後を追う

「おい!!2人ともし待ってくれエエエ!!」

「ピツカア!!」

ピカチュウと共にサトシは走る

因みにそのカフェの奥の席にて

「男二人でお茶つてのはどうなんだ?」

赤髪サングラスの男が白髪の人に訪ねた

「お前が飲みに来たいって言うからわざわざ私のゴルグに連れてきたんだろ?」

「コーヒーを飲み、カタカタと端末を操作している

「と言うかワタル、スーツの下に何時もの格好は不味いだろ?」

「お前は相変わらずスーツにコートだろうが、ファッションについては言われたくないな、それでもドラゴン使いは誇り高いんでね」

ワタルはフツツと紅茶を進んだ

長い付き合いの親友の2人

たまには男同士で旅行も良いじゃないか!!と言う話が出たので休みを合わせて2人旅と洒落込んでいる

因みにワタルの手持ちは

サザンドラ

カイリユー
リザードン
ダイキの手持ちは
ドサイドン
マンムー
ゴルグだ
チャンピオンが持つには少ないが一匹一匹が桁外れなので大したこ
とはない

「癒されるな…」

「全くだ…」

2人してまったりしていた時だった

「また君か…田舎のカントーに帰ったら？」

ワタルが異様な反応を示した

「落ちてけワタル！！誰が言ってるかは分からないが取り合えず落
ち着くんぞ！！」

「ぐ…すまないな、言ったのはあの少年か」

1人の少年が3人の少年と少女と言い争っている

「ケンカは不味いな…止めるか」

ワタルが立ち上がる

「そうだな、店員さんお釣りは良いよ」

ダイキは財布から勘定を済ませワタルの元へ向かった

「やあ、何があつたんだ？」

赤髪サングラスの男性が会話に割って入る

「貴方は？」

デントが尋ねる

「カントーからの旅行者だ、んで後ろにいるのが」

「ジョウトから来た旅行者だ、こいつの親友だよ」
「やや背の高いコートをきた男性が言った」

「何だ、2人とも田舎から来たんですか？」

「カントーは田舎じゃない！そんな事言うなら俺と勝負しろシュー
ティー！！」

少年がシューティーという少年にかみつく

「……君と戦う意味はないよ」

ダイキはワタルを見た

（やばい、かなり頭に来てるな！止めないと）

「待った！なら俺達と勝負しないか？」

（巻き込まれた！）

「へえ…ダブルバトルですか？良いですよ」

「なら準備をしてくる、この近くに公共のバトル場がある、そこで
しよう」

ワタルは歩き去った

ダイキを半ば引き摺って…

シューティーがサツサと歩き出し、サトシ達は慌てて後を追った

「ワタル！キレすぎだ！！」

ダイキが怒鳴る

「まあ聞け、シューティーは才能はあるだろう、お前も気付いている
だろう、隣にいたあのサトシ君のように」

……ダイキは理解した

「ようは出る杭を打って世界を知って貰うんだな…まあ、それもチャンピオンの仕事か」
最強クラスのトレーナー2人なんてのは少々やり過ぎな気がする
ダイキは思ったが…それぞれの担当地域をバカにされては黙っては
いられない

シューティーがフィールドに立った時だった

「始めに言っておく…ごめん」

ダイキは謝った

「はい？なんですか？」

シューティーはいぶかしむ

「ハハハハハハハハハハ！！！！」

高笑い

マントに黒いボディースーツ

「カントーチャンピオン！！ワタル見参！！」

シーンとしてしまった

「ワタルさん！？」

サトシは過去に会ったことがある

最強クラスのポケモントレーナーだ

そして

「や、また会ったなサトシ君」

「ダイキさん！？」

メガネをかけてたので気づかなかったが以前相手をして貰ったダイ
キさんだ

「なんだかやり過ぎな気がするが…ジョウトチャンピオンダイキ
推参、ハンデとして俺達のポケモンを一体でも倒したら君の勝ちだ」

結論から言おう

相手にならなかった

プルリルはダイキのドサイドンのメガホーンで場外
ジャンプはカイリユーに燃やされる等散々だった
と言っか…一撃で撃破されていた

「……………すごっ」

アイリスがびびり

「ハハハ…これは笑うしかないね…」

デントもひきつる

「……………だろ？この人達ホントに強いんだよ…」

サトシが頭を振る

「……………訂正します、いつか…いつか勝ちますからね!!」

シューティーは走り去った

「よし！すつきりしたぞ」

ワタルはハレバレとしているが

(やりすぎだよな…)

ダイキは罪悪感に飲まれていた

リハビリ番外（後書き）

中々思うような話が書けない…

ワタルは敢えてシューティーの成長のために無理ゲーを仕掛けました
井の中の蛙で要るなって事です

リハビリ短編 その2 (前書き)

イフシリーズの方はしばらくお休みします
返事はまた後日

リハビリ短編 その2

のんびり歩くワタル

今日は各地域のチャンピオンの会議だ

終わった後本部の一室で仕事をした後、ダイキがまたへんてこポケモンを保護し手持ちに入れたと聞いて様子を見に行くことにした

「シート!!」

いきなりシロナに怒られる

それはそうか

本部の広場でシロナの膝枕で寝てるダイキなんぞ見る機会はありません

「……コイツも疲れるんだよなやっぱり……」

ワタルは同情した

がお門違いと言う奴だ

ポケモンに関してはもはや悟りを拓いたレベルなのでぶちギレても胃はかなり負担が減った

しかしだ

このチャンピオンの仕事は相当ハードだ

年ゆえにあまり活動はないが重大な会議の際は誰よりも早く召集のかかる議長のアデク

コンテスト総括に忙しいダイゴ

本部の運営に携わるシロナ

リーグ本部の広報総括のワタル

各地方のポケモンの調査責任者のダイキ

ここ最近、夢特性という新たな特性が見つかったため大忙しなのだ
シロナはダイキの額を撫でている……が

(……やばいくらいにやけてるんだが……)

凄くキラキラした笑顔だ

シロナはダイキを深く愛しているのは知ってる
だが少々愛しすぎな気がしないでもない

（以前一緒にキャンプしただけで写真を寄越せとやって来たからな
…）

キャンプはリーグ男性会の恒例行事である

様々な場所で1週間キャンプをし親交を深めようと言つ物だ

会長はアデクがやっており女性禁止の行事だ

因みに

1月 本部新年会

2月 フロンティア交流戦

3月 ジムリーダー試験、引退式

4月 新形式

5月 リーグ女性会女子会

6月 リーグ男性会キャンプ

7月 臨時休暇支給、ジョウトリーグメンテナンス

8月 リーグ会員勉強会

9月 宣伝キャンペーン

10月

カントーリーグ

セキエイ大会

ジョウトリーグ

ウズマキ大会

ホウエンリーグ

サイユウ大会

シンオウリーグ

スズラン大会

イツシュリーグ

ラセン大会

開幕

11月 リーグ閉幕、ダブルバトルカップ開幕

12月 ダブルバトルカップ閉幕
忘年会
年越し会

とかなり盛りだくさんだ

ダイキは人がいいのと、ワタルが殆ど役に立たないのでかなりのハ
ードワーカーだ

え？どうしてワタルが役に立たないかって？

狭いスタジアムでりゅうせいぐん連打して何回もスタジアムをぶち
壊し、記者会見にスーツはスーツでもマントにボディースーツ着て
いく彼に出来るとても？

そんなダイキのポケットからボールが転がり落ちた

「ん？マスターボール？」

ダイキがマスターボールで捕獲するのは珍しい
一体何を捕まえたんだ

ワタルは軽い気持ちで投げた

「ん？ん？……あら？……つてボール！！」

ダイキは跳ね起きた

ちょうどワタルがボールを投げた所だ

「ワタル！何をやってる！！そいつは……」

ボールが光り…飛び出したのは

「レ…レジギガス？」

レジギガスと言えばスロースターターでお馴染みのポケモンだ
お世辞にも強いとは言えない

じゃあ何故ダイキが直々に捕獲したのだ？

「そのレジギガス…変異個体でな」

ダイキが呟いた

「はつきり言えばスロースターターの特性を無視してやがる…オマケにな」

ダイキは頭を抱えた

レジギガスが地面をぶったたく

「ギイイガアアアアアア！」

クレーターが出来た

「……単純なパワーだけならドサイドン以上なんだよ」

シロナも固まった

「うおおおお！！戻れ！！」

何とかボールに戻したワタル

「……どうにか捕獲したが…俺はドサイドンがすっ飛ぶのを始めてみたよ、タフだったからどうにかなっただがな」

ダイキがシミジミと語る

……苦労したらしい

「まあいいじゃない、一件落着だし！ホラ食堂にいきましょう！」

シロナがダイキの腕を抱えて歩き出す

「分かった、分かったから落ち着いてくれ！」

相変わらずシロナに振りまわされっぱなしのようだ

「……仲睦まじいねえ……」

ワタルは呟いた

その時ポケギアが鳴った

「はい、もしもワタルですが……局長……はい、はい、分かりました」

局長からの電話を切ったワタル

「ライブキャスター支給きたあああああああ！！しかも特注の専用モデルウウウウウウウ！！」

ワタルの叫びが響いた

リハビリ短編 その2（後書き）

新メンバー

レジギガス

遅いがパワーだけならダイキの手持ち最強に躍り出る

さてライブキャスターの話がありました

こいつにはこんな感じのライブキャスターってのが会ったら書き込んでください

参考にします

リハビリ短編続き(前書き)

ありがとうございます---

リハビリ短編続き

ライブキャスター！！

それは最新最先端の機器である

ポケギアの正当進化型とも言えるだろう

「チャンピオン特注モデルって大きく出たな」

ダイキは腕を組んだ

「それぞれイメージカラーや求める物が違いますからね…」

ミクリが言った

「まあ…ポケギアもよかつたんだけどね」

シロナが呟いた

「最新だぞ？最新！アデクさんぐらいしか持ってなかったのに持てるとは…」

ワタルははしゃいでいる

そして、それぞれに新たなライブキャスターが手渡された

ミクリ…青

耐水性に優れている、ミロカロスの姿が刻まれている

シロナ…白

おしゃれ、登録した人物の位置がGPS表示される

トゲキッスが刻まれている

ダイキ…銀

頑丈、ホルスター付き

ドサイドンが刻まれている

ワタル…赤

熱に強い、何気にラジオが高音質

カイリユウが刻まれている

共通点としてC…チャンピオンの頭文字が刻まれている

まさにチャンピオン専用のライブキャスターと言っわけだ

そんなライブキャスター片手に男二人でイツシュに行ったダイキとワタルだが

「どこだここ!？」

「知るか!お前が色違いのオノンド見付けて突っ込んでったんだろ
うが!！」

絶賛遭難中だった

ここへ来てシューティーとやり合った時はそらをとぶを使えるポケ
モンが居た

しかし歩いて探索するかと言う話になり手持ちを変えているのだ

「……………拉致がいかないな、1ON1だ」

ワタルは怒りながらボールに手を掛けた

「上等だ、後悔するなよ、今の私は強いぞ?」

ダイキは挑発しワタルもそれに乗る

「はっ…ひっさしぶりに大バトルといこうか!！」

「かかってこい!！」

二人のボールが高々と舞う

「時空を引き裂け!！パルキア!！」

「轟け咆哮!！レジガス!！」

2人の新ポケが森で激突した

木々が薙ぎ倒され、大地が穿たれ、衝撃波が天を別つ

超古代の伝説ポケモンが神話の再現を今まさに披露している

「あくうせつだん!！」

「おんがえし!！」

ポケモンリーグはイツシュを除き東西南北に別れている
そのなかで東西、つまりカントーとジョウトは双壁を為す強さだ
……現在進行形で地形が変わっている

ラングレーは自称ドラゴンバスターである
アイリスのライバルだ

たまたま森で出会った2人が
「子供ね!!」

「そーよ子供よ!!」
と言い合っていた

が…デントが何かに気付いた
なんか強烈な破砕音がする
そして4人で駆け出した
そして絶句した

「くらえええええ!!りゆうせいぐん!!」

「ギガインパクトオオオオオ!!」
戦争がそこにあつた

ラングレーが倒すべき目標
最強の竜使いワタル

(ムリムリ、何あれ!?)

ラングレー、早くも諦め気味

「……シューティーの時、かなり手加減してたんだね」
アイリスが呟く

「俺、どうしてあの人のカイリキー倒せたんだろ…」

サトシがぼやく

「ああ…森が…」

デントも呆然だ

「かかってこい！！伝説の竜に勝てると思うなああああ！！！」

「振り返ちにしてやろう！古の巨人の力を見るおおおお！！！」

結局直径1？圏内がズタズタになってしまった…

リハビリ短編続き（後書き）

今回のワタルの手持ちのパルキアはワタルが捕まえたものです

レックウザで叩き落とし捕獲しました

忘れてたもの(前書き)

今回は工夫して書いてみました

後書きも見てください

忘れてたもの

夜

ちよつとした隠れ家のような店がコガネの裏路地にある

「にしても…いつの間にかここまで来たんだな」

ワタルが酒を飲みながら言った

「子供から大人…だもんなあ」

ダイキが上を向く

「冒険は今でも胸が踊ります…」

ミクリが笑う

「あら、だから膝の上に…」

シロナが指を指す

「……ファイ」

眠っているマナファイがいた

「マナファイ…か、海の王子様か」

「ピッタリだな」

ワタルとダイキが笑う

「シロナさんも手に入れたらしいじゃないですか？」

ミクリが尋ねる

「ええ、セレビィ!!」

ボールからセレビィが飛び出す

「ビィ？」

シロナを見付けて肩に乗るセレビィ

「こんなポケモンを捕まえられるなんて子供の時は思わなかったな」

ダイキが呟いた

「あれよあれよでチャンピオンだしな」

ワタルも頷く

「……たまに子供の頃が懐かしくならない？」

シロナは尋ねた

「…ありますね」

ミクリは言った

「欲を言えば…もっと旅をしたかったですね、あの頃は楽しかった…何も考えず夢に溢れてた！」

酒が入り出したのか饒舌なミクリ

「ダイゴも言ってたわね、これからもっと旅をしたいって」

「…分かるなその気持ち」

ワタルが天麩羅を食べて言う

「あつという間にチャンピオンになったからなあ…もっと旅をしてみたかったってのもある」

ダイキも言う

才能があつたが故にチャンピオンになった

しかしチャンピオンになったことで子供から直ぐに卒業してしまつたように思える

チャンピオンには責任が伴う

子供には重かつた

……けれど

「けど…後悔なんてしてないよな？」

ダイキが言った

「…当たり前！」「」

皆が言う

「キツかったけど相棒達が入ればへでもなかつたよ」

ワタルが言う

「私はジムリーダーから上がりました、来る日も来る日も戦いばかりでしたけど辛くはありませんでしたね」

ミクリも言う

「結局…この家族とも言える存在と入れるからなのよ、きつとね」

シロナが締めくくる

程よく酒を飲んでるのか、4人とも顔が赤い

「俺はな…実は未だに夢見ていることがあるんだ…分かるか？」

ワタルが手を広げ尋ねる

「奇遇だな、私も変わらない夢がある」

ダイキが酒を飲み干していった

「おや？貴方達もですか」

ミクリが笑う

「あれ、もしかして全員じゃないかしら？」

シロナがはしゃぎながら言う

「らしいな…やっぱりなりたいたいよなあ…」

「……ポケモンマスター」「……」

全員揃った

「よく考えれば俺達が旅だったのってさ！ポケモンマスターになるためだろ！？」

「どうしたワタル？何を今さら……」

ダイキがワタルに聞き返す

「簡単だ！！俺達の旅は終わってないのさ！！だってまだなっていない！なっていないなら今も続いているのさ！！！」

「ハハハハハハ！！！！そりゃそうだ！！なんでこんな簡単な事忘れてたんだ私達は！？」

ダイキが笑う

「ククク、確かに！すっかり忘れてましたね！！」

ミクリも言う

「ポケモンに終わりはないように旅も終わりはないのね……」

シロナが言った

「よおし！！こんなかで誰が最初にポケモンマスターになるか…勝

「負だ!!!」

「そりゃあいい!負けはしないさ!!!」

「良いですね…受けてたちましよう!」

「あら?負けないわよ!!!」

皆が口々に言う

この日、彼らは何か大事な物を手に入れた

『夢を追う勇氣さえあれば、すべての夢は叶えられる』
ルト・デイズニー

ウオ

忘れてたもの（後書き）

最終回ではありませんよ!?

誤解を招きそうなので書いておきます

さて今回の話ですが、ダイキ達はすぐにチャンピオンになり、ミクリもすぐにジムリーダーになりました

つまりは普通の子達とは違う生き方をせざるを得なくなりました

それでも、ただ楽しかった、前を向いて夢を抱いて頑張ってる

そんな過去を書いてみたかったので書きました

くれぐれも『最終回』ではありません!

『最終回』ではありません

大事なことなので三回書きました

ではまた

チャンピオン自身の実力（前書き）

さて投稿します

チャンピオン自身の実力

とある会場

そこは異様な熱気に包まれていた

ダブルバトルカップ

ポケモンリーグ公認の大会だ

そのエキジビションが全国に中継されている

遠く離れたイッシュの地でサトシ達も見ていた

「はやく始まんないかなあ…」

「サトシってば子供ねえ！」

「はいはいアイリスも落ち着いて」

組み合わせは

ジョウト、カントー連合VSシンオウ、ホウエン連合となっている

様々なトレーナーが激戦を演じている

ケッキングが暴れたり、ニドキングが力を振るう

1人のトレーナーが泣き崩れれば1人が雄叫びを上げる

白熱している

「ああ…今回はシンオウ連合の勝ちかあ…」

サトシがぼやく

優勝したのはシンオウのペアだった

「私は最初からわかってたもんね」

「嘘つくなアイリス!!」

「やれやれ…イッシュは独立してるから孤高だなあ、また審判か…」

つてアレは？」

まだ中継は終わってない

大会実行委員長兼デボンコーポレーション理事のダイゴがマイクを持って
持っている

『皆さん！！この戦いをみて白熱された事と思います！！しかし大事な事をお忘れではありませんか？』

会場が静まり返る

『ダブルバトルカップ！！エキジビションを行いますっ！！』
エキジビションと言うのは余興のようなものである

しかし夢のような組み合わせの時もあり皆を驚かせワクワクさせるには充分だ

会場が再びざわめく

「なんだなんだ！？」

サトシ達も注意深く見守る

スタジアムの地面が割れてトレーナーが現れる

『スペシャルマッチの紹介だ！！最強の竜王ワタル、無双の覇者ダイキペア対無血の女王シロナ、歴戦の古豪アデクのタッグマッチ！
審判はミクリが行うぞ！！』

会場が揺れた

「うっそお！！」

「へ…アデクさんでるの！？」

「ホントに…」

デントやアイリスもびっくりしている

アデクは一線引いている事が多いので勝てるか不安だ

……確かに押し負けるだろう

だが画面の向こうのダイキ達は厄介な事になったと頭を掻いていた
単純に言えばキャリアの差だ

アデクはダイキ達が生まれる前からチャンピオンだ

即ち経験が圧倒的に違うのだ
それに秘密の手持ちも持っている

「…厄介だな」

ダイキは頭を抱えた

「技巧派にベテランが組むと手がつけれんぞ…」

ワタルも首を捻っている

ダイキはめずらしくコートを脱いでいる

ストライプのスーツだが背が高いのでよく似合っている

手持ちは三体ずつであり伝説や幻のポケモンは1人1体までのルールだ

「まだまだ若い奴には負けんさ！！あんまりなめるなよ若僧？」

飄々としたアデク

「まさかアデクさんと組むなんて…緊張してきたわ」

シロナは汗をかいている

当たり前だ

アデクは皆にチャンピオンの心得を叩き込んだ先生である

「みつともなかったらもう1回授業と行くか！！」

「…止めてください！アデク先生！！」

アデクさんと言っていたのにいつのまにかチャンピオン教育の時の先生呼びになっていた

全員緊張しているのだろう

「まあいい…では！！」

アデクがボールを構える

『スペシャルマッチの開始イイイイ！！』

審判ミクリの絶叫と共にボールが投げ込まれる

「荒らし回れ！！マンムー」

太古の暴君

マンムー

「出番だ！！ギャラドス！！」

暴れる海の狂者

ギャラドス

「行きなさい！トゲキッス！！」

白い天使

トゲキッス

「ゆけい！シユバルゴ！！」

気高い騎士

シユバルゴ

勝つのは全てを壊す破壊力か！？

はたまた深き知識と優雅なテクニックか！？

凄まじき激突が発生する！！

チャンピオン自身の実力（後書き）

次回は激戦と伝説合戦！！
アデクの伝説にこうご期待！！

激突（前書き）

今回はちょっと批判があるかも

返信はまた後日

激突

「しょうがないが… 決じ開けて貰う！！ マンムー！！ こおりのつぶて！！」

疾風の礫がトゲキツスに襲い掛かる

「定石… 故に読んでおる！！」

シユバルゴが射線に割り込み強制的に遮断した

「ギャラドス！！ りゅうのま」でんじは！！」 なにい！？」

りゅうのまいによる強化をトゲキツスで速攻で防ぐ

「貴方たちは封殺させて貰うわよ？」

シロナが言う

「ちい！！ めんどくさいことを！！」

ワタルが叫ぶ

「ほれほれどうした！？ アイアンヘッド！！」

ギャラドスを遠くにすっ飛ばした

畳み掛ける速攻

開始から早くもアデク達がペースを握った

「トゲキツス！ 上空からエアスラッシュ！！」

「ムウウウウ！！」

ダイキのマンムーに上空から機銃のようなエアスラッシュが降り注ぐ

「フツ… どうだ？ もう一発… アイアンヘッドオ！！」

アデクが言う

ギャラドスが再び宙を舞った

「だああああ！！ ギャラドスう！！」

ワタルが嘆く

『アデクペア圧倒！ 凄まじい猛攻です！！』

実況が告げるようにアデクとシロナが押している

ペースを崩されてワタルが若干動揺している

「戻れマンムー!!!」

ダイキが珍しく交換をした

「ふむ…出るかドサイドン!!!」

「ええ!!!」

アデクとシロナが目を合わせた

アデクはそのままシュバルゴ

シロナはトゲキッスからガブリアスに変えた
が!

「ゴオオオオオン!!!」

土煙を挙げ出てきたのは…カビゴン!!

「なぬ!?!」

アデクが驚いた

ダイキのエースは紛れもないドサイドン

だがここでカビゴンである

ワタルはボーマンダを繰り出した

「ここでカビゴン…まさか」

ワタルはギギギと人形のようにダイキの方を向きながら言った

「やっぱりエース…ドサイドンって前提か…が…今回ドサイドンは
居ないんだなコレが」

ダイキが笑った

ベテランに奇策

敢えて手持ちからドサイドンを抜くと言う暴挙に出た

カビゴンが四股を踏み始め…両手を上に挙げた

「なんのつもりかしら?」

シロナは首をかしげた

「まさか…ボーマンダ!!!まもる!!!」

ワタルは最悪の思考に辿り着いた

「さあ!ご覧くださいオオバクチ!!!何が出るかは神が知る!!!」
カビゴンが両手を振りだす

「……まさかね」

シロナはひきつった

そしてカビゴンが天高くジャンプした

「ゆびをふるだと!? まさかコレは……」

消えたカビゴン

そして

「カアアアアビイイイイイイイイイイイイイイイ……!」

遙か上空から何かが落ちてくる

凄い速さと光を纏って

即ち……

「行けカビゴン……!」

そらをとぶでもなければ跳び跳ねるでもない

「ゴツドバアアアアド……!……!……!」

巨大な鳥と成ったカビゴンが隕石の如くスタジアムに直撃した

「……こんなの読めるものか……」

呆然とアデクは呟いた

「……一気に二体持っていったわね」

シュバルゴとガブリアスを二匹同時に持っていった

「ゴオオン……!」

シャキーンとポーズを決めるカビゴン

「ご苦労……!一回戻れよ……!」

ボールに戻すダイキ

変態ポケモンに好かれる

故に常識に縛られないダイキ

ふつつかビゴンにゆびをふるなんてバクチはしないしこの大一番に

ドサイドン無しなんて考えない

「してやられたわ……だが負けんよ!とう……!」

アデクが飛び上がりボールを投げる

表れたのは

「ラアアアンドロオ……!」

ランドロス！！大地の神！！

そのランドロスに飛び乗るアデク

「おっ！？空中戦に秘蔵の伝説…よっしゃ！！俺も行く！！」

ワタルがボーマンダを戻しレックウザに飛び乗る

「やれやれ…ギラティナ！！」

「…………ギラア！！（泣）」

「早速ビビるなあああああ！！気張らんかいイイイイ！！」

「…………ギラアアアア！！」

叱咤により奮起したギラティナにダイキも飛び乗る

「あらあら…では秘密兵器を出しちゃおうかしら、ラティオス！！」

「ラティ！！」

『おい！！初耳だぞ！？』

「だって言っていないもの」

ワタルとダイキが驚くなかシロナはシレッと言った

伝説による空中決戦が始まるうとしていた…………！！

激突（後書き）

さて次回はシロナの隠し玉ラティオスにアデク秘蔵のランドロスと臆病ギラティナと自重しないレックウザの空中大決戦です

さて…言い訳しましょうか

何故ドサイドンが出ないのかと言うことです

ダイキの奇策と作中で述べて居ました

実は前話のタイトルがチャンピオン自身の実力となっていましたよね？

コレと関連してます

ダイキ自身、変態ポケモンによる力押しではないと言うことです
立派に成長しています

ちなみにレンタルポケモンを使った場合の四人のスタイルは

シロナ 速攻とテクニクによる翻弄

アデク 経験を行かしての読み重視

ダイキ 奇策を交えて引つ掻き回す

ワタル 力による速攻撃破でペース奪取

と言う感じですよ

スカイハイ(前書き)

出来ました!!

マジのキラティナを見よ!!

スカイハイ

疾風の速さで動き回るラティアス
悠然と佇むランドロス

陰影を残し空間を歪曲させているギラティナ
王者の如く君臨するレックウザ

そんなポケモンに跨がり上空に舞い上がったチャンピオン達
「ランドロス！！ストーンエッジ！！」

石の刃が襲い掛かる

「甘い！！この龍王に空中戦を挑もうなんて甘いぜアデクさんよ！！」

身をくねらせ急降下…そして一気に急上昇からの

「ドラゴンクロー！！」

急加速の一撃

「おおっと！！当たらんよ！！」

がランドロスも急旋回し見事回避した

「あら…？うしろがから空きよ！りゅうのはどう！！」

一瞬でラティアスがレックウザの後ろに回り込んだ

「げっ！？」ワタルが焦る

かわせる確率は五分五分

かなりキツいかけになる

が空間が突如としてねじ曲がる

「シャドーダイブ！！」

ダイキとギラティナによる破れた世界からの奇襲攻撃

「…！！、ラティアス！攻撃中止！！」

ラティアスはキリモミ回転でぎりぎり避けた

「ふむ…どうするかな」

アデクは距離を取り考えた

警戒すべきはレックウザ

エアロックのせいですなあらしからの特性をいかせない
恐るべき速さと力を両立したポケモンだ

が…その分脆い

シロナに合図をする

狙うはレックウザ

ダイキはギラティナの上で考えた

レックウザは凄まじい

ダイキ自身同じ状況ならレックウザを狙う

……だからそのトリックプレーだ

殆ど前に出ない…出さないギラティナだからこそ出来る戦法
ラティアスとランドロスが一斉にレックウザにかかる

「……ギラティナ…気張れよ!!」

本来気性が粗い筈だが、臆病ゆえに使うことはしなかった

「ギラアアアアア!!」

ギラティナが燃えている

タイミングは今しかない

ダイキはギラティナの持ち物に手を触れた

「……真のお前を…見せてやれ!!」

黒い光と空間が再びねじ曲がる

「な!?!」

アデク達の動きが止まった

ギラティナの足が無くなる

口がマスクのような物に覆われる

翼はまさに手のように禍々しい

「しまった! フォルムチェンジ!!」

シロナが唾然とする

ダイキのギラティナはアナザーフォルム

いわば仮の姿

そして臆病ゆえにあまり使わなかった真の姿
攻撃特化のオリジンフォーム！

「確かにレックウザは強いさ……だがこの状態のコイツは……すげえぞ？」

レックウザの回りに無数の黒い玉

「アアアアアアアアアア！……！」

シャドーボールが流れ星の如く襲いかかった

「だいちのちから！！！」

ランドロスの力により大地のエネルギーが吹き上がりシャドーボールを消しながらギラティナに直撃した

が……ギラティナは傷が無い

「コイツはシェイミと同じでな……フォームチェンジで特性が変わる、さつきまではプレッシャー……いまはふゆうなんですよね」

ダイキはシロナの様にテクニカルな戦いは出来ない

アデクの様な読みは出来ない

しかし個性豊かなポケモンを生かし方なら群を抜いている

「こっからは……私達のターンだ！！！」

更に空間がねじ曲がる

その亀裂が更に開き……徐々に、徐々に広がり始める

「……まずい！！破れた世界に引きずり込む気か！！！」

グオンと黒い空間が辺りを覆い尽くした

破れた世界

そこは既存の物理法則は一切通用しない異界

ランドロスやラティアスは奇妙な感覚に狼狽えている

レックウザは……破れた世界を天候と認識したのかエアロックで自分の回りだけ無効化しているようだ

「フハハハハハハ！！流石はダイキ！お前は人が思い付かんことをやってのけよる！！ワタルもまた凄まじい強さよ！！……が……舐め

てもらっては困る!!」

アデクが笑う

「フ…フフフ、それでこそダイキよ……良いわ…ワタルはどうでも良いけど」

何かひどい事を言っているシロナ

「どうでも良いのかよ」

「だってダイキは素敵だもの…」

「……若い者はいいな」

「さっきまでの緊張感はどこへ？」

ダイキが頭を抱えた

「ねえダイキ？」

シロナが言った

「なん…だ…?」

目を疑った

「私の愛…受け取って？」

ラティアスがなんかバカでかいりゅうのはどうを準備してる

食らったらヤバイ

「無理だ!! あんなの食らったら負けるわ!!」

叫ぶダイキ!!

「大丈夫!! ケガしたら私が24時間手取り足取り看病してあげるから!!」

「それが目的か!？」

冷や汗をかくダイキ

相変わらずダイキが関わるとダメナである

が…極めてきつい状態だ

圧倒的有利な空間に引きずり込んだが変な風に覚醒したシロナと威
圧感が増したアデク
気を抜けない

伝説空中戦第2ラウンドが始まる…！

スカイハイ（後書き）

次回で伝説終了、最終決戦です

なんか短篇書きたいな

レジギガスの話が

皆さんの質問を大量に受け付けてチャンピオンズに答えさせるラジ

オカ

迷うなあ

意見があればお願いします

お知らせ!! (前書き)

今回はお知らせになります
そこそこ重要です

お知らせ!!

いつも読んでくださり誠に感謝しております
カンバンでございます

さて、本編は明日には投稿する予定ですが…

その前に!!

このダイキのトレーナー日和がPVが245万アクセスを超えまし
た!!

更にお気に入り登録件数もついに1000件を突破いたしました!!
これも全て皆様のお陰です

長期間の停止も合った中の記録です…本当にありがとうございます
!!!!!!

つきましては記念企画として以前提案していたラジオ形式で短編、
質問コーナーをやりたいと思います

皆さんがこの小説（作者）で疑問に思ったことや質問をダイキ達チ
ャンピオンが答えていきます

全ては難しいですが全員の質問に答えられるよう頑張りたいと思います

形式ですがラジオネームが無い場合は作者様のお名前を使用させて
いただきます

また作者様のキャラクターが質問した場合にはそのキャラクターと
作品名を記させていただきます

作品名が無く、キャラクターのみの場合は、自分で調べて記させて

いただきます

が万が一が間違いがあつては不味いので質問に作品名を書いていた
だけると助かります

質問は特に制限は設けませんなるべくポケモンに関係した話でお
願います

(私、カンバン自身への質問であればその限りではありません)

また気軽にリクエストがあれば言ってください
それにもまたお答え出来る限りいたします

この物語も一重に皆様のお陰であります

直ぐと言つわけではありませんが実は最終部の構想自体は既に出て
います

最終部も皆さんの腹筋を爆発させるようなギャグを搭載する予定です

それではまたこの物語をよろしく願いたします

お知らせ!! (後書き)

この企画は皆様の意見によって作られます
皆様の質問、疑問をお待ちしております

激戦（前書き）

なんとか出来ました！！

激戦

「ぬうわああああ!!」

ダイキは急旋回を繰り返している

「フフフフ……」

なんか変なスイッチが入ったシロナから逃げ回っているのだ

「クソ!! シャドーボール!! 連弾!!」

シャドーボールがガトリングガンの如く発射される

「聞かないわよ!!」

が更にその隙間を縫うようにラティアスが迫る!!

「うおおお!! シャドーダイブ!!」

破れた世界にいるため潜伏効果はないが……

「ワープ!？」

世界を操作して自由自在に転移が可能になる

攻撃的スタイルな筈が逃亡に回っている

「……………」

ワタルは無言のままレックウザを操っている

最強の竜王と名乗るだけあり会話無くレックウザに指示を出している

「どうした!? 逃げ回っては話にならんぞ!？」

アデクが挑発する

が不気味なほど返事をしないワタル

(何を考えているのだ?)

アデクは考え込んだ

あの生粋のパワーファイターのワタルが策を用いるのは考えづらい

ダイキがトリッキーならワタルは蹂躞のスタイルだ

そのワタルが何もせずレックウザと共に逃げ回るだけとは不可思議だ

「……りゅうせいぐん!!」

向こうではギラティナとラティアスのりゅうせいぐんがぶつかり合

っている

戦争とはよく言ったものだ

凄まじい数がぶつかり合っている

「……………って……………るか？」

何かが聞こえた

「何だ？」

アデクが振り向いた

「ドラゴンを知っているかって言ったんだ……………」

アデクが首をかしげた

そんなのは当たり前だ

「伝説や幻の生き物……………故に最強……………」

ワタルは手を握った

「彼らは気高く賢い……………だからこそ共に歩むことも難しい」

ワタルが朗々と言い上げる

「しかし……………もし歩むことが出来たなら……………とても頼もしい仲間になる」

何を当たり前のことをと、アデクは思った

「だからこそ俺はドラゴン使いだ……………竜王の名は伊達じゃないんだよ

……………力は溜まった、行かせてもらう」

レックウザを見た

「なんだコレは!？」

レックウザから蒸気が上がっている

「真正正銘、全力全開のげきりんをぶちかましてやる」

レックウザから強烈なエネルギーが放たれる

「こ……………コレは!？」

ダイキが引いた

ダイキが引くレベルのエネルギーが既に放出されている

「ギヤアアアアアアアアアア!……………!」

レックウザが天に吼えた

「俺はワタル!最強にして絶対の竜王!……………いかなる障害も……………俺の前に立ちほだかるならば!……………その全てを薙ぎ払ってくれる!……………レック

ウザの…真のげきりんを喰らうが良い!!」

レックウザがげきりんを放った瞬間

ダイキはヤバイと感じた

ミシリミシリと破れた世界が悲鳴を上げる

「まさか…うおおおおお!!?」

「ギラアアアア…!!」

もはや光の珠と貸したレックウザが暴れまわる

敵味方関係なしの大暴れだ

一撃が当たっただけでギラティナがダウンした

「なっ!!マンムー!!」

再びマンムーを繰り出し飛び乗るダイキ

「ムウウウウウ!!!!」

マンムーがクツションになり地面に着地した

そしてそれから僅かのうち

破れた世界が完全に崩壊した

「ワシのランドロスとラティアスが一撃とはな」

トゲキツスにつかまり降りてきたシロナ

そして切り札のウルガモスに捕まっているアデクが着地した

バサリバサリとポーマンダが着地する

「レックウザには無理させたな…が、勝算ができた、ダイキ、押しきるぞ!!」

ワタルが言う

「……お前ホントにワタルか？」

あまりのカリスマにダイキが尋ねている

「何言ってるんだ？気は抜くなよ…一瞬でひっくり返りかねん」

ワタルが続けて言う

ダイキもシロナを睨み付ける

「……さあ…ラストワルツになるのかしらね？」

シロナが髪を掻き上げた

「まだ負けるわけにはいかん！・ワシの底力を舐めるなよ！？」

激突はいよいよ佳境へ…

激戦（後書き）

さあいよいよ佳境へ！！

ペースはワタル達ですがアデクはまだまだ強いですよ？

質問も受け付けてますのでドンドン書いてくださいね

決着（前書き）

決着です！！

次回は記念ラジオ！お楽しみに！！

決着

「どこのバケモンだ!？」

ワタルが叫んだ

「ボーマンダを……押してるだあ!？」

ダイキも目を見開いている

「切り札は最後に取っとくもんだ……爪が甘いわあ!?!」
アデクの一喝

最強のドラゴン族の一角、ボーマンダがウルガモスに押されている

「だいもんじが当たらん!?!」

ワタルが歯噛みする

ウルガモスが速すぎる

「トゲキッス!?!はどうだん!?!」

「だあああ!?!マンムー!?!穴を掘って逃げる!?!」

「ムウウウウ!?!」

間一髪地面に逃げ込んだマンムー

「どうした?…むしのさざめき!?!」

ボーマンダを圧倒的に追い詰める

「はどうだん!?!はどうだん!?!はどうだん!?!」

はどうだんは必中技だ

それをマンムーは無理矢理穴を掘って避けている

「もぐら叩きか!?!反撃できん……!」

ダイキが頭を捻った…その時だった

「油断したなあ!?!ウルガモスよ!?!穴に向かってオーバーヒート!
!」

「しまっ!?!」

「モオオオオオオ!!」

ウルガモスが放った超高熱が穴にいるマンムーに直撃した
「ムウウウ……!!」

大ダメージをおい飛び出したマンムーを

「トゲキツス…はどうだん!!」

はどうだんが直撃した

堪らず倒れ伏すマンムー

「ちい!!マンムーよ……カビゴン!!」

再びのカビゴン

(……もうゆびをふるは使えん…かと言ってグダグタしてたらはど
うだんの餌食だ…となれば…)

……1つ思い付いた

がワタルに内緒話をしてる暇はない

気付いてくれよ…!!

ワタルはカビゴンが四股を踏む轟音が響き思わず見てしまった

その時

ダイキのボールに違和感を覚えた

一個だけボールが逆さまなのだ

(……なんで逆さま?…おかしい、ダイキはズボラじゃ……!!)

ワタルが何かに気付いた

「ボーマンダ!!まもる!!」

ちょうど運良くウルガモスがだいもんじを放った瞬間のため、考え
は読まれないだろうとワタルは思った

「ふっ…守られたか…だが次はない!!」

「エアスラツシュ!!」

シロナのトゲキツスも上空のボーマンダに追撃を仕掛ける

しかしまもるの効果で聞いていない

「残念だが…次はない!!」

全員が驚愕した

ダイキが叫んだ瞬間…カビゴンが大地を踏み締め飛び上がった
見事な大ジャンプだ

「いっちょよう咲かせて見せましょう!八尺玉つてなあ!!」

ダイキが高らかに叫んだ!!

「カビ!」

カビゴンが何故かニヒルな笑みをウルガモス達に見せ付けた

「カビゴン!!じばくだああああ!!!!!!」

「ゴオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!」

巨大な大爆発が上空で巻き起こった

数瞬後…カビゴン、ウルガモス、トゲキッスがダウンして、ボーマンダが悠々と降り立った

「……………負けたか…」

アデクが呟いた

「正直ギリギリ……………本気で頭使ったぞ、アデクさん出し抜くなんてもう出来ん…」

ダイキが地面にへたり込んだ

「にしても…なんでじばくが読めたのよ?」

シロナがワタルに訪ねた

「ああ、ダイキの腰のモンスターボールが引っくり返っててな…マルマイン見たいに見えたんだよ、マルマインと言えば爆発だよなと思った時にカビゴンがじばくが使えるのを思い出してな、これはじばくだ!と」

言っでは悪いがワタルは単純である

単純であるが故に発想が素直なのだ

ダイキは一か八かそこにかけて…見事に賭けに勝ったと言うわけだ

『勝者！！ワタル、ダイキ組！！皆様！！盛大な拍手を！！』
実況の宣言と共に割れんばかりの拍手が起きた

「そう言えばドサイドンどこに居るんだ？」

「……シロガネ山だ」

「……何だってそんな所に？」

「あいつの言葉が分かる訳じゃないがな……アイツにも申いたい奴
が要るってことだ」

「……成程な」

決着（後書き）

感想はまた後日返信します

さてドサイドンが何処に行ったかと言うと甲い…お墓参りです
理由は男…ドサイドンの話を見ていただければ分かります
エキセントリックなドサイドンだって悲しくもなります

第四部開始（前書き）

すみません

お待たせしました！

ラジオはもう少し待って下さい！！

第四部開始

「……………本当にここか？」

ワタルと調査に出掛けたダイキ

「セレビィが騒ぎだしてるんだ、ウバメの森しかないだろ」

切っ掛けはセレビィの出現情報が多発しているのだ

滅多に出ないポケモンが出現しているときは何らかの異変が起きて
いる事が多い

だからこそ早めの調査が必要だ

「セレビィつてのが厄介だな」

ワタルが呟いた

「だろうな、時渡りされたら敵わん」

ダイキも同意する

過去、未来全てに行き来できる驚異的な力

時空の神ディアルガに匹敵する力だ

さっさと対策をとらないとヤバイ

その時だ

「は!?!」

目を瞑るほどの閃光

「目が見えん!!何なんだ!?!」

ワタルが絶叫する

「……………おい!?!まさか」

ダイキが青ざめる

閃光の中に影がみえる

「セレビィの時渡り!?!」

ダイキの怒鳴り声が響いた

「んだと!?!退避だ!?!退避!?!」

「分かつてる!!」
ダイキとワタルは一端退却すべく全力で振り返った瞬間……為す統
べなく呑み込まれた

「は？」

「お？」

ダイキとワタルは目を見開いた

閃光に飲み込まれて……

「空アアアア!？」

天高く投げ出されていた

「うおおお!？死ぬ死ぬ死ぬ!!」

大パニックになるワタル

「しっかり捕まれワタル!!」

サツサとカイリユー出せば良いのだがいきなりの事で中々つかめない
しょうがないのでダイキの腕をガツシリ掴む

「ゴルグー!!高速飛行形態!!」

ボールから飛び出したゴルグーが変形する

手足を引っ込めて巨大なロケットになる

その状態でダイキ達を回収した

地面に着地するダイキ達

「ここ……どこだよ」

ワタルがぼやいた

森は森だが近くに巨大なタワーが見える

スーツも汚れたし……!とブツブツ文句のワタル

が……一昔前の真つ白のサタデーナイトフィーバーなスーツだ

はつきりいつて正気の沙汰ではない

「……冗談だろ？」

ダイキがライブキャスターを覗いて呟いた

ライブキャスターの電波は常に修正されて時間は狂わない
「ワタル……ここ、200年くらい未来のウバメだわ」

「は？はああああ！？」

ワタルは何回目かになるが絶叫した

「どういつこつたよ！？戻れんのか俺たちは！？」

何よりも重大な点である

「……セレビイは過去、現在、未来の自分と同期していると言っ説がある」

ダイキは話し出した

こう見えても歴史学者のはしくれでもある

「この未来に何かとんでも無い危機があるとしたら……過去の、つまり私達の現在のセレビイが異変を起こすことは考えられる」

未来のセレビイのSOSを現在のセレビイが受け取り、周辺を巻き込んで、解決のために時渡りをするにはあり得る話だ

その時だ

近くで怒鳴り声がある

「アツチだ！！」

ワタルは速やかに走り出す

1人の背の高い少女が囲まれている

「クツ……クリムガン……」

彼女のクリムガンはボロボロだ

「キヒヒヒ……もう世界征服間近のロケット団によ……」

「ケンカうるなんてなあ……呆れるぜ」

「ま……反乱分子は消えてもらうか」

3人のロケット団が少女を囲む

ゲンガー、クロバット、ヘルガーが睨み付けている

「じゃあ…バイバイ、ヘルガー、ほのおの「やかましいわ!!はかいこうせん!!」えええええ!!」

乱入してきたワタルのカイリユーによりヘルガーが消し炭になった

「はええんだよお前は!!ゴルグ、シャドーパンチ!!」

そらをとぶの勢いでゴルグがゲンガーにシャドーパンチを叩き付けた

「……………はい?」

一瞬で2人がやられた

はつきり分かる点がある

(俺じゃ勝てん!!)

クロバットをボールに戻し振り返った瞬間だった

「逃げるな!!」

チャンピオン2人のハイキックが決まった

「ふう…で、アンタ無事か?」

ワタルが少女を助け起こす…が

「アンタ達!!何て事をしたんだ!!」

何故か怒鳴られた

「はい?」

ダイキが首を捻った

「私なんか助けて!ロケット団にケンカ売るなんて自殺行為だよ!

」

……………どうやらロケット団は相当極悪になっているらしい

「そりゃすまん、けど子供を守るのは大人の義務だ…名前は?」

すると少女が胸を張り叫んだ

「私は反ロケット団団体のリーダー!!、御先祖の竜王ワタルの再

来！サヤだ！！！！」

ドーンと胸を張りビシッとポーズを決めた

ワタルはぶっ倒れそうになり

ダイキはあのポーズや自信満々の態度に、赤髪から

（あ、ホントにワタルに似てる）と現実逃避していた

第四部開始（後書き）

始まりました未来編！！

さっそくワタルの子孫に出会いました

この時代のロケット団は極悪です

さてダイキ達は元の世界に帰れるのか！？

シリアスもありますが大半はギャグです

一応最終章の位置付けになります

ではまたお会いしましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5116o/>

ダイキのトレーナー日和

2011年12月19日00時45分発行